

はじめに

本シラバスは、京都大学薬学部（2018年度以降入学者）の2019年度開講科目（一部、全学共通科目として提供されている科目を含む）に関して、講義、演習および実習の目的・趣旨、内容の概略等を科目別に紹介したものです。学生諸君が選択科目の履修計画を立てるに当たって科目の選定に役立ててください。また、教員が各自の授業内容を明示することによって、他の教員による授業内容との連携を把握するのに役立ててください。

京都大学薬学部（2018年度以降入学者）における学習に本シラバスが大いに活用されることを望みます。

京都大学薬学部

目 次

基礎物理化学 (熱力学)	1~2	衛生薬学 II (環境衛生学)	80~81
基礎有機化学 I	3~4	生理学 I (基礎生理学)	82~83
基礎有機化学 I I	5~6	生理学 II (病態生理学)	84~85
基礎化学実験	7~9	生理学 III (臨床生理学)	86~87
「薬の世界」入門	10~11	薬理学 I	88~89
健康・生命科学入門	12~13	薬理学 II	90~91
薬用植物学	14~15	薬理学 III	92~93
情報基礎	16~17	薬剤学 I (製剤学)	94~95
情報基礎演習	18~19	薬剤学 II (薬物動態学)	96~97
科学コミュニケーションの基礎と実践 (薬・英) A-E3	20~21	臨床疾病論 A	98
科学コミュニケーションの基礎と実践 (薬・英) B-E3	22~23	臨床疾病論 B	99~100
有機化学 I	24~25	臨床疾病論 C	101~102
有機化学 II	26~27	臨床疾病論 D	103
有機化学 III	28~29	臨床疾病論 E	104
有機化学 IV	30~31	臨床疾病論 F	105
医薬品化学	32~33	臨床疾病論 G	106~107
天然物薬学 I (天然物化学)	34~35	薬学研究 SGD 演習	108~109
天然物薬学 II (ケミカルバイオロジー)	36~37	基礎創薬研究	110~111
天然物薬学 III (生薬学・漢方)	38~39	基礎臨床研究	112~113
創薬有機化学演習	40~41	多職種連携医療体験実習	114~115
物理化学 I (量子化学)	42~43	早期専門研究体験	116~117
物理化学 II (電気化学・ナノ化学)	44~45	早期専門研究体験	118~119
物理化学 III (構造化学)	46~47	薬学科モデルコアカリキュラム/科目対応表	120~129
物理化学 IV (生物物理化学)	48~49		
分析化学 I (化学分析学)	50~51		
分析化学 II (放射化学)	52~53		
分析化学 III (機器分析化学)	54~55		
分析化学 IV (臨床分析学)	56~57		
基礎科学演習	58~59		
創薬物理化学演習	60~61		
生物化学 I (物質生化学)	62~63		
生物化学 II (代謝生化学)	64~65		
生物化学 III (分子生物学)	66~67		
生物化学 IV (応用生物分子科学)	68~69		
生物化学 V (細胞生物学)	70~71		
生物化学 VI (生理化学)	72~73		
感染防御学 I (微生物・ウイルス学)	74~75		
感染防御学 II (免疫・ウイルス学)	76~77		
衛生薬学 I (健康化学)	78~79		

科目ナンバリング		U-LAS13 10003 LJ60						
授業科目名 <英訳>	基礎物理化学 (熱力学) Basic Physical Chemistry (thermodynamics)			担当者所属 職名・氏名	薬学研究科 准教授 星野 大 薬学研究科 講師 矢野 義明			
群	自然科学科目群		分野(分類)	化学(基礎)		使用言語	日本語	
旧群	B群		単位数	2単位	週コマ数	1コマ	授業形態	講義
開講年度・ 開講期	2019・後期	曜時限	金2		配当学年	主として1回生	対象学生	理系向
【授業の概要・目的】								
物質の状態と自然の自発的過程を規定する巨視的ポテンシャル論としての熱力学の基礎知識と技能を、生物科学や薬学の基礎的問題を加味した講義と演習をとおして履修する。								
【到達目標】								
<p>気体の分子運動とエネルギーの関係について説明できる。</p> <p>熱力学における系、外界、境界について説明できる。</p> <p>熱力学関数を使い、自発的な変化の方向と程度を予測できる。</p> <p>ギブズエネルギーと平衡定数の関係を説明できる。</p> <p>平衡定数に及ぼす圧力および温度の影響について説明できる。</p> <p>希薄溶液の束一的性質について説明できる。</p> <p>活量と活量係数について説明できる。</p>								
【授業計画と内容】								
第1回 熱力学の位置づけ 第2回 気体の性質と熱力学第一法則 第3回 エンタルピー、熱容量、熱化学 第4回 エントロピー と熱力学第二法則 第5回 ギブズ自由エネルギー 第6回 第一法則と第二法則の結合 第7回 統計力学エントロピー と熱力学エントロピー 第8回 純物質の相図 第9回 相の安定性と相転移 第10回 ギブズエネルギーと化学ポテンシャル 第11回 混合のギブズエネルギー、エンタルピー、エントロピー 第12回 ラウールの法則・ヘンリーの法則 第13回 希薄溶液の束一的性質 第14回 実在溶液と活量・活量係数 第15回 期末試験 第16回 フィードバック								
【履修要件】								
特になし								
【成績評価の方法・観点及び達成度】								
期末試験 (85点) と平常点 (小テスト : 15点) により評価する。								
----- 基礎物理化学 (熱力学) (2)へ続く -----								

基礎物理化学（熱力学）(2)

[教科書]

千原・中村訳 『アトキンス「物理化学（上）第10版」』（東京化学同人）ISBN:978-4-8079-0908-7
（第8版でもよい）

[参考書等]

（参考書）

原田 義也 『物理化学入門シリーズ「化学熱力学」』（掌花房）ISBN:978-4-7853-3418-5

大沢 文夫 『大沢流手づくり統計力学』（名古屋大学出版会）ISBN:978-4-8158-0674-3

[授業外学習（予習・復習）等]

毎回小テストを実施するので、その内容をしっかり復習・理解すること。

[その他（オフィスアワー等）]

熱力学は自然科学の基礎なので、高校理科の履修経歴によらず理解に努めてください。

科目ナンバリング		U-LAS13 10007 LJ60					
授業科目名 <英訳>	基礎有機化学 I Basic Organic Chemistry I			担当者所属 職名・氏名	薬学研究科 講師 瀧川 紘		
群	自然科学科目群		分野(分類)	化学(基礎)		使用言語	日本語
旧群	B群		単位数	2単位	週コマ数	1コマ	授業形態 講義
開講年度・ 開講期	2019・前期	曜時限	水3		配当学年	主として1回生	対象学生 理系向
[授業の概要・目的]							
<p>すべての分子は原子と原子がつながって構成されている。では原子同士はどのようにして結合し、多様な分子を形成するのであろうか？分子は化学構造の違いによりどうして異なる性質（物理的、化学的もしくは生物学的）を示すのだろうか？分子の多様な反応性（結合の生成や切断）は、何に起因するのだろうか？これらの疑問に答える学問が有機化学である。</p> <p>本講義では、有機化学の講義と問題演習を通し、分子の構造と性質および反応性に関する基本概念・知識を習得することを目的とする。また、本授業では医薬品化学や生命化学に関連したトピックも時折紹介し、マクロな生命現象にも有機化学が深く関わっていることについて紹介する。</p> <p>有機化学の基礎は整然と体系化されており、決して暗記の学問ではない。すなわち、有機反応は自然節理に基づいて進行するものであるため、基本原理や法則を理解することが重要である。有機化学の基礎を習得すれば、複雑な現象も自己で考えることができるようになり、サイエンスとしての広がりや奥の深さを堪能することができるようになるだろう。誰でも全く新しい化合物や反応の創造者となり得る魅力的な学問である。ぜひとも前向きな態度で受講していただきたい。</p>							
[到達目標]							
<ul style="list-style-type: none"> ・有機電子論的および軌道論的観点から有機化合物の基本的性質を理解する。 ・有機化合物の命名の基礎について理解し、化合物名と分子構造を関連づけられる。 ・有機分子の三次元構造を理解し、安定構造を説明できる。 ・アルカンやシクロアルカン、アルケンの基本的な性質を理解できる。 ・有機反応における電子の動きを矢印で説明できる。 							
[授業計画と内容]							
<ol style="list-style-type: none"> 1．オリエンテーション：身の回りの有機化学 2．（1章）有機分子の構造と結合：イオン結合と共有結合、Lewis構造式 3．（1章）分子の三次元構造：原子軌道と分子軌道、混成軌道 4．（1章&2章）分子の極性：電気陰性度、共鳴効果、誘起効果 5．（2章）酸と塩基：ブレンステッド酸・塩基、ルイス酸・塩基 6．（3章）アルカン1：様々な官能基 7．（3章&4章）アルカン3：立体配座 8．（4章）シクロアルカン1：命名法、シーストランス異性、環ひずみ、立体配座 9．（9章）立体化学：キラリティー 10．（9章）立体化学：エナンチオマー、ジアステレオマー 11．（5章）有機反応の概観：反応機構の書き方 12．（5章&6章）アルケンとアルキン1：命名法と性質 13．（6章）アルケンとアルキン2：アルケンの基本的な反応性 14．総合学習と復習 15．期末試験 16．フィードバック（詳細は別途連絡） 							
----- 基礎有機化学 I (2)へ続く -----							

基礎有機化学Ⅰ(2)

小テストを通じて履修者の理解度を意識しながら授業の進度を調整することがあるため、上記授業計画と若干のずれが生じることがある。

【履修要件】

本講義は薬学部のクラス指定授業である。他学部生の履修も可能であるが、基礎有機化学Ⅱ（大野浩章教授）と連携して講義を行うので、連続した履修が望ましい。

【成績評価の方法・観点及び達成度】

定期試験（90点）、小テスト[講義への積極的な参加]（10点）により評価する。
中間試験を実施する場合は初回の講義に予告する。中間試験の成績は定期試験の成績に含む。

【教科書】

John McMurry 『マクマリー有機化学 生体反応へのアプローチ（日本語訳版）』（東京化学同人）
ISBN:978-4-8079-0691-8

【参考書等】

（参考書）

奥山格、杉村高志 『電子の動きでみる有機反応のしくみ』（東京化学同人）（入門からやり直したい場合・初修者用）

Jonathan Clayden, Stuart Warren, Nick Greeves 『ウォーレン有機化学 上・下（日本語訳版）』（東京化学同人）（さらに深く勉強したい場合）

日本薬学会編 『化学系薬学Ⅰ．化学物質の性質と反応』（東京化学同人）（薬学6年制教育のコアカリに準拠した教科書です。）

『分子模型セット』（メーカーは問いません。）

【授業外学習（予習・復習）等】

予習：授業時の理解が非常に深まるため、あらかじめ教科書を通読することを薦める。

復習：教科書にある練習問題や章末問題を解いて自分の理解度を確かめる。全く分からなかった問題があった場合は、教科書にあるその項目や授業時に記録したノート等を精読して復習する。

【その他（オフィスアワー等）】

授業中、わからないことについては積極的な質問を期待する。

科目ナンバリング		U-LAS13 10010 LJ60						
授業科目名 <英訳>	基礎有機化学II Basic Organic Chemistry II			担当者所属 職名・氏名	薬学研究科 教授 大野 浩章			
群	自然科学科目群		分野(分類)	化学(基礎)		使用言語	日本語	
旧群	B群		単位数	2単位	週コマ数	1コマ	授業形態	講義
開講年度・ 開講期	2019・後期	曜時限	水3		配当学年	主として1回生	対象学生	理系向
[授業の概要・目的]								
本講義では、アルケンとアルキンの反応、芳香族化合物、および置換反応や脱離反応等の基本を修得するために、類例を用いて化合物の構造と性質を理解するとともに、各反応のメカニズムを理論的に考察する。								
[到達目標]								
<ul style="list-style-type: none"> ・アルケンの代表的な反応を理解し、反応の立体選択性について説明できる。 ・アルキンの代表的な反応を理解し、簡単な合成計画を立案できる。 ・芳香族化合物の基本的性質と反応性を理解し、求電子置換反応について考察できる。 ・立体化学について理解し、立体異性体や反応の立体化学について説明できる。 ・置換反応と脱離反応を理解し、反応物の構造や反応溶媒が与える効果について考察できる。 ・アルコール、アミン、および関連化合物の基本的な性質と反応性を理解する。 								
[授業計画と内容]								
<p>基本的に以下の計画に従って講義を進める。 ただし講義の進捗状況に応じて、同一テーマの回数を変えることがある。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1．アルケンとアルキンの反応1：アルケンのハロゲン化、水和、還元 2．アルケンとアルキンの反応2：アルケンの酸化、ラジカル付加 3．アルケンとアルキンの反応3：共役ジエンとアルキンの反応 4．芳香族化合物1：命名、Hückel則、芳香族ヘテロ環、多環式芳香族 5．芳香族化合物2：求電子置換反応 6．芳香族化合物3：求電子置換反応における置換基効果、酸化と還元 7．立体化学1：エナンチオマー、ジアステレオマー、メソ化合物 8．立体化学2：反応の立体化学 9．ハロゲン化アルキル1：命名、合成、SN2反応 10．ハロゲン化アルキル2：SN1反応 11．ハロゲン化アルキル3：脱離反応 12．ハロゲン化アルキル4：反応のまとめ 13．アルコール、フェノールとチオール1：命名、アルコールの合成と反応 14．アルコール、フェノールとチオール2：チオール、エーテル、スルフィド 15．フィードバック（別途連絡予定） 								
[履修要件]								
本薬学部開講科目「基礎有機化学」は、同じく薬学部開講科目である「基礎有機化学」（瀧川講師）を基盤とした発展的な授業であるため、連続した履修が望ましい。								
-----基礎有機化学II(2)へ続く-----								

基礎有機化学II(2)

[成績評価の方法・観点及び達成度]

定期試験（80%）及び平常点（出席状況及び小テスト、20%）により評価する。

[教科書]

マクマリー『有機化学 - 生体反応へのアプローチ -』（東京化学同人）ISBN:9784807906918（本教科書に従って授業を進める）

[参考書等]

（参考書）

ブルース『有機化学 第7版 下』（化学同人）ISBN:9784759815856

『HGS立体化学分子模型 4010学生用セット』（丸善）（他の分子模型でも代用できる）

[授業外学習（予習・復習）等]

授業終了後に対応する教科書範囲について各自で復習を行うこと。
すべての例題と章末問題に取り組むことが望ましい。

[その他（オフィスアワー等）]

1回生はクラス指定の時間に受講すること。

小テストの解答例は次回講義冒頭で説明する。小テストは試験対策だけではなく、日々の復習の材料として利用することが望ましい。

授業や授業外学習においてわからないことがあれば、講義終業後あるいはオフィスアワー中に質問に来ることを歓迎する。

科目ナンバリング		U-LAS13 10011 EJ60						
授業科目名 <英訳>	基礎化学実験 Fundamental Chemical Experiments			担当者所属 職名・氏名	人間・環境学研究科 教授 吉田 寿雄 人間・環境学研究科 教授 田部 勢津久 人間・環境学研究科 基礎化学実験授業担当教員 地球環境学舎 教授 梶井 克純 理学研究科 助教 中曽根 祐介 人間・環境学研究科 教授 津江 広人 国際高等教育院 准教授 宮下 正弘 人間・環境学研究科 助教 山本 旭 人間・環境学研究科 教授 小松 直樹 地球環境学舎 助教 坂本 陽介 理学研究科 准教授 植田 浩明 国際高等教育院 教授 中村 敏浩 理学研究科 助教 藤橋 雅宏 理学研究科 教授 渡邊 一也 工学研究科 助教 富田 修 非常勤講師 高橋 知子 薬学研究科 准教授 申 惠媛 理学研究科 助教 八田 振一郎 化学研究所 助教 塩谷 暢貴 非常勤講師 山本 潤子 薬学研究科 講師 瀧川 紘 農学研究科 助教 中沢 威人 化学研究所 助教 森崎 一宏 薬学研究科 助教 井貫 晋輔 薬学研究科 助教 三宅 崇仁			
群	自然科学科目群		分野(分類)	化学(基礎)		使用言語	日本語	
旧群	B群		単位数	2単位	週コマ数	2コマ	授業形態	実験
開講年度・ 開講期	2019・後期	曜時限	月3・4/火3・4/水3・ 4/金3・4		配当学年	主として1回生	対象学生	理系向
【授業の概要・目的】								
物質を実際に手に取り、その性質や反応を自分の目で観察することは、物質をあつかう学問である化学を学習する上で欠くことのできない作業である。目に見えない原子・分子の世界に対する洞察力を養うことが本実験の主要な目的である。また、化学実験についての器具操作法と実験手法を習得すると同時に、実験の安全と環境保全の基本を学ぶことをあわせて目的とする。								
【到達目標】								
<ul style="list-style-type: none"> ・ 実験の目的と各操作の関連について理解する。 ・ 実験の進め方を理解し、実際の操作が正しくできるようにする。 ・ 実験実習をこなし、レポートを作成するアカデミックスキルを養う。 								
【授業計画と内容】								
(履修申し込みについては、 http://www.z.k.kyoto-u.ac.jp/zenkyo/guidance の「実験・実習の履修について」を参照すること。)								
下記のテーマについて、実験を行う。								
基礎化学実験(2)へ続く								

基礎化学実験(2)

1. 無機定性分析実験

- (1) Fe^{3+} , Al^{3+} の基本反応
- (2) Ag^+ , Pb^{2+} の基本反応・ Cu^{2+} , Bi^{3+} の基本反応
- (3) Ni^{2+} , Co^{2+} , Mn^{2+} , Zn^{2+} の基本反応
- (4) 未知試料の分析

2. 容量分析実験

- (1) キレート滴定
- (2) ヨードメトリー
- (3) 酸化反応速度の測定
- (4) 活性炭によるシュウ酸の吸着

3. 有機化学実験

- (1) 有機定性分析
- (2) 色素と蛍光
- (3) p-アニシジンリンのアセチル化
- (4) ニトロ化および加水分解

【履修要件】

高等学校等において化学実験の経験がなくても履修可能である。

【成績評価の方法・観点及び達成度】

本実験は化学実験の基礎であり、実際の操作を繰り返し行うことが不可欠であるので出席を重視する。出席状況と実験態度とレポートによって評価する。

【教科書】

京都大学大学院人間・環境学研究科化学部会編 『基礎化学実験・第2版』（共立出版）ISBN:978-4-320-04401-2（京大生協吉田ショップにて販売。昨年のもとの内容が異なるところがあるので新しいものを購入すること。）

（関連URL）

<http://www.chem.zenkyo.h.kyoto-u.ac.jp/>

<http://www.chem.zenkyo.h.kyoto-u.ac.jp/operation/>

【授業外学習（予習・復習）等】

実習を行うに当たっては、事前に必ず教科書を読んで、予習しておくこと。実験ノートを用意し、実習の進め方をまとめておくことよい。実習後は結果をまとめて考察し、期限までにレポートを必ず提出すること。

【その他（オフィスアワー等）】

本実験は理系学部の専門授業の基礎となる実験授業であり、化学関係の全学共通科目講義授業とあわせて履修することが望ましい。

【注意事項】

履修申し込みについては、<http://www.z.k.kyoto-u.ac.jp/zenkyo/guidance> の「実験・実習の履修について」を参照のこと。

詳細は9月中旬に掲示するので注意すること。

受講申込を済ませた後、初回の授業である実験ガイダンスに必ず出席すること。

基礎化学実験(3)へ続く

基礎化学実験(3)

履修希望者多数の場合は抽選を行う。

履修登録確定後，教科書および保護メガネを購入すること。また万一に備え，教育推進・学生支援部で取り扱っている「学生教育研究災害傷害保険」に加入しておくこと。

Web配信動画資料「基礎化学実験 基本操作」を参考にしてもらいたい（上記[教科書]の欄にある関連URLを参照のこと）。

科目ナンバリング		U-LAS40 20019 LJ26									
授業科目名 <英訳>		「薬の世界」入門 Introduction to Pharmaceutical Sciences and Ethics				担当者所属 職名・氏名		薬学研究科 教授 中山 和久 薬学研究科 教授 松崎 勝巳 薬学研究科 教授 加藤 博章 薬学研究科 教授 金子 周司 薬学研究科 教授 高倉 喜信 薬学研究科 教授 掛谷 秀昭 薬学研究科 教授 石濱 泰 薬学研究科 教授 高須 清誠 薬学研究科 教授 小野 正博 国際高等教育院 教授 土居 雅夫 薬学研究科 講師 三宅 歩 附属病院 教授 松原 和夫 化学研究所 教授 緒方 博之 化学研究所 講師 今西 未来			
群	健康・スポーツ科目群			分野(分類)	健康・スポーツ科学(発展)			使用言語	日本語		
旧群	B群			単位数	2単位		週コマ数	1コマ		授業形態	講義
開講年度・ 開講期	2019・前期		曜時限	月3			配当学年	主として1回生		対象学生	理系向
【授業の概要・目的】											
<p>薬学は、医薬品の創製、生産、管理、適正使用にわたる広範な領域を包括する総合科学である。その一方で、薬の有効性・安全性に関する科学的観点からは、人類の健康に貢献する責任を負う実学でもある。このような視点から、本授業では薬学の学問・研究、社会的使命、薬学倫理等の概要を理解することを目的とする。薬学は総合科学であるため各専門家によるリレー形式とするが、教科書を使用し、適宜プリントにて補足することによって学習の助けとする。</p>											
【到達目標】											
<ul style="list-style-type: none"> ・ 科学者としての研究倫理と創薬研究者としての生命倫理に関する基本的事項を理解する。 ・ 医薬品が創り出される基本原理と医薬品の適正使用を理解し、創薬研究・医療薬学研究に必要な学問の役割とそれらの関わりについて説明できる。 ・ レポート作成に関する基本的事項を習得し、それらを遵守してレポートを作成できる。 ・ 各講義課題に対して自ら調査・考察することで、自主的、継続的に取り組む能力を養う。 											
【授業計画と内容】											
<p>以下のテーマについて講義する。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1．導入講義、および、生体リズムと時間薬学 [土居] 2．自然に学ぶ薬づくり [掛谷] 3．薬づくりの第一歩：健康と病気の違いを知る [中山] 4．ヒト細菌叢解析のためのバイオフィーマティクス [緒方] 5．遺伝子工学の創薬への応用 [今西] 6．薬の標的タンパク質の構造をみる [加藤] 7．薬をはかる タンパク質をはかる [石濱] 8．抗菌性ペプチドについて [松崎] 9．薬と化学：京大薬学部の研究から生まれた新薬 [高須] 10．臨床ビッグデータを創薬に活かす [金子] 11．体をめぐる薬の動きをあやつる -DDSでめざす効果的な投薬 [高倉] 12．薬が私たちに届くまで -作用と心理・効果と適応 [松原] 											
「薬の世界」入門(2)へ続く											

「薬の世界」入門(2)

- 1 3 . 創薬における分子イメージング [小野]
1 4 . 生命倫理・研究倫理・薬剤師倫理 [三宅]

【履修要件】

特になし。いずれの学部でも、創薬科学、医療薬学に興味を持つ学生の履修を歓迎する。

【成績評価の方法・観点及び達成度】

レポート課題3つ(30点)、小テスト等による平常点(70点)に基づいて評価する。
第1回の講義の際に、全体の趣旨説明、レポート作成・引用のルール、および成績評価法を説明します。

【教科書】

京都大学大学院薬学研究科 『くすりをつくる研究者の仕事 - 薬のタネ探しから私たちに届くまで』
(化学同人) ISBN:978-4-7598-1931-1

【参考書等】

(参考書)

奥田 潤、川村 和美 『薬剤師とくすりと倫理』(じほう)

【授業外学習(予習・復習)等】

指定された教科書で各講義に関連する章を授業前に熟読し、参考書等でさらに調べておくこと。
講義で出されるレポート課題については、講義終了後に自分で参考資料を集めて調査する。

【その他(オフィスアワー等)】

科目ナンバリング		U-LAS40 20020 LJ26						
授業科目名 <英訳>	健康・生命科学入門 Introduction to Biomedical Sciences			担当者所属 職名・氏名	薬学研究科 教授 竹島 浩 薬学研究科 准教授 柿澤 昌			
群	健康・スポーツ科目群		分野(分類)	健康・スポーツ科学(発展)		使用言語	日本語	
旧群	B群		単位数	2単位	週コマ数	1コマ	授業形態	講義
開講年度・ 開講期	2019・前期	曜時限	金2		配当学年	主として1・2回生	対象学生	全学向
[授業の概要・目的]								
本講義は基礎生物学に関する導入講義であり、医薬系学部の生命科学基礎科目の履修に向けて必要となる基礎的知識の修得を目的とする。高等学校にて「生物」を履修しなかった学生も対象に、医薬系基礎科目（解剖学、生理学、生化学など）における必須な学習事項を中心に概説する。従って、植物、進化や生態系などの生物学事項に関しては、本講義では取り扱わない。								
[到達目標]								
1 個体の構成に関して細胞、組織および器官レベルの概要を説明できる。 2 細胞分裂、個体発生と遺伝の概要を説明できる。 3 生体高分子の構造、代謝と機能の概要を説明できる。 4 生体恒常性の概要を説明できる。								
[授業計画と内容]								
1 「細胞」細胞の構成、生体膜の機能と細胞の多様性を学習する。 2 「細胞と個体」生物の構成、主要器官の構成を学習する。 3 「細胞と個体」主要臓器の構成と機能、細胞間情報伝達を学習する。 4 「生殖と発生」体細胞分裂と減数分裂を学習する。 5 「生殖と発生」動物の発生、器官の形成を学習する。 6 「生物の構成成分」生体の構成元素、タンパク質の構造と機能を学習する。 7 「生物の構成成分」糖質、脂質、核酸の構造と機能を学習する。 8 「酵素と代謝」酵素反応、酵素と補酵素、糖代謝を学習する。 9 「酵素と代謝」アミノ酸代謝、脂質代謝、核酸代謝を学習する。 10 「遺伝」メンデルの法則、遺伝子と染色体を学習する。 11 「遺伝子複製と発現」遺伝子の複製、変異と修復を学習する。 12 「遺伝子複製と発現」遺伝子発現における転写、翻訳を学習する。 13 「恒常性」生体恒常性、臓器機能による恒常性の維持を学習する。 14 「恒常性」内分泌系、自律神経系による臓器機能の統合調節を学習する。 15 「生体防御系」生体防御機能の概要を学習する（講義進行に依存して自己学習となる）								
[履修要件]								
特になし								
[成績評価の方法・観点及び達成度]								
試験により評価する。成績優良者に対しては、講義レポートの状況も評価した合格点を与える。講義出席状況が良好な試験成績不良者に対しては、レポート提出または再試験を課し、その状況により最終評価する。一方、試験成績も講義出席状況も不良な者については、救済措置を与えない。								
健康・生命科学入門(2)へ続く								

健康・生命科学入門(2)

[教科書]

竹島浩編集 『基礎生命科学 第3版』(京都廣川書店)

[参考書等]

(参考書)
特になし

[授業外学習(予習・復習)等]

各講義において簡単なレポート課題を課すので、重要な学習事項を復習しながら仕上げることを期待する。尚、レポート提出により出欠状況を確認する。

[その他(オフィスアワー等)]

講義日の午前および午後をオフィスアワーとする。

科目ナンバリング		U-LAS40 20021 LJ26					
授業科目名 <英訳>	薬用植物学 Pharmaceutical Botany			担当者所属 職名・氏名	薬学研究科 准教授 伊藤 美千穂		
群	健康・スポーツ科目群	分野(分類)	健康・スポーツ科学(発展)		使用言語	日本語	
旧群	B群	単位数	2単位	週コマ数	1コマ	授業形態	講義
開講年度・ 開講期	2019・前期	曜時限	月1		配当学年	主として1・2回生	対象学生 全学向
【授業の概要・目的】							
<p>植物は人間の文化の中で利用されることで薬用植物になる。生えているだけでは薬用たりえない。本講義では、ヒトと植物の関わりについて「健康」をキーワードに様々な視点から考え、また体験することを目的とする。具体的には、身近な野山に生息する薬用植物、台所にある香辛料、世界中から集められる医薬品原料植物、麻薬植物、有毒植物などについて、可能な範囲で実物を紹介しながら講義する。</p>							
【到達目標】							
<p>京大キャンパス内、また身近な野山にある薬用植物に気づけるようになり、その香りや味の安全な体験方法を身につけ、生体に対する作用を理解し、説明することができるようになる。必要に応じて、薬用植物のにおいや色、薬理作用の原因となる化合物について、化学構造式等を用いて説明することができるようになる。</p>							
【授業計画と内容】							
<ol style="list-style-type: none"> 1) 薬用植物学とその関連領域 2) 植物を扱う際の基本事項 3) 薬学研究科附属薬用植物園の見学 4) 薬用植物・天然薬物の特徴 5) 薬用植物の分布と生態 6) 薬用植物利用の実際 7) 薬用効果に関わる成分 8) 植物は成分をどうやってつくるのか 9) 身の回りの毒 10) 薬毒同源 11) 食素材中の薬素材分子 12) 植物バイオテクノロジー 13) 世界的な薬用植物利用の実際 14) 伝統医療と薬用植物 							
【履修要件】							
特になし							
-----薬用植物学(2)へ続く-----							

薬用植物学(2)

[成績評価の方法・観点及び達成度]

出席と参加の状況20～40%、定期試験60～80%を目安に成績評価を行う予定。4回以上欠席した者には原則として単位を認めない。小テストでは、主に当日の授業に関連する課題や要点について、また各個人が課題について考えた内容等について問う。定期試験では、各種の薬用植物を五感で知り、また他人に説明できる程度の基礎的知識を備えているか、薬用という視点からみた天然資源について重要事項が理解できているかについてなどが問われる。

[教科書]

使用しない

授業中にノートがとりきれないような複雑な情報（例えば成分の構造式など）はKULASISの「授業サポート」になるべくアップロードするので、各自でダウンロードして利用すること。

[参考書等]

（参考書）

伊藤美千穂、北山隆監修、原島広至著 『生薬単 第3版（最新版）』（丸善）

[授業外学習（予習・復習）等]

授業前に予習や準備が必要な場合は、その都度授業の中で、またはKULASISから指示する。毎回の授業後に、授業中に回覧した試料や講義で紹介した薬用植物類について、さらに詳しく各自で調べておくことが望ましい。

[その他（オフィスアワー等）]

五感で薬用植物を覚えてもらうため、出来るだけ多くの実物を紹介する予定である。薬学部の学生で、3回生担当の「天然物薬学3（漢方・生薬学）」を履修予定の者は本講義を履修しておくこと。

科目ナンバリング		U-LAS30 10012 LJ12 U-LAS30 10012 LJ11 U-LAS30 10012 LJ10					
授業科目名 <英訳>	情報基礎 [薬学部] Basic Informatics (Faculty of Pharmaceutical Sciences)			担当者所属 職名・氏名	薬学研究科 准教授 中津 亨 薬学研究科 准教授 平澤 明		
群	情報学科目群		分野(分類) (基礎)		使用言語	日本語	
旧群	B群		単位数	2単位	週コマ数	1コマ	授業形態 講義
開講年度・ 開講期	2019・前期	曜時限	月4		配当学年	主として1回生	対象学生 全学向
【授業の概要・目的】							
コンピュータ初心者を対象に、必要となる基礎知識とマナー、そして将来の研究活動に必要な情報科学ならびに情報処理の基礎の講義と、自分ひとりでコンピュータを扱えるようになるための演習を行う。							
【到達目標】							
世の中にあふれる情報を扱うための基礎的な理論を習得する。またコンピュータを利用する際の倫理的な問題、社会における情報との関係について理解する。							
【授業計画と内容】							
以下のような課題について、1課題あたり1～2週の授業をする予定である。 パソコンの構成、コンピュータの利用 電子メールとホームページの利用 電子メール利用におけるマナー 情報セキュリティと知的財産 パソコンでの様々なアプリケーション アプリケーション使用法 UNIXの基礎 プログラミング言語の基礎 データベースと電子図書館 研究とコンピュータ利用							
【履修要件】							
薬学部1回生向けクラス指定科目です。コンピュータを用いた演習は情報基礎演習で行います。							
【成績評価の方法・観点及び達成度】							
基本的な情報処理に関する知識が習得できているかどうかを定期試験により判断する。ただし、授業中に行う小テストを成績に考慮する場合がある。							
【教科書】							
詳細は初回の授業で説明する							
【参考書等】							
(参考書) 山口 和紀(編集)『情報(第2版)』(東京大学出版会) ISBN:978-4130624572 情報基礎演習で、NTTコミュニケーションズのドットコムマスター(http://www.com-master.jp)という検定試験を行う予定です。							
----- 情報基礎 [薬学部] (2)へ続く -----							

情報基礎 [薬学部] (2)

[授業外学習 (予習・復習) 等]

コンピューターを積極的に利用すること。

[その他 (オフィスアワー等)]

コンピューターを用いた演習は情報基礎演習 [薬学部] で講義する。併せて履修することが望まれる。

情報環境機構が提供する情報セキュリティe-Learningを必ず受講し、修了テストを受けた上で、同テストのフィードバックを確認しておくこと。授業内では受講のための時間は設けないので授業時間外に受講しておくこと。同e-Learningは学生も含めた本学の全構成員に対して毎年受講が求められているものである。2回生以上で過去の年度に受講した場合でも今年度まだ受講していないのであれば必ず受講すること。

科目ナンバリング		U-LAS30 10005 SJ11						
授業科目名 <英訳>	情報基礎演習 [薬学部] Practice of Basic Informatics (Faculty of Pharmaceutical Sciences)			担当者所属 職名・氏名	薬学研究科 准教授 中津 亨 薬学研究科 准教授 平澤 明			
群	情報学科目群		分野(分類) (基礎)		使用言語	日本語		
旧群	B群		単位数	2単位	週コマ数	1コマ	授業形態	演習
開講年度・ 開講期	2019・前期	曜時限	月5		配当学年	主として1回生	対象学生	全学向
【授業の概要・目的】								
コンピュータを利用する上で必要となる基礎知識とマナー、そして将来の研究活動に必要な情報科学ならびに情報処理の基礎に関する講義と演習を行う。								
【到達目標】								
コンピュータの基本的な使用方法を身に付け、コンピュータによる文章作成、情報検索、プログラミングなどのコンピュータリテラシーを身に付ける。								
【授業計画と内容】								
<p>以下のような課題について、1課題あたり1～2週の授業をする予定である。</p> <ul style="list-style-type: none"> コンピュータとデジタル情報（中津） インターネットの仕組み（中津） 電子メールシステムとマナー（中津） コンピュータネットワークとネットワークセキュリティ（中津） Unixの基本操作（平澤） プログラミングの基礎（平澤） データベースと電子図書館の利用法（平澤） 画像処理の基礎（平澤） コンピュータを用いたプレゼンテーション（中津、平澤） 								
【履修要件】								
薬学部1回生向けクラス指定科目です。情報処理の専門知識はとくに必要ありません。座学的な内容は情報基礎で行います。								
【成績評価の方法・観点及び達成度】								
基本的なコンピュータの使い方、電子メール、webブラウザの利用も含めた基本的なネットワーク利用に関する知識、基本的なプログラミングの理解について、提出されたレポートにより評価する。								
【教科書】								
詳細は初回の授業で説明する								
【参考書等】								
<p>(参考書)</p> <p>授業中に紹介する 情報基礎演習(本科目)で、NTTコミュニケーションズのドットコムマスター(http://www.com-master.jp)という検定試験を行う予定です。</p>								
----- 情報基礎演習 [薬学部] (2)へ続く -----								

情報基礎演習 [薬学部] (2)

[授業外学習 (予習・復習) 等]

コンピュータを積極的に利用すること。

[その他 (オフィスアワー等)]

座学的内容は情報基礎[薬学部]で講義をする。併せて履修することが望まれる。

情報環境機構が提供する情報セキュリティe-Learningを必ず受講し、修了テストを受けた上で、同テストのフィードバックを確認しておくこと。授業内では受講のための時間は設けないので授業時間外に受講しておくこと。同e-Learningは学生も含めた本学の全構成員に対して毎年受講が求められているものである。2回生以上で過去の年度に受講した場合でも今年度まだ受講していないのであれば必ず受講すること。

科目ナンバリング		U-LAS51 10014 SB48					
授業科目名 <英訳>	科学コミュニケーションの基礎と実践(薬・英) A-E3			担当者所属 職名・氏名	薬学研究科 准教授 Fustin, Jean Michel(フスタジャンミッシェル)		
	Theory and Practice in Scientific Writing and Discussion (Pharmaceutical Sciences, English)A-E3						
群	キャリア形成科目群	分野(分類)	国際コミュニケーション	使用言語	日本語及び英語		
旧群	C群	単位数	2単位	週コマ数	1コマ	授業形態	演習
開講年度・ 開講期	2019・前期	曜時限	月4/月5	配当学年	2回生以上	対象学生	理系向
【授業の概要・目的】							
<p>"Theory and Practice in Scientific Writing and Discussion" will provide students with the basics of scientific English.</p> <p>Expressions and vocabulary used in scientific texts are different from everyday English. When giving a presentation or a seminar, or writing a report or research manuscript, it is critical to use a well organised and precise language so that the ideas and discoveries are well communicated.</p> <p>This course is mainly targeted to students who wish to pursue a scientific career, especially in research.</p> <p>Although learning new vocabulary and grammar is a substantial part of this course, the emphasis will be put on practice.</p>							
【到達目標】							
<p>To acquire basic knowledge on the structure and vocabulary of scientific English (biology, physics, chemistry).</p> <p>To be able to build sentences using the vocabulary and grammar they have learned.</p> <p>To learn English names of common scientific tools.</p> <p>To be able to accurately describe dimensions and relative positions of objects, scientific equations, chemical reactions and other scientific concepts.</p> <p>To be able to communicate scientific content in English in a relaxed manner and without hesitation.</p>							
【授業計画と内容】							
<ol style="list-style-type: none"> 1. What is Scientific English? [1 week] 2. The basic units and dimensions, numerals, enunciation and comprehension of complex numbers and equations.[2 weeks] 3. Chemicals and chemical reactions.[2 weeks] 4. Latin and Greek roots of modern scientific English. How to coin novel terms.[2 weeks] 5. How to describe the relative position and dimensions of an object, descriptions of movements and force, basic human and animal anatomy.[3 weeks] 6. Description of experimental setups and results in biology, chemistry and pharmacology.[2 weeks] 7. Listening to a scientific presentation/TV programme and asking questions on its content (1 weeks). 8. Preparation and practice for the final examination (1 week) 							
----- 科学コミュニケーションの基礎と実践(薬・英) A-E3(2)へ続く -----							

科学コミュニケーションの基礎と実践(葉・英) A-E3(2)

【履修要件】

Students uncomfortable in social interactions may find this course challenging.

【成績評価の方法・観点及び達成度】

-Frequent competitive tests during the semester based on the textbook (40%)

-The final examination is a listening comprehension test based on the exercises in the textbook and CD (60%).

【教科書】

Anthony FW FOONG 『総合科学英語』(イメックスジャパン) ISBN:978-4-9900356-7-9

【参考書等】

(参考書)
授業中に紹介する

【授業外学習(予習・復習)等】

Students should review the material by listening to the CD and practicing the exercises from the textbook. The final test absolutely requires students to self-study the material at home, listening to the CD and making sure that they can do the exercises by themselves.

【その他(オフィスアワー等)】

科目ナンバリング		U-LAS51 10015 SB48					
授業科目名 <英訳>	科学コミュニケーションの基礎と実践(薬・英) B-E3 Theory and Practice in Scientific Writing and Discussion (Pharmaceutical Sciences, English)B-E3			担当者所属 職名・氏名	薬学研究科 准教授 Fustin, Jean Michel(フスタジャンミッシェル) 薬学研究科 講師 RAKERS, Christin		
	群	キャリア形成科目群	分野(分類)		国際コミュニケーション	使用言語	日本語及び英語
旧群	C群	単位数	2単位	週コマ数	1コマ	授業形態	演習
開講年度・開講期	2019・後期	曜時限	月4/月5	配当学年	2回生以上	対象学生	理系向
【授業の概要・目的】							
<p>The purpose of this course is to give a group of 2-3 students an opportunity to present, in English, a scientific paper of their choice. Not only students will need to read the paper they have chosen, but also to understand and to be able to explain its content.</p> <p>When giving a presentation or a seminar, or writing a report or research manuscript, it is critical to use a well organised and precise language so that the ideas and discoveries are well communicated. While 科学コミュニケーションの基礎と実践(薬・英) A gave the basics of the language, here the students will have the opportunity to practice their own English.</p> <p>This course is mainly targeted to students who wish to pursue a scientific career, especially in research.</p>							
【到達目標】							
<p>This course will provide an opportunity for the students to practice their Scientific English and presentation skills. Students will learn the format and structure of a scientific paper, as well as the language and vocabulary used in Science.</p>							
【授業計画と内容】							
<p>A typical 科学コミュニケーションの基礎と実践(薬・英) B course:</p> <ul style="list-style-type: none"> -One group of 1-2 students choose beforehand a research paper they want to present. -On the day of presentation, the group of students gather at the front of the classroom and give their presentation. Copy of the paper and a vocabulary list will be given to all students via Kulasis. -After the presentation, all students and the teacher ask questions to the presenting students. -There will be two presentations, 30 minutes each and followed by 15 min question time, during each lecture. -Students who fail their presentation will be given one another chance on a later date. <p>Schedule:</p> <p>WEEK 1: presentation of first 2 groups. WEEK 2: presentation of next 2 groups. WEEK 3: presentation of next 2 groups. WEEK 4: presentation of next 2 groups. WEEK 5: presentation of next 2 groups. WEEK 6: presentation of next 2 groups. WEEK 7: presentation of next 2 groups. WEEK 8: presentation of next 2 groups. WEEK 9: presentation of next 2 groups.</p>							
科学コミュニケーションの基礎と実践(薬・英) B-E3(2)へ続く							

科学コミュニケーションの基礎と実践 (薬・英) B-E3(2)

WEEK 10: presentation of next 2 groups.
WEEK 11: presentation of next 2 groups.
WEEK 12: presentation of next 2 groups.
WEEK 13: presentation of next 2 groups.
WEEK 14: presentation of next 2 groups.

【履修要件】

Only students who took 科学コミュニケーションの基礎と実践 (薬・英) A can follow 科学コミュニケーションの基礎と実践 (薬・英) B.

Students should ideally have the desire to learn English as an international language that can help them secure high-profile jobs in our increasingly global society.

【成績評価の方法・観点及び達成度】

Students will be evaluated mainly (70%) on their ability to present a research paper in English. The main points students will be evaluated on are: ability to formulate complete English sentences, giving a smooth presentation without reading a pre-written text, preparing clear slides, responding accurately to questions.

Participation of all students will also be evaluated by calculating the number of questions the students in the audience have asked during the year (20%).

In addition, a final vocabulary test will take place (10%).

IMPORTANT NOTE: student who did not give the presentation at all or who failed their presentation WILL NOT receive credit for this course and will be required to give a presentation the next year.

【教科書】

使用しない

【参考書等】

(参考書)
授業中に紹介する

【授業外学習 (予習・復習) 等】

Groups of students will need to choose and submit a research paper and prepare their presentation before the day of their presentation.

Students will need to prepare a vocabulary list composed of 10 words taken from their chosen paper.

The paper and vocabulary list will be sent to the teacher at the latest the day before the presentation.

【その他 (オフィスアワー等)】

科目ナンバリング		U-PHA00 20000 LJ86									
授業科目名 <英訳>		有機化学I【H30以降入学者用】 Organic Chemistry I				担当者所属・ 職名・氏名		薬学研究科 教授 竹本 佳司			
配当 学年	2,3回生	単位数	2	開講年度・ 開講期	2019・ 前期	曜時限	火1	授業 形態	講義	使用 言語	日本語
学科		薬学部,薬科学科,薬学科			科目に対する区分		選択				
[授業の概要・目的]											
<p>有機化学および医薬品化学の基礎としての有機化学その3 本講義では、有機化学の反応で最も多彩な反応性を示すカルボニル化合物およびアミン類に焦点をあて講義をする。アルデヒド、ケトン、カルボン酸誘導体の構造、物理的性質、反応性について学び、天然有機化学物や医薬品などの生体機能性分子を化学合成する際に必要となる重要な環化反応や炭素-炭素結合形成反応について体系的に修得する。また、アミンならびに含窒素ヘテロ環の性質や反応性、合成法などについても概説する。</p>											
[到達目標]											
<p>(1)カルボニル化合物の具体例を挙げて、それらの反応性の違いを説明できる。 (2)カルボニル化合物の化学的性質、反応性、合成の基本的事項を理解し説明できる。 (3)カルボニル化合物が関与する様々な反応のメカニズムを理解し説明できる。 (4)炭素-炭素結合形成反応について反応様式別に説明できる。 (5)アミン化合物の塩基性をその化学構造から説明することができる。 (6)アミン化合物の合成と反応の基本事項を理解し、反応様式別に説明できる。 (7)代表的な含窒素ヘテロ環を挙げて、命名ならびに化学的性質を説明できる。 (8)含窒素ヘテロ環の合成と反応の基本事項を理解し、反応様式別に説明できる。</p>											
[授業計画と内容]											
<p>(1)アルデヒドとケトンの構造と物理的性質 (2)アルデヒドとケトンの求核付加反応の機構 (3)アルデヒドとケトンの反応1 (4)アルデヒドとケトンの反応2 (5)カルボン酸とカルボン酸誘導体の構造と物理的性質 (6)求核アシル置換反応の機構 (7)カルボン酸とカルボン酸誘導体の反応性1 (8)カルボン酸とカルボン酸誘導体の反応性2 (9)カルボニル化合物の酸性度とケト-エノール互変異性 (10)エノールとエノラートイオンの反応1 (11)エノールとエノラートイオンの反応2 (12)エナミンの合成と反応 (13)アミン化合物の命名、塩基性ならびに合成と反応 (14)含窒素ヘテロ環化合物の合成と反応 (15)練習問題と総合討論</p>											
[履修要件]											
特になし											
[成績評価の方法・観点及び達成度]											
レポート(20)、定期試験(80)											
----- 有機化学I【H30以降入学者用】(2)へ続く -----											

有機化学I【H30以降入学者用】(2)

[本講義と関連する講義]

基礎有機化学、有機化学2・4・5、天然物薬学1・2、医薬品化学(旧有機化学3)、創薬有機化学エクササイズ1、2

[対応するコアカリキュラム一般目標(薬学科)]

C1 (1), C3 (1) (3), C4 (2)

[教科書]

J. McMurry著、柴崎ら監訳『マクマリー有機化学 第1版』(東京化学同人)

[参考書等]

(参考書)

P.Y.Bruice著、大船ら監訳『ブルース有機化学 第7版 下』(化学同人)(これまで使用してきた教科書)
竹本佳司 他『有機化学explorer -有機化学で未来をひらけ-』(京都廣川書店) ISBN:978-4-901789-34-9(自学自習できる演習問題)
「HGS立体化学分子模型4010学生用セット」(丸善)

[授業外学習(予習・復習)等]

授業前に、講義内容について教科書を熟読して理解しておく。
講義後は、学習した講義内容に関する例題や練習問題を解いて、理解を深める。

(その他(オフィスアワー等))

基礎有機化学、の内容を理解し、必ず単位を取得しておくこと

オフィスアワーの詳細については、KULASISで確認してください。

科目ナンバリング		U-PHA00 20000 LJ86									
授業科目名 <英訳>		有機化学Ⅱ【H30以降入学者用】 Organic Chemistry II				担当者所属・ 職名・氏名		薬学研究科 教授 高須 清誠			
配当 学年	2,3回生	単位数	2	開講年度・ 開講期	2019・ 後期	曜時限	金2	授業 形態	講義	使用 言語	日本語
学科		薬学部,薬科学科,薬学科			科目に対する区分		選択				
[授業の概要・目的]											
<p>有機化学（アドバンス） 基礎有機化学I, IIおよび有機化学IIは、大学有機化学の基礎編に相当します。これまでに得た知識を復習するとともに各論を統合し、より深い有機化学の世界に導きます。また、物理化学や生化学、衛生化学、薬剤学などの他教科との学問との接点についても適宜解説し、有機化学が薬学の中でどのような位置づけにあるかも講義する予定です。すなわち、医薬品化学や生命化学に関連した有機化学のトピックを時折紹介することを特徴とします。</p> <p>これまで経験した授業から、「有機化学は暗記の学問ではない」ことを強く感じたと思います。また、これまで習った内容などのかなりの部分を忘れていたり、理解できていないと感じることもあると思います。まだ間に合います！予習や復習などでバックアップできると思います。一緒に頑張りましょう。</p>											
[到達目標]											
<p>有機化学反応機構を電子論的に説明できる。 基本的なペリ環状反応および有機金属反応を列挙できる。 有機化学の諸事項を統合的に理解する。 補酵素を列挙し、その有機化学的な役割を説明できる。 簡単な化合物の合成法を提案できる。</p>											
[授業計画と内容]											
<ol style="list-style-type: none"> 1. 有機反応の反応機構の復習（1～2週） 2. ペリ環状反応の基礎（2週） 3. 基本的な有機金属反応（2週） 4. 代表的な分子変換反応（イオン反応、ラジカル反応を中心に）（3週） 5. 補酵素の反応（2週） 6. 簡単な化合物の合成法提案（2～3週） 7. まとめ：なぜその反応が起きるのか（2～3週） 											
[履修要件]											
基礎有機化学I,IIおよび有機化学Iを学修した者、もしくはそれに同等以上の素養がある者が受講することが望ましい。											
[成績評価の方法・観点及び達成度]											
<p>定期試験（95%）、積極的な学習態度（5%） 定期試験は期末に行う予定であるが、授業の進度および履修者の理解度に応じて中間試験を実施する場合もある。その場合は、4週間以上前に中間試験の実施を授業時間中に予告する。</p>											
[本講義と関連する講義]											
基礎有機化学I,II、有機化学I,III,IV、創薬有機化学エクササイズ、天然物薬学I, II、医薬品化学、物理化学I											
----- 有機化学Ⅱ【H30以降入学者用】(2)へ続く -----											

有機化学II【H30以降入学者用】(2)

[対応するコアカリキュラム一般目標(薬学科)]

C3(1)、C3(2)、C3(3)、C3(5)、C4(1)、C4(2)、

[教科書]

随時プリントを配布して授業資料とする。

[参考書等]

(参考書)

J. McMurry著、柴崎正勝ら監訳 『マクマリー有機化学 生体反応へのアプローチ』(東京化学同人)(有機化学1までに用いた教科書を前提として、授業を展開します。)

『ウォーレン有機化学』(東京化学同人)

『分子模型セット』(「HGS立体化学分子模型4010学生用セット」がお勧めです。他メーカーの分子模型で構いません。)

[授業外学習(予習・復習)等]

詳細は初回講義で説明します。

有機化学は積み重ねの学問であるため、予習もしくは復習は大変効果的です。中長期的なスケジュールを立てて、無理のない量を行うことが肝要です。

(その他(オフィスアワー等))

有機化学に悩んでいる人がいれば早めに相談にきてください。

オフィスアワーの詳細については、KULASISで確認してください。

オフィスアワーの詳細については、KULASISで確認してください。

科目ナンバリング		U-PHA00 30000 LJ86									
授業科目名 <英訳>		有機化学Ⅲ【H30以降入学者用】 Organic Chemistry III				担当者所属・ 職名・氏名		化学研究所 教授 川端 猛夫			
配当 学年	2,3回生	単位数	2	開講年度・ 開講期	2019・ 前期	曜時限	水2	授業 形態	講義	使用 言語	日本語
学科		薬学部,薬科学科,薬学科			科目に対する区分		選択				
[授業の概要・目的]											
立体化学、触媒反応、不斉合成、エノラート化学、酸化-還元をテーマに有機反応が起こる仕組みと必然性を一貫したルールに基づいて講述する。電子の移動を図示して反応機構を説明できること、分子の配座を図示して反応の立体化学を説明・予測できること、さらに進んで、軌道相互作用による反応性の理解を目標とする。											
[到達目標]											
以下の項目について、具体例をあげ、図示して説明できることを目標とする。 (1) 分子のキラリティーと配座。 (2) 速度論支配反応と熱力学支配反応。 (3) 置換反応、脱離反応、付加反応、およびカルボニル化合物への付加反応の立体化学。 (4) エノラートの生成法、エノラートを中間体とする合成反応。 (5) アルドール反応の立体化学。 (6) 不斉合成法の原理。 (7) キラル触媒を用いる不斉合成法。 (8) 代表的な還元反応、および酸化反応。 (9) 還元反応の立体化学。 (10) アノマー効果。 (11) Lewis酸触媒反応。 (12) Lewis塩基触媒反応。 (13) 求核触媒反応。 (14) 速度論的分割。 (15) ペリ環状反応。											
[授業計画と内容]											
(1) 分子のキラリティーと配座 (2) 速度論支配と熱力学支配 (3) 置換反応、脱離反応、付加反応の立体化学 (4) カルボニル化合物への付加反応の立体化学、Cram則、Felikn-Anh モデル (5) エノラートの生成法、エノラートを中間体とする合成反応 (6) エノラートを用いるアルドール反応とその立体化学 (7) 不斉合成法の原理と具体例 (8) キラル触媒を用いる不斉合成法 (9) 代表的な還元反応 (10) 代表的な酸化反応 (11) アノマー効果。 (12) Lewis酸-Lewis塩基触媒反応。 (13) 求核触媒反応。 (14) 速度論的分割。 (15) ペリ環状反応。											
[履修要件]											
特になし											
----- 有機化学Ⅲ【H30以降入学者用】(2)へ続く -----											

有機化学III【H30以降入学者用】(2)

[成績評価の方法・観点及び達成度]

定期試験100%

[本講義と関連する講義]

基礎有機化学、有機化学1, 2, 4, 医薬品化学, 天然物薬学1,2, 創薬有機化学エクササイズ1(旧創薬有機化学エクササイズ), 創薬有機化学エクササイズ2(旧医薬品化学・新薬論)。

[対応するコアカリキュラム一般目標(薬学科)]

C1(1),C3(1)(2)(3),C4(2),C6(3)

[教科書]

P.Y. Bruice 著、大船泰史ら監訳『ブルース有機化学 第5版 上・下』(化学同人)
『分子模型セット』(丸善「HGS立体化学分子模型4010学生用セット」がお勧めです。他のメーカーの分子模型でも構いません。)
プリントを配付する。

[参考書等]

(参考書)
G.S.ツヴァイフェルら著、檜山為次郎訳『最新有機合成法』(化学同人)
Calydenら著、野依良治ら監訳『ウオーレン有機化学 上・下』(東京化学同人)

[授業外学習(予習・復習)等]

疑問点は授業中や授業後に質問してください。また、メールでの質問にはいつでも答えます。川端(kawabata@scl.kyoto-u.ac.jp)

(その他(オフィスアワー等))

疑問点は授業中や授業後に質問してください。また、メールでの質問にはいつでも答えます。川端(kawabata@scl.kyoto-u.ac.jp)

オフィスアワーの詳細については、KULASISで確認してください。

科目ナンバリング		U-PHA00 30000 LJ86									
授業科目名 <英訳>		有機化学IV【H30以降入学者用】 Organic Chemistry IV				担当者所属・ 職名・氏名		薬学研究科 教授 竹本 佳司			
配当 学年	2,3回生	単位数	2	開講年度・ 開講期	2019・ 後期	曜時限	火1	授業 形態	講義	使用 言語	日本語
学科	薬学部,薬科学科,薬学科				科目に対する区分		選択				
[授業の概要・目的]											
無から有を産みだす知的作業は精密有機合成化学の特権である。医薬品等の機能を持つ分子の創製が精密有機合成化学の主要な挑戦課題である。複雑な分子を構築するための戦略と戦術にあたる「逆合成解析」と「選択的反応」を主題として、選択的反応を説明でき、化合物の合成経路を立案できるように学ぶ。											
[到達目標]											
<ul style="list-style-type: none"> ・有機化合物の逆合成解析をして、合理的な合成計画を立案できる。 ・逆合成解析により得たシントンの合成等価体として有機金属試薬を利用できる。 ・官能基相互変換を実践的に用いた合成計画を立案できる。 ・ラジカル反応や転位反応を含む合成経路について、反応機構を含め理解できる。 ・官能基選択性を理解して、複数の官能基を含む複雑分子の合成経路を設計できる。 ・立体電子効果について、アノマー効果等を例に説明できる。 ・HSAB理論を用いて反応の位置選択性を予測できる。 											
[授業計画と内容]											
<ol style="list-style-type: none"> (1) 有機合成の役割 (2) 官能基選択性の制御 (3) 保護基の意義と活用法 (4) 官能基相互変換法 (5) 位置選択性の制御 (6) 立体選択性の制御 (7) 立体電子効果の基礎 (8) 逆合成解析と切断法 (9) シントンと合成等価体 (10) 潜在極性と極性転換 (11) 全合成の戦略と計画 (12) 炭素 炭素結合形成反応 (13) 極性反応、ラジカル反応、転位反応 (14) 有機金属試薬の反応特性 (15) 練習問題と総合討論 											
[履修要件]											
特になし											
[成績評価の方法・観点及び達成度]											
定期試験(60)、講義中に行う確認試験+出題するレポート課題(40)											
[本講義と関連する講義]											
基礎有機化学、有機化学1・2・3、天然物薬学1・2、医薬品化学、創薬有機化学エクササイズ1、創薬有機化学エクササイズ2											
----- 有機化学IV【H30以降入学者用】(2)へ続く -----											

有機化学IV【H30以降入学者用】(2)

[対応するコアカリキュラム一般目標(薬学科)]

C3(1)、C3(2)、C3(3)

[教科書]

C.L.ウイリス、M.ウイリス著、富岡清訳『逆合成のノウハウ 有機合成の戦略』(化学同人)

[参考書等]

(参考書)

Paula Y. Bruice 『ブルース有機化学 (第7版) 上・下』(化学同人)

「分子模型セット」(丸善) (「HGS立体化学分子模型4010学生用セット」がおすすめです。他メーカーの分子模型でもかまいません)

その他の参考書については、授業中に紹介する。

[授業外学習(予習・復習)等]

講義中の確認試験では、これまで有機化学で学んできたことを取り扱っています。解答、解説聞いた後、確認試験の内容は各自かならず復習して理解して下さい。

(その他(オフィスアワー等))

少しアドバンスな有機化学。精密有機合成の芸術と実用性を楽しみます。3年生前期の有機化学3を履修しておくことが望ましい。

反応機構については、教科書等を見るだけでなく各自必ず書いて学習して下さい。

オフィスアワーの詳細については、KULASISで確認してください。

科目ナンバリング		U-PHA00 30000 LJ86									
授業科目名 <英訳>		医薬品化学【H30以降入学者用】 Medicinal Chemistry				担当者所属・ 職名・氏名		薬学研究科 准教授 大石 真也			
配当 学年	2,3回生	単位数	2	開講年度・ 開講期	2019・ 前期	曜時限	火1	授業 形態	講義	使用 言語	日本語
学科		薬学部,薬科学科,薬学科			科目に対する区分		選択				
[授業の概要・目的]											
生体内における医薬品の作用を化学的に理解するためには、生体反応の化学、及び、医薬品の化学構造とその性質を理解する必要がある。本講義では、有機化学の基礎知識を習得していることを前提として、医薬品が薬理作用を示す原理を化学的観点から講述するとともに、新薬開発における分子設計のアプローチについて紹介する。											
[到達目標]											
1. 医薬品の作用に関わる生体反応について、反応に関わる分子の構造・性質を理解するとともに、反応機構を説明できる。 2. 医薬品に含まれる代表的な化学構造の特徴・性質を理解し、医薬品の作用との関連について説明できる。 3. 医薬品に頻用される構造要素を学び、新しい医薬品の創製を目指した分子設計の基本的概念を理解する。											
[授業計画と内容]											
1. 総論 2. リード化合物の探索・創出 3. 薬と生体分子の相互作用 4. ファーマコフォアの考え方 5. 構造最適化の方法：標的分子との相互作用の改善 6. 構造最適化の方法：薬物動態・代謝を考慮した分子設計 7. プロドラッグの設計 8. 生体分子や内因性リガンドからの分子設計 9. コンビナトリアルケミストリー 10. 酵素に作用する医薬品の構造と性質 1 11. 酵素に作用する医薬品の構造と性質 2 12. 受容体に作用する医薬品の構造と性質 1 13. 受容体に作用する医薬品の構造と性質 2 14. DNAやトランスポーター等に作用する医薬品の構造と性質 15. 計算科学を利用した分子設計											
[履修要件]											
特になし											
[成績評価の方法・観点及び達成度]											
定期試験100%（講義において取扱う内容全般から出題するとともに、新しい医薬品の創製につながる分子設計の提案などの発展的な内容を含む。）											
[本講義と関連する講義]											
基礎有機化学 ・ 、有機化学 ・ ・ ・ 、天然物薬学 ・ 、薬理学 ・ ・											
[対応するコアカリキュラム一般目標（薬学科）]											
C4											
----- 医薬品化学【H30以降入学者用】(2)へ続く -----											

医薬品化学【H30以降入学者用】(2)

【教科書】

G. L. Patrick 『An Introduction to Medicinal Chemistry, 6th Ed.』 (Oxford University Press) ISBN:978-0198749691
必要に応じてプリントを配付する。

【参考書等】

(参考書)

N. Dunlap & D. M. Huryn 『Medicinal Chemistry』 (Garland Science) ISBN:978-0815345565
周東智 『有機医薬分子論 化学構造,薬理活性そして創薬へ』 (京都廣川書店) ISBN:978-4901789813
C. G. Wermuth他 編 『The Practice of Medicinal Chemistry』 (Academic Press) ISBN:978-0124172050
R. B. Silverman & M. W. Holladay 編 『The Organic Chemistry of Drug Design and Drug Action』 (Elsevier) ISBN:978-0123820303
T. L. Lemke & D. A. Williams 編 『Foye's Principle of Medicinal Chemistry』 (LMW) ISBN:978-1609133450
日本薬学会 編 『スタンダード薬学シリーズII-3 化学系薬学II 生体分子・医薬品の化学による理解』 (東京化学同人) ISBN:978-4807917068

【授業外学習(予習・復習)等】

授業前には教科書の該当部分を予習することが必要である。また、医薬品と生体分子の相互作用を理解するために、構造要素の化学的特性に関する基本的事項をあらかじめ十分理解していることが求められる。創薬に関わる実践的な知識の修得の観点から、教科書や参考書にとどまらず、最新の創薬研究の情報・動向に興味を持つことが望まれる。

(その他(オフィスアワー等))

オフィスアワーの詳細については、KULASISで確認してください。

科目ナンバリング		U-PHA00 20000 LJ86									
授業科目名 <英訳>		天然物薬学I (天然物化学)【H30以降入学者用】 Pharmacognogy I (Natural Product Chemistry)				担当者所属・ 職名・氏名		薬学研究科 准教授 服部 明			
配当 学年	2,3回生	単位数	2	開講年度・ 開講期	2019・ 前期	曜時限	水1	授業 形態	講義	使用 言語	日本語
学科		薬学部,薬科学科,薬学科			科目に対する区分		必修				
[授業の概要・目的]											
生体に存在する有機化合物の構造ならびに化学的性質を学び、生体内で起こる有機化学反応を理解するための基礎を習得する。また、微生物などが産生し、医薬品として利用されている天然有機化合物について、その化学構造と作用機序を結び付けて理解する。											
[到達目標]											
生体分子の化学構造ならびに化学的性質に基づいて生体内反応を説明できる。 抗生物質を化学構造に基づいて分類し、それらの作用機序を説明できる。 抗菌薬に対する耐性の獲得機構や副作用の発現機構を化学的に説明できる。											
[授業計画と内容]											
(1) 単糖、多糖の化学構造 [マクマリー 21章] (2) アミノ酸の化学構造および化学的性質 [マクマリー 19章] (3) タンパク質の構造を規定する化学結合および相互作用 [マクマリー 19章] (4) 核酸の化学構造および化学的性質 [マクマリー 24章] (5) 補酵素の化学構造および代謝の化学反応 (6) 酵素触媒反応 (7) 生体膜を構成する脂質の化学構造 [マクマリー 23章] (8) 微生物薬品化学総論 (9) 細胞壁の合成を標的とする抗生物質 (I) (10) 細胞壁の合成を標的とする抗生物質 (II) (11) 細胞膜を標的とする抗生物質 (12) タンパク質合成を標的とする抗生物質 (13) 核酸合成を標的とする抗生物質 (14) 抗生物質に対する耐性の獲得機構 (15) 抗生物質の体内動態、副作用、薬物間相互作用											
[履修要件]											
特になし											
[成績評価の方法・観点及び達成度]											
定期試験100%											
[本講義と関連する講義]											
天然物薬学2、医薬品化学(旧有機化学3)、生物化学1、有機化学2、5											
[対応するコアカリキュラム一般目標(薬学科)]											
C3(1)、C4(1)(2)(3)、C5(2)、C6(1)(2)(3)(4)、C8(3)、E2(7)											
[教科書]											
『マクマリー 有機化学 - 生体反応へのアプローチ - 』(東京化学同人) ISBN:9784807906918 『化学療法学』(南江堂) ISBN:978-4-524-40248-9 講義時にプリントを配布する。											
----- 天然物薬学I(天然物化学)【H30以降入学者用】(2)へ続く -----											

天然物薬学I(天然物化学)【H30以降入学者用】(2)

[参考書等]

(参考書)

- 『ブレース有機化学 第7版 下』(化学同人) ISBN:978-4-7598-1585-6
- 『微生物学 改訂第6版』(南江堂) ISBN:978-4-524-40301-1
- 『細胞の分子生物学 第6版』(ニュートンプレス) ISBN:978-4-315-52062-0
- 『マクマリー有機化学(下) 第9版』(東京化学同人) ISBN:9784807909148

[授業外学習(予習・復習)等]

生体分子の項は、複数の講義でも取り扱う内容である。そのため、連関を持たせて理解するように復習すること。抗生物質の作用機序の理解においては、その化学構造の基本骨格と標的とを結びつけるように復習をすること。

(その他(オフィスアワー等))

オフィスアワーの詳細については、KULASISで確認してください。

科目ナンバリング		U-PHA00 20000 LJ86									
授業科目名 <英訳>		天然物薬学II (ケミカルバイオロジー) 【H30以降入学者用 Pharmacognosy II (Chemical Biology)				担当者所属・ 職名・氏名		薬学研究科 教授 掛谷 秀昭			
配当 学年	2,3回生	単位数	2	開講年度・ 開講期	2019・ 後期	曜時限	金1	授業 形態	講義	使用 言語	日本語
学科		薬学部,薬科学科,薬学科			科目に対する区分		選択				
[授業の概要・目的]											
<p>人類は有史以来、合成医薬と並んで、天然物（天然有機化合物）を薬として利用しています。天然物の資源は、微生物代謝産物、植物成分、海洋無脊椎動物をはじめとして多種多様です。本講義では、主として天然資源由来の生薬、抗生物質、抗癌剤を中心とする天然有機化合物の単離・精製法、構造決定法、起源薬効成分、生合成、作用機序、応用開発等について講義し、天然物薬学を基盤とした生命現象の理解に向けた知識・方法論を習得することを目的とします。</p>											
[到達目標]											
<ol style="list-style-type: none"> 1. 代表的な生薬の基原・特色・臨床応用、および天然生物活性物質の単離・構造・物性・作用・生合成経路を説明できる。 2. 化学物質（医薬品・天然生物活性物質を含む）の単離・精製法、構造決定法を説明できる。 3. 化学物質（医薬品・天然生物活性物質を含む）の生物活性を化学的・ケミカルバイオロジー的に理解し説明できる。 											
[授業計画と内容]											
<ol style="list-style-type: none"> 1. 動植物由来の代表的な生薬の起原、性状、含有成分 2. 動植物由来の代表的な生薬の生合成経路 3. 動植物由来の代表的な生薬の品質評価、生産と流通、歴史的背景 4. 有機化合物の分離・精製法 5. 質量分析法、赤外分光法 6. 核磁気共鳴(NMR)分光法 7. 紫外・可視分光法、比旋光度測定法 8. 質量分析法、赤外分光法、核磁気共鳴分光法などを駆使した基本的な化合物の化学構造決定 9. 発酵法による有用物質生産と微生物変換 10. 微生物、植物等における生合成経路の解析方法 11. ポリケチド骨格、フラボノイド骨格を有する天然物の化学構造、生合成経路 12. テルペノイド骨格を有する天然物の化学構造、生合成経路 13. トリテルペン骨格、ステロイド骨格を有する天然物の化学構造、生合成経路 14. シキミ酸経路で生合成される天然物の化学構造、生合成経路 15. 医薬品開発における生薬・天然物の重要性と多様性の総合的理解 											
[履修要件]											
特になし											
[成績評価の方法・観点及び達成度]											
<p>平常・小テスト10%、定期試験90%。 小テストでは、毎回の講義内容に関してテストを行う。定期試験では、上記到達目標への到達度を基礎・応用の両観点から評価する。</p>											
[本講義と関連する講義]											
基礎有機化学 ・ 、有機化学1・2・4・5、医薬品化学（旧有機化学3）、天然物薬学I、創薬有機化学演習											
----- 天然物薬学II (ケミカルバイオロジー) 【H30以降入学者用(2)へ続く -----											

天然物薬学II(ケミカルバイオロジー)【H30以降入学者用(2)】

[対応するコアカリキュラム一般目標(薬学科)]

C2 (4) (5), C3 (4), C4 (1) (2) (3), C5 (1) (2), E 2 (10) [

[教科書]

適宜、プリント、パワーポイントを使用予定

[参考書等]

(参考書)

大村智監修 『化学療法学』(南江堂) ISBN:9784524403493

柴崎正勝ら監訳 『マクマリー有機化学 生体反応へのアプローチ』(東京化学同人) ISBN:9784807906918

Paul M Dewick 著、海老塚豊 翻訳 『医薬品天然物化学』(南江堂) ISBN:9784524402014

石黒京子著 『医療における漢方・生薬学』(廣川書店) ISBN:978-4567421409

[授業外学習(予習・復習)等]

有機化学(物性、反応機構、構造解析)に関する基本的事項を習得しつつ、天然有機化合物の単離・精製法、構造決定法、生合成、作用機序等を解説する。理解が不十分なポイントは、該当部分の復習が必須である。事前配布プリントの項目に関して参考書などによる予習、小テストの復習は本講義の理解を深める。

(その他(オフィスアワー等))

薬学専門実習2と併せて、天然物薬学・ケミカルバイオロジー研究を理解するための基礎となる。

オフィスアワーの詳細については、KULASISで確認してください。

オフィスアワーの詳細については、KULASISで確認してください。

科目ナンバリング		U-PHA00 30000 LJ86									
授業科目名 <英訳>		天然物薬学Ⅲ(生薬学・漢方)【H30以降入学者用】 Pharmacognosy III (Applied Pharmacognosy and Kampo)				担当者所属・ 職名・氏名		薬学研究科 准教授 伊藤 美千穂			
配当 学年	2,3回生	単位数	2	開講年度・ 開講期	2019・ 前期	曜時限	月2	授業 形態	講義	使用 言語	日本語
学科	薬学部,薬科学科,薬学科			科目に対する区分		選択					
[授業の概要・目的]											
<p>自然が育んだ医薬品である生薬は、古来より多種多様な疾病の治療に応用され、人類の健康に多大な貢献をしてきた。本講義においては生薬の特質を論述し、現代に生きる重要生薬について理解を深める。また日本の伝統医療である漢方について、近代医療との違いやそれぞれの特徴を生かした併用に関連する薬学的視点からのアプローチ、グローバル化に伴って考慮すべき問題点等について、考える力を養うことを目的とする。</p>											
[到達目標]											
<p>複雑系である生薬の特性を理解した上で、生薬を含む製剤の最適な利用について、また医療現場で近代医薬品と併用される場合の注意点などについて説明できる。セルフメディケーションが重要になる潮流の中で、天然物由来製品の上手な利用法について説明できる。国際的な視点から薬用資源を概括し、その将来的な利用、国際条約との関連について理解する。</p>											
[授業計画と内容]											
<p>(1) 生薬、生薬学とその研究領域 (2) 生薬の特性 近代医薬品との相違点 (3) 世界の医療事情における生薬の占める位置 (4) 生薬・薬用資源をめぐる行政 (5) セルフメディケーションと健康食品 (6) 近代医療の中での漢方薬・生薬の利用・併用 (7) 漢方基礎の基礎 神農本草経から理論まで (8) 生薬生産にまつわる諸事情 (9) 薬毒同源 矢毒・麻薬・覚醒剤・毒キノコ (10) 草根木皮以外の薬用資源(抗生物質を含む) (11) 生薬中に含まれる薬用成分 (12) 薬用資源探索から医薬品の開発まで (13) 生薬学領域の研究の実際 (14) 生薬各論(1) (15) 生薬各論(2)</p>											
[履修要件]											
特になし											
[成績評価の方法・観点及び達成度]											
<p>平常点10～30%、小テスト等10～30%、定期試験60～80%、にて評価する。小テストでは前週までの授業中にだした課題、前週までの授業内容の理解度を問う問題などを出題する予定。定期試験では、教科書に書かれている内容を理解し、上記の到達目標に掲げる内容について自分なりの意見を持ちつつ考察しているか、を問う予定である。</p>											
[本講義と関連する講義]											
薬用植物学、(天然物薬学1、天然物薬学2)											
----- 天然物薬学Ⅲ(生薬学・漢方)【H30以降入学者用】(2)へ続く -----											

天然物薬学Ⅲ(生薬学・漢方)【H30以降入学者用】(2)

【対応するコアカリキュラム一般目標(薬学科)】

C5 (1) (2), E2 (9) (10)

【教科書】

伊藤美千穂編著 『生薬学へのいざない』(京都廣川書店) ISBN:978-4-901789-27-1

【参考書等】

(参考書)

伊藤美千穂・北山隆 監修 『生薬単 第3版』(丸善) ISBN:978-4-8419-4008-4

伊藤美千穂 編著 京大病院薬剤部 監修 『エビデンス・ベース 漢方薬活用ガイド 第2版』(京都廣川書店)

ISBN:978-4-909197-38-2

高石・馬場・本多編集 『薬学生のための薬用植物学・生薬学テキスト』(廣川書店)

授業中に廻す生薬標本について五感を使ってよく覚えるようにしてください。

【授業外学習(予習・復習)等】

その日の授業内容について、指定する教科書の相当部分を読んで予習しておくこと。また、課題を出すので、それを各自でやっておくこと。

(その他(オフィスアワー等))

必須要件とはしていないが、この講義を受講する場合は、1回生配当科目の全学共通教育「薬用植物学」を履修しておくことが望ましい。この講義は「薬用植物学」の内容は履修済みであるものとして進行する。

オフィスアワーの詳細については、KULASISで確認してください。

オフィスアワーの詳細については、KULASISで確認してください。

科目ナンバリング		U-PHA00 30000 SJ86											
授業科目名 <英訳>		創薬有機化学演習【H30以降入学者用】 Organic Chemistry Seminar				担当者所属・ 職名・氏名		薬学研究科 薬学研究科 薬学研究科 薬学研究科 薬学研究科		教授 講師 助教 助教 助教		掛谷 秀昭 瀧川 紘 小林 祐輔 井貫 晋輔 倉永 健史	
配当 学年	2,3回生	単位数	2	開講年度・ 開講期	2019・ 後期	曜時限	金2	授業 形態	演習	使用 言語	日本語		
学科	薬学部,薬科学科,薬学科				科目に対する区分		選択						
[授業の概要・目的]													
創薬研究におけるリード化合物からの構造最適化研究や臨床試験に供する大量の原薬生産では、目的の化合物を効率的に調製する化学合成経路の立案が求められる。創薬シーズとして魅力的な天然物やこれまでに開発された医薬品の合成例を学ぶとともに、創薬研究に有用な実践的な有機化学演習及びケミカルバイオロジー演習を行う。													
[到達目標]													
<ol style="list-style-type: none"> 1. 天然物に代表される複雑な分子骨格を有する化合物の合成経路や反応機構、さらには作用機序解析法を理解できる。 2. 構造未知の化合物のスペクトルデータを解析し、化学構造を考察できる。 3. 医薬品の化学合成プロセスを理解し、目的とする化合物の合成法を立案できる。 													
[授業計画と内容]													
<ol style="list-style-type: none"> 1. ケミカルバイオロジー演習：医薬品の化学的反応性と作用機序 2. ケミカルバイオロジー演習：標的タンパク質同定の方法論 1 3. ケミカルバイオロジー演習：標的タンパク質同定の方法論 2 4. スペクトル解析演習：平面構造の解析 5. スペクトル解析演習：立体構造の解析 6. スペクトル解析演習：異方性効果の利用 7. 医薬品合成化学演習：複素環骨格からなる医薬品の合成 1 8. 医薬品合成化学演習：複素環骨格からなる医薬品の合成 2 9. 医薬品合成化学演習：キラルな医薬品の性質と合成法 10. 有機反応化学演習：有機反応の選択性 11. 有機反応化学演習：有機反応の立体選択性 12. 有機反応化学演習：有機反応の反応機構 13. 機能性物質合成化学演習：多環性芳香族化合物の合成 1 14. 機能性物質合成化学演習：多環性芳香族化合物の合成 2 15. 機能性物質合成化学演習：多環性芳香族化合物の合成 3 													
[履修要件]													
実践的な有機化学演習及びケミカルバイオロジー演習を行う観点から、「有機化学4」、「有機化学5」、「天然物薬学I」、「天然物薬学II」を履修済みもしくは同時に履修することが望ましい。													
[成績評価の方法・観点及び達成度]													
出席レポート100%（講義時に実施する小テスト、及び、各回に課すレポートにより評価する。）													
[本講義と関連する講義]													
基礎有機化学 ・ 、有機化学1・2・4・5、医薬品化学（旧有機化学3）、天然物薬学I・II													
創薬有機化学演習【H30以降入学者用】(2)へ続く													

創薬有機化学演習【H30以降入学者用】(2)

【対応するコアカリキュラム一般目標（薬学科）】

C3

【教科書】

プリントを配付する。

【参考書等】

（参考書）

日本化学会編 『生物活性分子のケミカルバイオロジー』（化学同人）ISBN:978759813791

Robert B. Grossman 著・奥山格 訳 『有機反応機構の書き方 基礎から有機金属反応まで』（丸善出版）ISBN:978-4-621-08198-3

鈴木 啓介 『天然有機化合物の合成戦略』（岩波書店）ISBN:9784007305665

R. M. Silverstein, F. X. Webster, D. J. Kiemle, D.L. Bryce 著・岩澤 伸治, 豊田 真司, 村田 滋 訳 『有機化合物のスペクトルによる同定法』（東京化学同人）ISBN:9784807909162

有機合成化学協会編 『トップドラッグから学ぶ創薬化学』（東京化学同人）ISBN:978-4807907762

有機合成化学協会編 『医薬品の合成戦略』（化学同人）ISBN:978-4759816174

『HGS立体化学分子模型4010学生用セット』（丸善）ISBN:978-4902897272（他のメーカーの分子模型でも構いません。）

柴崎正勝ら監訳 『マクマリー有機化学 生体反応へのアプローチ』（東京化学同人）ISBN:9784807906918

【授業外学習（予習・復習）等】

有機合成試薬や反応機構、天然物薬学に関する基本的事項を履修していることを前提として、医薬品の合成経路及び構造解析などを解説する。理解が不十分な工程があれば、有機化学の該当部分の復習が必須である。事前に配布する課題プリントについて予習が必要であり、演習ではその解説および討論を行う。

（その他（オフィスアワー等））

特別実習において有機系研究室への配属を希望する者、製薬企業における研究開発に従事することを希望する者は、特に履修することが望まれる。

オフィスアワーの詳細については、KULASISで確認してください。

オフィスアワーの詳細については、KULASISで確認してください。

科目ナンバリング		U-PHA00 20000 LJ86									
授業科目名 <英訳>		物理化学I(量子化学)【H30以降入学者用】 Physical Chemistry I(Quantum Chemistry)				担当者所属・ 職名・氏名		薬学研究科 教授 加藤 博章			
配当 学年	2,3回生	単位数	2	開講年度・ 開講期	2019・ 前期	曜時限	月1	授業 形態	講義	使用 言語	日本語
学科		薬学部,薬科学科,薬学科			科目に対する区分		選択				
[授業の概要・目的]											
<p>本講義で受講者は、分子とは何か、原子をつなげて分子を構成する化学結合とは何かを学ぶ。すなわち、分子の構造・性質・反応を理解するための法則原理である量子化学の基礎事項について理解できるようになる。量子化学の基礎となるのは量子力学である。まず始めに、物質の運動を規定しているのはニュートン力学だが、それを分子に適用しようとするとき破綻するために量子力学が生み出された過程を学ぶ。ついで、量子力学の基本原則と波動方程式を学ぶ。さらに、波動方程式で記述される分子の振る舞いを学び、量子化学計算によって分子の構造や性質そして化学反応性を予想できることを理解する。</p> <p>分子と分子中の電子の振る舞いを理解するには量子化学が必要である。すなわち、量子化学は、物理化学、無機化学、有機化学、生物化学を問わず、すべての化学の基礎であるばかりでなく、分子から生命現象を理解し、医薬設計へと応用する場合の基礎となっている。</p>											
[到達目標]											
<ol style="list-style-type: none"> 1. なぜ、量子論が必要となるのか、古典物理学の破綻を基に説明できる。 2. シュレディンガーの波動方程式の基本を説明できる。 3. 分子軌道に基づいて化学結合の説明ができる。 4. フロンティア軌道理論で化学反応の起る仕組みについて基本を説明できる。 											
[授業計画と内容]											
<ol style="list-style-type: none"> 1. 量子化学を学ぶ意義 2. 量子論の誕生の背景と量子論の基本概念 (1) 3. 量子論の誕生の背景と量子論の基本概念 (2) 4. 量子力学の基本原則について 5. 井戸型ポテンシャルとシュレディンガー方程式 6. 水素原子の波動方程式 7. 水素原子の原子軌道 8. 多電子原子の量子状態と近似法の基礎 9. 水素分子イオンと分子軌道法 10. 二原子分子の分子軌道と および 結合 11. 炭化水素分子の混成軌道 12. 簡単な分子軌道計算と分子軌道法に基づく化学反応論 13. 原子価結合と交換相互作用 14. 分子の電子状態計算の方法と実際 15. 軌道相互作用に基づく分子間相互作用 											
[履修要件]											
<ol style="list-style-type: none"> 1. 高校生レベルの古典物理学に関する学習を終えているように努めていること、全学共通科目の初習物理学または物理学基礎論AB履修を推奨する。 2. 微分方程式(微分積分学)と行列・行列式(線形代数学)に関する数学の準備、全学共通科目の数学(微分積分学AB・線形代数学AB)の履修を推奨する。 											
----- 物理化学I(量子化学)【H30以降入学者用】(2)へ続く -----											

物理化学I (量子化学)【H30以降入学者用】(2)

[成績評価の方法・観点及び達成度]

小テストを5回程度実施(30%)、定期試験(70%)の割合で評価する。小テストでは、講義内容のうち重要な問題について理解度を問う。定期試験では、量子化学の基本原則を理解しているか、波動方程式を解けるか、分子が安定な理由を量子化学的に説明できるか、原子軌道と分子軌道の性質や特徴を説明できるかが問われる。

[本講義と関連する講義]

基礎物理化学(熱力学)、基礎有機化学I、II、有機化学I、物理化学III、分析化学I、生物化学I

[対応するコアカリキュラム一般目標(薬学科)]

C1(1)、C2(4)、C3(1)(2)(3)

[教科書]

阿部正紀『はじめて学ぶ量子化学』(培風館)ISBN:4563045470(記述は平易だが、理系の化学の学生が基礎として必要な量子力学の内容を網羅している優れた入門書。ただし、自習する場合は、参考書による補足がいる。)

[参考書等]

(参考書)

マッカーリ、サイモン『物理化学(上)』(東京化学同人(1999))ISBN:4807905082(化学の専門家をめざす量子化学の初心者が自学自習するために適した名著。本講義の教科書の詳しい説明が得られる。数学の補足も充実している。)

金折賢二『量子化学 基礎から応用まで』(講談社)ISBN:9784065133309(高校物理の内容から量子化学まで平易に書かれているが、理系学部で習得すべき量子化学がきちんと学べる)

D.O. Hayward、立花明知 訳『入門 量子化学』(化学同人(2005))ISBN:4759810099(初年時に化学の基礎事項を学んだ学生が、その基本原則としての量子化学の初歩を学ぶために適している。)

高塚和夫『化学結合論入門 - 量子論の基礎から学ぶ - 』(東京大学出版会(2007))ISBN:4130625063(量子化学に基づいて化学結合とその反応性を学べる優れた入門書)

アトキンス『物理化学(上)』(東京化学同人)ISBN:4807909088(物理化学の標準的な教科書における量子化学が記載されている)

マクマリー『有機化学 - 生体反応へのアプローチ - 』(東京化学同人)ISBN:9784807906918(量子化学で取り扱う有機化学的な内容の復習に用いる)

その他コメント:

HGS分子構造模型C型セット有機化学実習用(丸善出版(2017))などの分子モデルの利用を推奨します。

[授業外学習(予習・復習)等]

教科書を基に予習を行うこと。特に、数学的な背景については、理解した上で授業に出席することが望ましい。講義内容を整理して理解するため、ならびに理解内容を定着させるために復習を欠かさないこと。

(その他(オフィスアワー等))

数式が示す物理化学的な意味を理解する楽しさを伝えたいと思います。大学らしい化学の学習は量子化学から始まります。

オフィスアワーの詳細については、KULASISで確認してください。

科目ナンバリング		U-PHA00 20000 LJ86											
授業科目名 <英訳>		物理化学II(電気化学・ナノ化学)【H30以降入学者用】 Physical Chemistry II (Electro- and Nano- Chemistry)				担当者所属・ 職名・氏名		薬学研究科 薬学研究科		教授 講師		松崎 勝巳 矢野 義明	
配当 学年	2,3回生	単位数	2	開講年度・ 開講期	2019・ 前期	曜時限	水2	授業 形態	講義	使用 言語	日本語		
学科		薬学部,薬科学科,薬学科				科目に対する区分		選択					
[授業の概要・目的]													
複雑な不均一界面系(微小粒子系を含む)・高分子の基本的性質と研究方法、電解質水溶液のイオン平衡とイオン輸送、ならびに、これらの生命科学や薬学への応用について講義する。													
[到達目標]													
(1) 界面化学の基礎およびその薬学・生命科学との関連について説明できる。 (2) コロイド化学の基礎およびその薬学・生命科学との関連について説明できる。 (3) 電解質水溶液のイオン平衡について説明できる。 (4) 電解質水溶液のイオン輸送について説明できる。 (5) 高分子化学の基礎およびその薬学・生命科学との関連について説明できる。													
[授業計画と内容]													
1) 導入講義 (2) 界面張力と界面エネルギー (3) 吸着 (4) 界面活性剤 (5) 親水コロイドと疎水コロイド (6) 疎水コロイドの安定性: DLVO理論 (7) コロイド粒子の光散乱 (8) コロイド粒子の大きさの測定 (9) 電解質溶液の熱力学 (10) 電解質溶液の電気伝導 (11) 電気伝導と拡散 (12) 高分子の特徴・化学構造 (13) 高分子鎖のコンフォメーション・高分子溶液の性質 (14) 生体高分子の性質 (15) 高分子の力学的性質(レオロジー)													
[履修要件]													
特になし													
[成績評価の方法・観点及び達成度]													
定期試験で評価する。コロイド界面化学、高分子化学、電気化学およびそれらの薬学・生命科学との関連に関する基礎知識、および種々の数式のもつ意味を理解しているかが問われる。													
[本講義と関連する講義]													
基礎物理化学(熱力学)、分析化学I、基礎科学演習、創薬物理化学演習													
[対応するコアカリキュラム一般目標(薬学科)]													
C1(1)、C1(2)、C2(2)、C6(2)、E5(1)													
----- 物理化学II(電気化学・ナノ化学)【H30以降入学者用】(2)へ続く -----													

物理化学II(電気化学・ナノ化学)【H30以降入学用】(2)

[教科書]

使用しない

[参考書等]

(参考書)

桐野 豊 編 『生命薬学テキストシリーズ 物理化学 上』(共立出版) ISBN:4-320-05511-x
日本化学会 編 『コロイド科学 I.基礎および分散・吸着』(東京化学同人) ISBN:4-8079-0435-3
青木・長田・橋本・三輪 『Innovated物理化学大義』(京都廣川書店) ISBN:978-4-901789-41-7
大塚利行, 加納健司, 桑畑進 『ベーシック電気化学』(化学同人) ISBN:9784759808612
大島広行 訳 『コロイド科学ー基礎と応用ー』(東京化学同人) ISBN:978-4-8079-0844-8
高分子学会編 『基礎高分子科学』(東京化学同人)

[授業外学習(予習・復習)等]

プリントを授業時に配布するので、予習は不要。授業後、数式を自分で追跡してみるとともに、参考書等で関連項目を復習しておくこと。

(その他(オフィスアワー等))

複雑な不均一界面系である生体や医薬品製剤の基礎的知識と物理化学的研究方法を学びます。
オフィスアワーの詳細については、KULASISで確認してください。

オフィスアワーの詳細については、KULASISで確認してください。

科目ナンバリング		U-PHA00 20000 LJ86									
授業科目名 <英訳>		物理化学III (構造化学) 【H30以降入学者用】 Physical Chemistry III (Structural Chemistry)				担当者所属・ 職名・氏名		薬学研究科 教授 加藤 博章			
配当 学年	2,3回生	単位数	2	開講年度・ 開講期	2019・ 後期	曜時限	火2	授業 形態	講義	使用 言語	日本語
学科		薬学部,薬科学科,薬学科			科目に対する区分		選択				
[授業の概要・目的]											
<p>本講義で受講者は、分子と分子の間あるいは、原子と原子の間の相互作用について物理化学的原理と法則を学ぶ。ついで、それらがタンパク質や核酸など生体高分子の構造形成や分子間相互作用において、どのように役立っているのかを学び、生体高分子の立体構造が機能を発揮する仕組みを深く理解する。さらに、学習した分子間相互作用の解明には、原子間の距離と角度の情報の精密な計測結果が証拠となっていることから、分子の形を原子レベルで決定できる最も信頼性の高い方法であるX線結晶学について学び、分子構造決定の過程と問題点の理解を深める。</p> <p>医薬品と受容体の相互作用、受容体の精緻な立体構造形成の仕組みを理解するためには、分子間相互作用と分子の立体構造形成の原理と法則を把握することが不可欠であり、この講義で学ぶ内容は、医薬品の設計合成や薬理活性を研究するための最も重要な基礎である。</p>											
[到達目標]											
<ol style="list-style-type: none"> 1. 生体分子の立体構造とリガンド - 受容体相互作用を支配する非共有結合相互作用について説明できる。 2. タンパク質と核酸の立体構造について物理化学的な説明ができる。 3. タンパク質と核酸の相互作用について立体構造を基盤とした説明ができる。 4. X線結晶解析によってタンパク質の立体構造が決定できる原理を説明できる。 5. 立体構造に基づいた医薬品の開発例について説明できる。 											
[授業計画と内容]											
<ol style="list-style-type: none"> 1. 導入：物理化学における構造論の位置づけ 2. 生体分子の立体構造を規定する非共有結合相互作用 3. 生体分子の立体構造を規定する非共有結合相互作用その2 4. タンパク質の立体構造形成と分子機能 5. 核酸の立体構造形成と分子機能 6. 核酸とタンパク質の相互作用の立体構造基盤 7. X線結晶解析とフーリエ解析 8. X線回折の原理 9. 生体分子の結晶形成の概要 10. 結晶の対称性と群論の概要 11. X線回折とフーリエ解析その2 12. X線回折波の位相決定法 13. 電子密度図に基づいた分子モデルの構築 14. 立体構造モデルの精度とその確認方法 15. 標的タンパク質の立体構造にもとづいた医薬品開発 											
[履修要件]											
<ol style="list-style-type: none"> 1. 講義への積極的な参加：本講義では、講述内容の理解度の確認を目的としてクイズ&議論を実施する。この仕組みを成功させるためには、受講者と教員、あるいは受講者どうしの意見交換が重要であり、積極的な取り組みを要請する。 2. 指定された資料の精読：本講義では、沢山の教科書と参考書や論文資料などを基に講義内容を組み立てている。そのため、毎回の講義内容のプリントを読むだけでなく、引用元の教科書などを読むことが必要である。また、関連する資料を調査することが深い学びに導いてくれる。 3. 基礎物理化学(熱力学)、生物化学Iをすでに履修していること。 											
----- 物理化学III (構造化学) 【H30以降入学者用】 (2)へ続く -----											

物理化学III (構造化学)【H30以降入学者用】(2)

[成績評価の方法・観点及び達成度]

小テストまたはレポート3回30%、期末試験70%の割合で評価する。小テストでは、一連のトピックが終了した時点での到達度を評価する。定期試験では、到達目標に挙げた5項目の達成度を評価する。なお、分子構造に関する講義であることから、説明においては化学構造式を用いて表現することが要求される点に注意すること。

[本講義と関連する講義]

物理化学I、生物化学I, II, III、物理化学IV、分析化学III；全共科目：基礎物理化学（熱力学）

[対応するコアカリキュラム一般目標（薬学科）]

C1(1)、C2(4)、C4(1)(2)(3)C6(2)(3)(4)

[教科書]

アトキンス 『アトキンス物理化学（下）第10版』（東京化学同人(2017)）ISBN:9784807909087（授業計画の1-3に対応）
デービッドネルソン、マイケルコックス 『レーニンジャーの新生化学』（廣川書店）ISBN:4567244060（授業計画の4-6に対応）
David Blow 『Outline of Crystallography for Biologists』（Oxford University Press(2002)）ISBN:0198510519（授業計画の7-14に対応）
上記、Outline of Crystallography for Biologistsについては、化学同人から翻訳版「生命系のためのX線解析入門」が出版されている。

[参考書等]

（参考書）

Carl Branden & John Tooze 『Introduction to Protein Structure 2nd ed.』（Garland(1999)）ISBN:9780815323051（タンパク質と核酸の立体構造に関する世界的なスタンダードの教科書）
John Kuriyan, Boyana Konforti, David Wemmer 『The Molecules of Life; Physical and Chemical Principles』（Garland Sciences(2013)）ISBN:0815341881（創薬研究者志望の学部学生向けに書かれた生物物理化学の名著）
Mathews, Van Holde, Appling, Anthony-Cahill 『Biochemistry 4th ed.』（Pearson(2013)）ISBN:0138004641（物理化学の記述が充実している生化学の教科書）

その他コメント：

1. タンパク質分子を表示するために、ソフトウェアPyMolの利用を推奨します。
2. HGS分子構造模型C型セット有機化学実習用（丸善出版(2017)）などの分子モデルの利用を推奨します。
3. Introduction to Protein Structureについては、ニュートンプレス(2000)から翻訳版が出版されています。

[授業外学習（予習・復習）等]

各回の授業前に、指定された予習を行っておくこと。本科目は、単に断片的な知識を学ぶのではなく、論理的な関係性の理解を深める内容となっていることから、授業を基点に各自がさらに参考資料を調査することで深く学習することを奨励します。

（その他（オフィスアワー等））

分子構造に基づいて生物機能を理解する楽しさを伝えたいと思います。

オフィスアワーの詳細については、KULASISで確認してください。

科目ナンバリング		U-PHA00 30000 LJ86											
授業科目名 <英訳>	物理化学IV (生物物理化学) 【H30以降入学者用】 Physical Chemistry IV (Biophysical Chemistry)					担当者所属・ 職名・氏名	薬学研究科	教授	松崎	勝巳			
			薬学研究科	教授	加藤		博章						
				薬学研究科	教授	石濱	泰						
				薬学研究科	准教授	星野	大						
				薬学研究科	准教授	中津	亨						
				薬学研究科	准教授	杉山	直幸						
配当 学年	2,3回生	単位数	2	開講年度・ 開講期	2019・ 後期	曜時限	木2	授業 形態	講義	使用 言語	日本語		
学科	薬学部,薬科学科,薬学科			科目に対する区分		選択							
【授業の概要・目的】													
創薬の主なターゲットは酵素・受容体などのタンパク質である。本科目では、水溶性タンパク質および膜タンパク質についてその構造形成と機能発現機構を解明するための方法論および基礎知識について、最新の研究成果も交えて概説する。													
【到達目標】													
<ol style="list-style-type: none"> 1. タンパク質のネイティブ構造の安定性を熱力学的に解析できる。 2. 生体膜の基本構造およびその基礎となる脂質二分子膜・膜タンパク質の構造形成原理や動的性質を説明できる。 3. プロテオミクスによるタンパク質の網羅的解析法およびタンパク質の翻訳後修飾について説明できる。 4. 受容体とリガンドとの相互作用の分子構造基盤を具体例を挙げて説明できる。 													
【授業計画と内容】													
<ol style="list-style-type: none"> 1. タンパク質のネイティブ構造の特徴 2. タンパク質の高次構造を規定する因子 3. タンパク質の動的な立体構造変化 4. タンパク質のネイティブ構造の安定性 5. タンパク質のフォールディング反応の速度論解析法 6. タンパク質の構造変化により引き起こされる疾病 7. 生体膜の基本構造 8. 脂質分子集合体の構造と物性 9. 膜タンパク質構造形成の基本原則 10. 両親媒性二次構造 11. 生体膜の動的構造 12. プロテオミクスによるタンパク質の網羅的な解析法 13. タンパク質の翻訳後修飾解析 14. 膜タンパク質の立体構造と機能 15. 酵素の基質結合部位が有する立体構造上の特徴と機能との関係 													
【履修要件】													
特になし													
【成績評価の方法・観点及び達成度】													
到達目標 1～3 が達成できているかどうかを期末試験 (80%)、到達目標 4 が達成できているかどうかをレポートの内容 (20%) で評価する。													
【本講義と関連する講義】													
基礎物理化学 (熱力学)、物理化学II・III、分析化学III													
----- 物理化学IV (生物物理化学) 【H30以降入学者用】 (2)へ続く -----													

物理化学Ⅳ(生物物理化学)【H30以降入学者用】(2)

【対応するコアカリキュラム一般目標(薬学科)】

C 1 (1) (2)、C 2 (4) (5)、C 4 (1) (2) (3)、C 6 (2) (3) (6)、E 1 (1)

【教科書】

プリント

【参考書等】

(参考書)

桐野 豊 編 『生命薬学テキストシリーズ 物理化学 下』(共立出版)

浜口浩三 著 『改訂 蛋白質機能の分子論』(学会出版センター)

Terry P. Kenakin 『A Pharmacology Primer (3rd ed.); Theory, Applications, and Methods』(Academic Press)

【授業外学習(予習・復習)等】

プリントを授業時に配付するので、予習は不要。授業後、参考書等で関連項目を復習しておくこと。

(その他(オフィスアワー等))

サイエンスの楽しさを伝えたいと思います。

オフィスアワーの詳細については、KULASISで確認してください。

オフィスアワーの詳細については、KULASISで確認してください。

科目ナンバリング		U-PHA00 20000 LJ86									
授業科目名 <英訳>		分析化学I (化学分析学) 【H30以降入学者用】 Analytical Chemistry I (Analytical Chemistry)				担当者所属・ 職名・氏名		薬学研究科 教授 石濱 泰			
配当 学年	2,3回生	単位数	2	開講年度・ 開講期	2019・ 前期	曜時限	月2	授業 形態	講義	使用 言語	日本語
学科		薬学部,薬科学科,薬学科			科目に対する区分		必修				
[授業の概要・目的]											
分析化学は、物質の分離、同定、定量を行うための学問であり、薬学のみならずすべての科学の基礎となる重要な科目である。分析化学1では、薬学に関連した分析化学の理論と、医薬品や生体関連物質の分析への応用に関して講述する。											
[到達目標]											
分析実験の基礎、有効数字・正確さ・精度・誤差について習得する。 化学平衡の基礎について学び、各種滴定法について習得する。 溶媒抽出、クロマトグラフィー、電気泳動について習得する。											
[授業計画と内容]											
1. 分析実験の基礎 (器具・試薬・秤量) について 2. 有効数字・正確さ・精度・誤差について 3. 化学平衡の基礎について 4. 酸-塩基平衡について 5. 中和滴定について 6. 非水滴定について 7. 金属錯体について 8. キレート滴定について 9. 沈殿滴定について 10. 電極電位について 11. 酸化還元滴定について 12. 溶媒抽出について 13. クロマトグラフィーの原理について 14. 液体・ガス・薄層クロマトグラフィーについて 15. 電気泳動について											
[履修要件]											
特になし											
[成績評価の方法・観点及び達成度]											
定期試験(90%)および講義毎の小テスト(10%)により評価する。定期試験では、化学実験の基礎や化学平衡について論述できるか、各種滴定法、溶媒抽出、クロマトグラフィー、電気泳動について十分な理解度があるかどうか問われる。小テストは、講義内容が理解できているかについて問われる。											
[本講義と関連する講義]											
分析化学2・3、物理化学2											
[対応するコアカリキュラム一般目標 (薬学科)]											
C1 (1) (2), C2 (1) (2) (3) (5), C3 (5)											
----- 分析化学I (化学分析学) 【H30以降入学者用】 (2)へ続く -----											

分析化学I (化学分析学) 【H30以降入学者用】 (2)

[教科書]

宗林由樹・向井浩 『基礎分析化学』 (サイエンス社) ISBN:978-4-7819-1155-7

能田均・萩中淳・山口政俊 『パートナー分析化学II 改訂第3版』 (南江堂) ISBN:978-4-524-40344-8 (分析化学3でも使います。)

[参考書等]

(参考書)

授業中に紹介する

[授業外学習(予習・復習)等]

毎回、教科書を読んで予習し、わからないところを整理しておく。また、授業後の小テストなどを利用して、復習する。

(その他(オフィスアワー等))

オフィスアワーの詳細については、KULASISで確認してください。

科目ナンバリング		U-PHA00 20000 LJ86									
授業科目名 <英訳>		分析化学Ⅱ(放射化学)【H30以降入学者用】 Analytical Chemistry II (Radiochemistry)				担当者所属・ 職名・氏名		薬学研究科 教授 小野 正博			
配当 学年	2,3回生	単位数	2	開講年度・ 開講期	2019・ 後期	曜時限	水1	授業 形態	講義	使用 言語	日本語
学科		薬学部,薬科学科,薬学科			科目に対する区分		必修				
[授業の概要・目的]											
物質の変化に関して理解を深めるために、化学反応での物質の変化の過程を取り扱う反応速度論と原子核の変化により生じる放射線・放射能の基礎(物理、化学、生物学)について学ぶ。											
[到達目標]											
<ol style="list-style-type: none"> 1. 反応次数、速度定数、反応速度式、代表的な反応次数の決定法、反応速度に影響を与える因子について説明できる。 2. 原子の構造、放射壊変、放射線、放射能について説明できる。 3. 放射線の物質との相互作用について説明できる。 4. 放射線の測定原理、代表的な放射線測定装置について説明できる。 5. 放射性同位体の製造のための核反応と装置について説明できる。 6. 薬学領域における放射線・放射能の利用について説明できる。 7. 放射線の生体への影響について説明できる。 8. 放射線の防護と管理、放射性化合物の安全取り扱いについて説明できる。 											
[授業計画と内容]											
<p>反応速度論</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 反応次数、速度定数、反応速度式、代表的な反応次数の決定法 ・ 反応速度に影響を与える因子 <p>放射線・放射能</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 放射線・放射能の基礎 <ul style="list-style-type: none"> ・ 原子の構造、放射線と放射能、同位体 ・ 放射壊変 ・ 放射線の物質との相互作用 ・ 代表的な放射性核種の物理的性質、放射能の単位 ・ 放射線の測定原理、代表的な放射線測定装置 2. 薬学領域における放射線・放射能の利用 <ul style="list-style-type: none"> ・ 放射性同位体の製造のための核反応と装置 ・ 放射平衡とジェネレータ ・ 放射性化合物の安全取り扱い ・ トレーサ法とその薬学領域への代表的な利用法 3. 放射線の生体への影響 <ul style="list-style-type: none"> ・ 放射線の線量と生体損傷 ・ 放射線の細胞、組織、臓器、個体への影響 											
[履修要件]											
特になし											
[成績評価の方法・観点及び達成度]											
定期試験。小テストの結果を加算することがある。反応速度論に関する基本事項とその応用、放射線・放射能に関する物理学、化学、生物学に関する基本事項およびそれらの関連について論述できるかが問われる。											
----- 分析化学Ⅱ(放射化学)【H30以降入学者用】(2)へ続く -----											

分析化学II (放射化学) 【H30以降入学者用】 (2)

[本講義と関連する講義]

分析化学、創薬物理化学演習

[対応するコアカリキュラム一般目標 (薬学科)]

C1(1)、(3)、D2(1)

[教科書]

プリント

[参考書等]

(参考書)

「新放射化学・放射性医薬品学」(南江堂)

[授業外学習 (予習・復習) 等]

事前に配布するプリントを一読し、疑問点等を整理しておくこと。また、必要に応じ、参考書なども利用して、講義内容について理解を深め、知識の定着を図ること。

(その他 (オフィスアワー等))

オフィスアワーの詳細については、KULASISで確認してください。

オフィスアワーの詳細については、KULASISで確認してください。

科目ナンバリング		U-PHA00 20000 LJ86											
授業科目名 <英訳>		分析化学Ⅲ(機器分析化学)【H30以降入学者用】 Analytical Chemistry III (Instrumental Chemistry)				担当者所属・ 職名・氏名		薬学研究科 薬学研究科		教授 准教授		石濱 泰 杉山 直幸	
配当 学年	2,3回生	単位数	2	開講年度・ 開講期	2019・ 後期	曜時限	月1	授業 形態	講義	使用 言語	日本語		
学科	薬学部,薬科学科,薬学科				科目に対する区分		選択						
[授業の概要・目的]													
紫外・可視・赤外線吸光分析法、蛍光、核磁気共鳴分光法(NMR)、熱分析、ラマン、原子吸光、旋光分散、円偏光二色性(CD)および質量分析法の理論と応用について講義する。													
[到達目標]													
各種スペクトル分析および機器分析法について、その原理を習得し、応用例について理解する。													
[授業計画と内容]													
1. 物質の光の吸収について 2. 紫外可視分光法の原理について 3. 紫外可視分光法を用いた応用例について 4. 原子吸光と原子発光について 5. 蛍光光度法の原理について 6. 蛍光光度法を用いた応用例について 7. 旋光分散、円偏光二色性測定法の原理と応用について 8. 電磁波の波長、波数、周波数と共鳴エネルギーについて 9. 赤外・ラマン分光法の原理について 10. 赤外分光法を用いた応用例について 11. 核磁気共鳴分光法(NMR)の原理について 12. NMRにおける化学シフト、スピン結合について 13. 熱分析について 14. 質量分析法の原理、イオン化の種類について 15. 質量分析法を用いた応用例について													
[履修要件]													
特になし													
[成績評価の方法・観点及び達成度]													
定期試験(90%)および講義毎に行う小テスト(10%)で評価を行う。定期試験では、各種スペクトル分析および機器分析法について、その原理を理解し、応用も含めて論述できるかが問われる。また小テストは授業内容に対する理解度を評価対象とする。													
[本講義と関連する講義]													
分析化学1、物理化学1、創薬物理化学演習													
[対応するコアカリキュラム一般目標(薬学科)]													
C1(1), C2(1)(4)(5)(6), C3(1)(4), C4(3)													
----- 分析化学Ⅲ(機器分析化学)【H30以降入学者用】(2)へ続く -----													

分析化学III(機器分析化学)【H30以降入学者用】(2)

[教科書]

能田 均・萩中 淳・山口 政俊 『パートナー分析化学II 改訂第3版』(南江堂) ISBN:978-4-524-40344-8

[参考書等]

(参考書)
授業中に紹介する

[授業外学習(予習・復習)等]

授業前に教科書を読み、不明な点を整理しておくこと。また授業後の小テストなどを用いて復習しておくこと。

(その他(オフィスアワー等))

オフィスアワーの詳細については、KULASISで確認してください。

科目ナンバリング		U-PHA00 30000 LJ86											
授業科目名 <英訳>		分析化学Ⅳ(臨床分析学)【H30以降入学者用】 Analytical Chemistry IV (Clinical Analysis)				担当者所属・ 職名・氏名		薬学研究科 薬学研究科		教授 講師		小野 正博 渡邊 裕之	
配当 学年	2,3回生	単位数	2	開講年度・ 開講期	2019・ 前期	曜時限	木2	授業 形態	講義	使用 言語	日本語		
学科		薬学部,薬科学科,薬学科				科目に対する区分		選択					
[授業の概要・目的]													
臨床やライフサイエンス領域で利用されている、生体の形態、機能の解析法を講述する。すなわち、画像による形態、機能の診断法の概要とそれに用いる医薬品(造影剤、放射性医薬品)、また、酵素反応や免疫反応などの生化学的反応を用いる生体試料中の生理活性物質の高感度定量分析法(臨床化学分析)の原理と応用について学ぶ。													
[到達目標]													
<ol style="list-style-type: none"> 1. 代表的な画像診断技術について、それぞれの技術の原理、特徴について説明できる。 2. 画像診断法に用いられる医薬品について説明できる。 3. 臨床分析化学の概要について説明できる。 4. 酵素反応、免疫反応などを用いる、生体試料中の生理活性物質の高感度定量分析法の原理と特徴について説明できる。 5. 代表的な画像診断、臨床化学分析法の臨床およびライフサイエンス領域への応用性について説明できる。 													
[授業計画と内容]													
<ol style="list-style-type: none"> 1. 生体の形態と機能の解析法 <ul style="list-style-type: none"> ・臨床で用いられる、生体の形態と機能の解析法 2. 画像診断法とそれに用いられる医薬品 <ul style="list-style-type: none"> ・核医学検査法、それに用いられる放射性医薬品 ・代表的な治療用放射性医薬品の分子設計、特徴、用途 ・放射性医薬品の管理・取扱いに関する基準と制度 ・放射性医薬品の品質管理、安全取扱 ・X線撮像法とX線造影剤 ・磁気共鳴画像撮影法(MRI)とMRI造影剤 ・超音波診断法、その他の画像診断技術 3. 臨床化学分析 <ul style="list-style-type: none"> ・臨床分析化学の概要、精度管理、生体試料の取扱 ・酵素を用いた代表的な分析法の原理と特徴 ・酵素を用いた分析法の代表例 ・免疫反応を用いた代表的な分析法の原理と特徴 ・免疫反応を用いた分析の代表例 ・センサー、ドライケミストリー、その他の臨床分析技術 ・画像診断薬以外の代表的なインビボ機能検査薬 													
[履修要件]													
本科目の学修には基礎的な放射化学の知識を前提としており、分析化学Ⅱ(放射化学)をすでに履修していることが条件となる。													
----- 分析化学Ⅳ(臨床分析学)【H30以降入学者用】(2)へ続く -----													

分析化学Ⅳ（臨床分析学）【H30以降入学者用】(2)

【成績評価の方法・観点及び達成度】

定期試験。小テストの結果を加算することがある。画像診断技術とそれに用いる医薬品、生化学的反応を用いる生理活性物質の高感度定量分析法とその臨床領域への応用について論述できるかが問われる。

【本講義と関連する講義】

分析化学Ⅱ

【対応するコアカリキュラム一般目標（薬学科）】

C2（6）、E1（2）、F(2)

【教科書】

プリント

【参考書等】

（参考書）

『新 放射化学・放射性医薬品学』（南江堂）

『薬学生のための臨床化学』（南江堂）

【授業外学習（予習・復習）等】

事前に配布するプリントを一読し、疑問点等を整理しておくこと。また、必要に応じ、参考書なども利用して、講義内容について理解を深め、知識の定着を図ること。

（その他（オフィスアワー等））

オフィスアワーの詳細については、KULASISで確認してください。

オフィスアワーの詳細については、KULASISで確認してください。

科目ナンバリング		U-PHA00 20000 SJ86											
授業科目名 <英訳>		基礎科学演習【H30以降入学者用】 Basic Science Seminar				担当者所属・ 職名・氏名		薬学研究科 薬学研究科 薬学研究科 薬学研究科		教授 教授 准教授 講師		加藤 博章 石濱 泰 星野 大 矢野 義明	
配当 学年	2,3回生	単位数	2	開講年度・ 開講期	2019・ 前期	曜時限	金3	授業 形態	演習	使用 言語	日本語		
学科		薬学部,薬科学科,薬学科				科目に対する区分		選択					
【授業の概要・目的】													
<p>本演習で受講者は「どうして生命はATPをエネルギー通貨にしているのか」を「問い」として、学生が主体的批判的に思考する過程を通して、活動としての科学を実践的に学ぶ。生命活動のエネルギーの源であるATPは、熱力学、酸化還元反応、代謝の生化学反応、リン酸化による細胞内情報伝達などいろいろな事柄と関わるため、基礎化学と生命科学との結びつきについて具体的な現象を通して原理を理解することができる。また、物理・分析化学の基礎が生命科学を研究するためにどのように活用されるのかを深く理解できる。</p> <p>受講者は、互いの調査結果を議論することで、実験事実に基づいた推論の過程、科学発見のプロセスを理解する。さらに、調査結果をレポートにまとめて提出することで、論証過程を記述するスキルを習得する。教員は、これらの各過程において指導助言やブレインストーミング、討論に参加して学習を援助する。受講者はこの過程を通じて、科学研究に必要なブレインストーミング、討論、発表、質疑応答、レポート執筆などの基礎的な姿勢・態度・技術を習得する。その結果、科学とは、無知への好奇心によって扇動される楽しい営みであることが理解され、受講者は未知への興味を煽られることで、とことん調べることの魅力に取り憑かれるであろう。</p>													
【到達目標】													
<ol style="list-style-type: none"> 1. 素朴な疑問を科学研究のテーマに設定する過程の要点が説明できる。 2. 解答未知の問題を批判的に思考することができる。 3. 対話を通じて問題点を浮かび上げ、解決に向けた指摘ができる。 4. 説得力のある発表を行い、論理的な文章を書くことができる。 5. ATPの科学について物理化学的な説明ができる。 													
【授業計画と内容】													
<ol style="list-style-type: none"> 1. オリエンテーション 2 - 3. 具体的に調査するテーマの設定に向けたブレインストーミング 4 - 7. テーマに基づいた調査の実施 8 - 9. 調査のまとめと発表資料の作成 10 - 11. 発表会と質疑応答の実施その1 12 - 14. レポートの執筆と添削指導 15. まとめ 													
【履修要件】													
<ol style="list-style-type: none"> 1. 履修定員を20名程度とする。 履修希望者には、シラバスを読んで履修に向けた志（志望の動機や目的）のエッセイを3月下旬に提出してもらい、それを元に4月初旬に選抜を行う。 2. 講義への積極的な参加：本講義では、学生が疑問を主体的に調査して学ぶ。そのため、単に出席するだけでなく、議論と調査に向けた予習・復習、会合での発言、提出物の作成に積極的に取り組むことが要請される。 3. 全学共通科目：基礎物理化学（熱力学）、基礎有機化学I、基礎有機化学II、基礎化学実験、薬学専門科目：生物化学I（物質生化学）、薬学研究SGD演習を履修していることを要件とする。 													
----- 基礎科学演習【H30以降入学者用】(2)へ続く -----													

基礎科学演習【H30以降入学者用】(2)

【成績評価の方法・観点及び達成度】

話し合いでの質疑応答の回数と議題解決への貢献度 30%、調査結果のプレゼンテーションの内容と説得力 30%、レポートの論理性（論証と論拠の的確さ）40%の割合で、到達目標に挙げた5項目の総合的な達成度を評価する。

【本講義と関連する講義】

薬学研究SGD演習、物理化学I, II, III, IV、分析化学I, II, III、生物化学I, II、全共科目：基礎物理化学（熱力学）、情報基礎、基礎有機化学I,II、情報基礎、統計入門

【対応するコアカリキュラム一般目標（薬学科）】

A(2)(3)(5)、C1(1)(2)(3)、C2(1)(2)(3)(4)、C6(5)、G(1)(2)(3)

【教科書】

使用しない

【参考書等】

（参考書）

Peter W. Atkins、米沢富美子訳 『エントロピーと秩序 - 熱力学第二法則への招待』（日経サイエンス（1992））ISBN:4532520142（熱力学を難しい数式を用いずに解説した名著。熱力学が科学の基本であることが納得できるであろう。）

John Kuriyan, Boyana Konforti, David Wemmer 『The Molecules of Life #8211 Physical and Chemical Principles』（Garland Sciences (2013)）ISBN:0815341881（創薬研究者志望の学部学生向けに書かれた生物物理化学の名著）

渡辺 正、中林誠一郎 『電子移動の化学 - 電気化学入門』（朝倉書店 (1996)）ISBN:4254145934（酸化的リン酸化や光合成の化学などを学習する生物系の学生向けに書かれた電子移動の化学の入門書）

福澤一吉 『議論のレッスン』（NHK出版）ISBN:4140885521（議論（論証）の構造や規則が理解できる優れた本）

新井和弘、坂倉杏介 『グループ学習入門』（慶應義塾大学出版会）ISBN:476642039X（協働学習、話し合い、成果発表などに関する初歩が書かれている入門書）

その他：

1. HGS分子構造模型C型セット有機化学実習用（丸善出版(2017)）などの分子モデルの利用を推奨します。
2. パソコンに分子を表示して構造を調べるために、ソフトウェアPyMolの利用を推奨します。

【授業外学習（予習・復習）等】

基礎物理化学（熱力学）と生物化学Iで用いた教科書などで、予習復習を実施すること。

文献調査を行い結果をまとめて議論するための準備が必要となります。

レポートの添削指導に対する修正への取り組みが必要となります。

（その他（オフィスアワー等））

授業には、パソコンを持参すること。

オフィスアワーの詳細については、KULASISで確認してください。

科目ナンバリング		U-PHA00 20000 SJ86											
授業科目名 <英訳>		創薬物理化学演習【H30以降入学者用】 Medicinal Physical Chemistry Seminar				担当者所属・ 職名・氏名		薬学研究科 薬学研究科 薬学研究科 薬学研究科 薬学研究科		教授 教授 准教授 講師 助教		松崎 勝巳 石濱 泰 杉山 直幸 渡邊 裕之 飯國 慎平	
配当 学年	2,3回生	単位数	2	開講年度・ 開講期	2019・ 後期	曜時限	火3	授業 形態	演習	使用 言語	日本語		
学科	薬学部,薬科学科,薬学科				科目に対する区分		選択						
[授業の概要・目的]													
分析化学2、分析化学3、物理化学2の講義内容に対応した演習を行う。													
[到達目標]													
反応速度論、分光學、機器分析学、電気化学、界面化学等に関する基本的事項を演習により習得し、理解する。													
[授業計画と内容]													
<p>以下のような課題について、授業を行う。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 反応速度の一般式と医薬品の分解反応速度との関係について 2. 単反応(0次反応、1次反応、2次反応等)について 3. 複合反応(可逆反応、連続反応、併発反応)について 4. 反応速度定数と絶対温度との関係式について 5. 放射性核種の壊変速度について 6. 電磁波の波長、波数、周波数と共鳴エネルギーについて 7. 紫外可視吸光、蛍光、原子吸光、旋光度、円二色性の測定原理と応用例について 8. 紫外可視吸光、旋光度、円偏光二色性測定法のデータを用いた解析 9. 赤外・ラマン分光法、NMR、熱分析法、質量分析法の測定原理と応用例について 10. 赤外分光法、NMR、熱分析法、質量分析法を用いた化合物の同定 11. 電解質水溶液の平均活量係数、モル伝導率について 12. 電池の起電力について 13. 両親媒性物質の吸着、分子集合体形成について 14. コロイド粒子の沈降について 15. コロイド粒子の表面電位について 													
[履修要件]													
分析化学2、分析化学3、物理化学2を履修していること。													
[成績評価の方法・観点及び達成度]													
平常点評価40%、小テスト30%、レポート30%により評価する。反応速度論、分光學、機器分析学、電気化学、界面化学等に関する基本的事項を十分に習得できているかを、平常点(出席状況、講義中に行う演習問題の採点結果、演習内容への理解度など)、課題として出される小テスト及びレポートの採点結果によって評価する。													
[本講義と関連する講義]													
分析化学2・3, 物理化学2													
[対応するコアカリキュラム一般目標(薬学科)]													
C1(1)(2)(3), C2(1)(2)(4)(5)(6), C3(1)(4), C4(3), C6(2), E5(1)													
創薬物理化学演習【H30以降入学者用】(2)へ続く													

創薬物理化学演習【H30以降入学者用】(2)

[教科書]

使用しない

[参考書等]

(参考書)
授業中に紹介する

[授業外学習(予習・復習)等]

本講義の予習として、分析化学2、分析化学3、物理化学2の講義内容をしっかり復習しておくこと。また、本講義の演習内容を繰り返し復習すること。

(その他(オフィスアワー等))

物理系薬学の科目では、理論の真の理解のために演習が重要であるので、履修が望ましい

オフィスアワーの詳細については、KULASISで確認してください。

科目ナンバリング		U-PHA00 10000 LJ86									
授業科目名 <英訳>		生物化学I (物質生化学) 【H30以降入学者用】 Biological Chemistry 1				担当者所属・ 職名・氏名		薬学研究科 准教授 柿澤 昌			
配当 学年	1回生以上	単位数	2	開講年度・ 開講期	2019・ 後期	曜時限	木1	授業 形態	講義	使用 言語	日本語
学科		薬学部,薬科学科,薬学科			科目に対する区分		必修				
[授業の概要・目的]											
生化学とは化学的手段により生命現象を解明する学問である。生体がどんな物質から成り立っているか、それらの物質がいかに合成され分解されるか、これらの物質がどのような性質を持ち、生体の中でどのような機能を営んでいるかを究明する学問である。本講義では、生化学の基本概念および主要な生体成分の性質について講述する。											
[到達目標]											
1. 生命現象を担う分子の構造、性質、役割に関する基本的事項が説明できる。 2. 本講義を履修後、さらに薬学専門実習4の生物化学実習Iを履修することで、酵素の反応速度論と阻害機構について説明できるようになるとともに、実際の測定結果に基づいて考察し判断できるようになる。											
[授業計画と内容]											
1. 生体物質化学の基礎 (導入講義) 2. 水の物理化学的特性と生体における役割 3. アミノ酸の特徴ならびにペプチド・タンパク質との関係 4. タンパク質の高次構造と機能の関連 5. タンパク質とリガンドの相互作用の生物学的意義 6. 酵素の作用機構と自由エネルギー 7. 酵素の反応速度論と阻害機構 8. 単糖の分類と構造 9. グルコシド結合と二糖・多糖類の構造・生体における役割 10. ヌクレオチドの分類と構造 11. 核酸の構造と機能 12. 脂質の構造と物理化学的性質 13. 生体膜の構造と物理化学的性質 14. 生体膜を横切る物質の輸送 15. 生体エネルギーの産生と生化学的反応間の共役											
[履修要件]											
特になし											
[成績評価の方法・観点及び達成度]											
定期試験(筆記)の成績で評価する。到達目標に記した生命現象を担う分子の構造、性質、役割に関する基本的事項の理解と応用力が評価対象となる。											
[本講義と関連する講義]											
生物化学2・3・4・5・6、衛生薬学2											
[対応するコアカリキュラム一般目標(薬学科)]											
C6(2)(3)(5)											
[教科書]											
ネルソン、コックス 『レーニンジャーの新生化学：生化学と分子生物学の基本原則(第6版) 上巻・下巻』(廣川書店)											
----- 生物化学I(物質生化学)【H30以降入学者用】(2)へ続く -----											

生物化学I (物質生化学) 【H30以降入学者用】 (2)

[参考書等]

(参考書)
授業中に紹介する

[授業外学習 (予習・復習) 等]

板書・講義ノート及び授業中に配布するプリントを活用した復習により、講義内容のより深い理解と知識の定着をはかること。

(その他 (オフィスアワー等))

生体主要成分を学び、薬学専門実習 4 と併せて生化学、特に生体物質化学と酵素学の基本概念を理解する。本講義で触れる内容は生物化学 2 及び薬学専門実習 4 における生物化学実習 の理解にも必要となるので、しっかりとした復習が望まれる。

オフィスアワーの詳細については、KULASISで確認してください。

科目ナンバリング		U-PHA00 20000 LJ86									
授業科目名 <英訳>		生物化学II(代謝生化学)【H30以降入学者用】 Biological Chemistry II (Energy Metabolism)				担当者所属・ 職名・氏名		薬学研究科 准教授 申 惠媛			
配当 学年	2,3回生	単位数	2	開講年度・ 開講期	2019・ 前期	曜時限	木2	授業 形態	講義	使用 言語	日本語
学科		薬学部,薬科学科,薬学科			科目に対する区分		必修				
[授業の概要・目的]											
生命活動の基本となるエネルギー代謝、および生体を構成する糖質、脂質、アミノ酸、ヌクレオチドの合成と分解について理解することを目的とする。さらに、インスリンやグルカゴンなどのホルモンによるこれらの代謝の調節と統合について理解を深めるとともに、生体の恒常性の維持機構について学ぶ。											
[到達目標]											
生命活動の基本となるエネルギー代謝について理解する。 生体を構成する糖質、脂質、アミノ酸、ヌクレオチドの合成と分解について説明できるようになる。 インスリンやグルカゴンなどのホルモンによるこれらの代謝の調節と統合について理解を深める。 生体の恒常性の維持機構について説明できるようになる。											
[授業計画と内容]											
1. 解糖系 2. 糖新生 3. ペントースリン酸経路 4. グリコーゲンの合成と分解 5. クエン酸回路 6. 脂肪酸の異化 7. アミノ酸代謝と尿素回路 8. ミトコンドリアにおける電子伝達反応 9. ミトコンドリアにおけるATP合成 10. 脂質の生合成 11. コレステロールとエイコサノイドの生合成 12. アミノ酸の生合成 13. ヌクレオチドの生合成 14. ホルモンによる代謝の調節と統合(1) 15. ホルモンによる代謝の調節と統合(2)											
[履修要件]											
特になし											
[成績評価の方法・観点及び達成度]											
小テスト30%、期末テスト70% 到達目標に記した糖質、脂質、アミノ酸、ヌクレオチドの代謝に関する基本的事項およびホルモンによるこれらの代謝の調節と統合について理解し説明できるか、生体の恒常性の維持機構について概説できるかが評価対象となる。											
[本講義と関連する講義]											
生物化学1・3・4・5・6、衛生薬学1・2、生理学2											
----- 生物化学II(代謝生化学)【H30以降入学者用】(2)へ続く -----											

生物化学II(代謝生化学)【H30以降入学者用】(2)

【対応するコアカリキュラム一般目標(薬学科)】

C6(1)(2)(3)(5)

【教科書】

ネルソン、コックス『レーニンジャーの新生化学：生化学と分子生物学の基本原理(第6版)上巻・下巻』(廣川書店)

【参考書等】

(参考書)

『ストライヤー生化学(第6版)』(東京化学同人)

『細胞の分子生物学(第5版)』(ニュートンプレス)

『プロッパ-細胞生物学：細胞の基本原則を学ぶ』(化学同人)

【授業外学習(予習・復習)等】

3回行う小テストの前に、それまでの講義の復習をして臨みましょう。

(その他(オフィスアワー等))

生体内の代謝が功妙に調節されている様子を理解する。

オフィスアワーの詳細については、KULASISで確認してください。

科目ナンバリング		U-PHA00 20000 LJ86									
授業科目名 <英訳>		生物化学Ⅲ(分子生物学)【H30以降入学者用】 Biological Chemistry III (Molecular biology)				担当者所属・ 職名・氏名		薬学研究科 講師 三宅 歩			
配当 学年	2,3回生	単位数	2	開講年度・ 開講期	2019・ 後期	曜時限	木1	授業 形態	講義	使用 言語	日本語
学科		薬学部,薬科学科,薬学科			科目に対する区分		必修				
[授業の概要・目的]											
遺伝子情報伝達の物質的基盤となっている核酸の構造と機能に関する下記の項目について概説する。											
[到達目標]											
<ol style="list-style-type: none"> 1. 核酸の構造と機能について説明できる。 2. 遺伝子と染色体について説明できる。 3. DNA、RNAおよびタンパク質の生合成について説明できる。 4. 遺伝子発現過程について説明できる 5. 遺伝子発現調節機構について説明できる。 6. 組換えDNAの基礎技術について説明できる。 											
[授業計画と内容]											
<ol style="list-style-type: none"> 1. 導入：核酸に関する研究の歴史 2. ヌクレオチドと核酸：ヌクレオチドと核酸(DNA, RNA)の種類、構造、性質 3. 遺伝子と染色体(1)：染色体の成分 4. 遺伝子と染色体(2)：遺伝子と染色体の構造 5. DNA代謝(1)：DNAの複製 6. DNA代謝(2)：DNAの変異と修復 7. DNA代謝(3)：DNA組換え 8. RNA代謝(1)：DNAからRNAへの転写 9. RNA代謝(2)：RNAのプロセッシング 10. タンパク質代謝(1)：RNAからタンパク質への翻訳 11. タンパク質代謝(2)：タンパク質の翻訳後の成熟と分解 12. 遺伝子発現調節(1)：遺伝子発現調節の原理 13. 遺伝子発現調節(2)：細菌における遺伝子発現調節機構 14. 遺伝子発現調節(3)：真核生物における遺伝子発現調節機構 15. 遺伝子工学技術の基礎 											
[履修要件]											
本科目の学修には基礎的な生化学の知識を前提としており、生物化学1および2をすでに履修していることが条件となる。											
[成績評価の方法・観点及び達成度]											
定期試験(筆記)の成績で評価する。到達目標に記した核酸、遺伝子、染色体について論述できるか、DNA、RNAおよびタンパク質の代謝や遺伝子発現調節機構や組換えDNAの基礎技術に対して分子生物学的に論じることができかが評価対象となる。											
[本講義と関連する講義]											
生物化学1・2・4・5・6、感染防御学1、生理学3											
----- 生物化学Ⅲ(分子生物学)【H30以降入学者用】(2)へ続く -----											

生物化学Ⅲ(分子生物学)【H30以降入学者用】(2)

【対応するコアカリキュラム一般目標(薬学科)】

C4(1), C6(1), C6(2), C6(3), C6(4), C6(7), C7(1), C8(3), C8(4)

【教科書】

プリント配布

【参考書等】

(参考書)

『Principles of Biochemistry』(Worth Publishers)

『レーニンジャーの新生化学(第6版)』(廣川書店)

【授業外学習(予習・復習)等】

講義プリントは事前に配布されるので、その内容を一読し、疑問点等を整理しておくこと。また知識の定着を図るために必ず復習を行うこと。

(その他(オフィスアワー等))

オフィスアワーの詳細については、KULASISで確認してください。

科目ナンバリング		U-PHA00 30000 LJ86											
授業科目名 <英訳>		生物化学Ⅳ（応用生物分子科学）【H30以降入学者用】 Biological Chemistry IV (Applied biomolecular science)				担当者所属・ 職名・氏名		化学研究所 化学研究所		教授 講師		二木 史朗 今西 未来	
配当 学年	2,3回生	単位数	2	開講年度・ 開講期	2019・ 前期	曜時限	木1	授業 形態	講義	使用 言語	日本語		
学科		薬学部,薬科学科,薬学科				科目に対する区分		選択					
【授業の概要・目的】													
遺伝子組み換え技術は、生命科学分野の研究に必須のものである。また、この技術を利用した生物医薬品の開発は、医療・医薬分野に新しい潮流をもたらしている。本講義では、遺伝子工学・タンパク質工学等を含めたバイオテクノロジーに関する基礎知識、およびその医療・医薬への応用について解説する。													
【到達目標】													
1. 遺伝子工学・タンパク質工学等を含めたバイオテクノロジーに関する基礎概念を理解する。 2. 遺伝子工学・タンパク質工学の医療・医薬への応用について理解を深める。													
【授業計画と内容】													
1. 遺伝子組換え技術とバイオテクノロジー 2. 制限酵素とその応用 3. PCR法とその応用 4. 遺伝子クローニング 5. 遺伝子構造の改変 6. 細胞内遺伝子導入 7. トランスジェニック生物 8. 遺伝子ターゲティング 9. 遺伝病とゲノム創薬 10. 癌と遺伝子 11. 遺伝子治療 12. 核酸医薬品 13. タンパク質工学の基礎と応用 14. 抗体の構造と多様性 15. 抗体医薬品													
【履修要件】													
特になし													
【成績評価の方法・観点及び達成度】													
定期試験。遺伝子工学・タンパク質工学等を含めたバイオテクノロジーに関する基礎概念の理解、および、遺伝子工学・タンパク質工学の医療・医薬への応用についての知識が問われる。													
【本講義と関連する講義】													
生物化学1～3、5～6、生理学2													
【対応するコアカリキュラム一般目標（薬学科）】													
C6(4)													
----- 生物化学Ⅳ（応用生物分子科学）【H30以降入学者用】(2)へ続く -----													

生物化学Ⅳ(応用生物分子科学)【H30以降入学者用】(2)

【教科書】

適宜プリント等を配布する。

【参考書等】

(参考書)

『レーニンジャーの新生化学(第6版)』(廣川書店)(その他、授業中に適宜紹介する。)

【授業外学習(予習・復習)等】

日頃から、遺伝子工学・タンパク質工学等を含めたバイオテクノロジー、およびその医療・医薬への応用に関する動向に注意を払うこと。

(その他(オフィスアワー等))

オフィスアワーの詳細については、KULASISで確認してください。

科目ナンバリング		U-PHA00 30000 LJ86									
授業科目名 <英訳>		生物化学V (細胞生物学) 【H30以降入学者用】 Biological Chemistry V (Cell Biology)				担当者所属・ 職名・氏名		生命科学研究所 教授 生命科学研究所 助教		井垣 達史 榎本 将人	
配当 学年	2,3回生	単位数	2	開講年度・ 開講期	2019・ 後期	曜時限	水2	授業 形態	講義	使用 言語	日本語
学科		薬学部,薬科学科,薬学科			科目に対する区分		選択				
[授業の概要・目的]											
<p>本講義では、生命の最小単位である細胞に焦点をあて、生物化学1～4で習得した種々の生化学的反応を細胞の場で統一的に理解する。また、細胞内小器官の構造と機能、細胞の増殖・分化・細胞死、さらには細胞がつくる社会の成立原理とその破綻による癌の発生機構に関しても理解を深める。細胞生物学を飛躍的に発展させた重要な研究成果も取り上げながら、考えることを重視した講義を行う。</p>											
[到達目標]											
<ol style="list-style-type: none"> 1. 種々の生化学的反応を細胞の場で説明できる 2. 細胞内小器官や小胞の構造と機能を説明できる 3. 細胞の増殖や細胞死の機構とその役割を説明できる 4. 細胞社会の成立原理とその破綻による癌の発生機構を説明できる 											
[授業計画と内容]											
<ol style="list-style-type: none"> 1. 細胞生物学概論 2. モデル生物を用いた細胞生物学研究 3. 細胞周期 4. 細胞増殖 5. 細胞死 6. 細胞の数と大きさの制御 7. 膜の構造・膜輸送 8. 細胞内区画と細胞内輸送 9. 細胞骨格と細胞運動 10. 細胞極性と細胞接着 11. 細胞の情報伝達 12. 性と遺伝の細胞生物学 13. がんの発生メカニズム 14. 多細胞生物の発生 15. 細胞のつくる社会 											
[履修要件]											
特になし											
[成績評価の方法・観点及び達成度]											
<p>平常点(小テスト)30%、定期試験70%の割合で評価する。 特に、種々の生化学的反応や細胞内小器官、小胞、細胞骨格、細胞接着、細胞増殖、細胞死の機構やその役割を説明できるか、またそれらの破綻による病態発現(癌など)を説明できるかを評価する。</p>											
[本講義と関連する講義]											
生物化学1・2・3・4・6											
----- 生物化学V (細胞生物学) 【H30以降入学者用】 (2)へ続く -----											

生物化学V (細胞生物学)【H30以降入学者用】(2)

【対応するコアカリキュラム一般目標 (薬学科)】

C6 (1) (2) (3) (4) (5) (6) (7)、C7 (1)

【教科書】

プリント

【参考書等】

(参考書)

『Essential 細胞生物学』

【授業外学習 (予習・復習) 等】

毎回、講義の最後に講義内容に関する小テストを行い、次回講義の最初にその解説を行う。知識や考え方の定着を図るために、毎回復習を行うこと。

(その他 (オフィスアワー等))

オフィスアワーの詳細については、KULASISで確認してください。

オフィスアワーの詳細については、KULASISで確認してください。

科目ナンバリング		U-PHA00 30000 LJ86									
授業科目名 <英訳>		生物化学VI (生理化学) 【H30以降入学者用】 Biological Chemistry VI (Physiological Chemistry)				担当者所属・ 職名・氏名		生命科学研究科 准教授 加藤 裕教			
配当 学年	2,3回生	単位数	2	開講年度・ 開講期	2019・ 後期	曜時限	月2	授業 形態	講義	使用 言語	日本語
学科		薬学部,薬科学科,薬学科			科目に対する区分		選択				
[授業の概要・目的]											
<p>生体は様々な環境の変化に対応し、自らの恒常性を維持している。生命体に必要な秩序の維持には、大きく細胞内恒常性と細胞外恒常性とがある。脊椎動物では、これら恒常性の維持に内分泌系と中枢神経系の2つが機能している。両者は、相互に深くかかわりあい、内分泌系はホルモンを神経系は神経伝達物質を分泌し、生理機能を調節している。本講義では、その基本概念とその分子機構を中心に概説する。</p>											
[到達目標]											
<ol style="list-style-type: none"> 1. 生体の恒常性の維持に関わる2つのシステム、内分泌系と神経系の体系を説明できる。 2. 内分泌系と神経系に関わる情報伝達機構の概要を説明できる。 3. 内分泌系と神経系における分子レベルでの情報伝達機構について説明できる。 4. 内分泌系と神経系で役割を果たす情報伝達機構の特徴と差異について説明できる。 											
[授業計画と内容]											
<ol style="list-style-type: none"> 1. 情報伝達機構を概観する。 2. 三量体G蛋白質を介した情報伝達機構について説明する。 3. 低分子量G蛋白質を介した情報伝達機構について説明する。 4. チロシンキナーゼを介した情報伝達機構について説明する。 5. イオンチャネルを介した神経伝達機構について説明する。 6. 神経回路形成の分子機構について説明する。 7. 視覚情報の伝達機構について説明する。 8. 嗅覚情報の伝達機構について説明する。 9. 聴覚情報の伝達機構について説明する。 10. 味覚情報の伝達機構について説明する。 11. 神経可塑性と記憶形成の分子機構について説明する。 12. グルコース代謝に関わるホルモンの作用機構と糖尿病発症機構について説明する。 13. アミノ酸に関わるホルモンの作用機構について説明する。 14. カルシウムイオンのホメオスタシスに関わるホルモンの作用機構について説明する。 15. 脳下垂体ホルモンとステロイドホルモンの作用機構について説明する。 											
[履修要件]											
特になし											
[成績評価の方法・観点及び達成度]											
<p>小テスト20%、定期試験80%の割合で評価する。小テストでは、講義内容のうち重要な語句について簡単な説明を求める。定期試験では、内分泌系と神経系における分子レベルでの情報伝達機構について概説できるか、またそれらの生理機能における役割について論述できるかが問われる。</p>											
[本講義と関連する講義]											
生理学1・2、生物化学1・2・3・4・5											
----- 生物化学VI (生理化学) 【H30以降入学者用】 (2)へ続く -----											

生物化学VI (生理化学)【H30以降入学者用】(2)

【対応するコアカリキュラム一般目標 (薬学科)】

C 6 (1) (2) (3) (6) (7)、C 7 (1) (2)

【教科書】

使用しない

【参考書等】

(参考書)

A. Johnson et al. 『Molecular Biology of the Cell』 (Garland Science)

V.W. Rodwell et al. 『Harper's Illustrated Biochemistry』 (Mc Graw Hill Education)

【授業外学習 (予習・復習) 等】

講義プリントは事前に配布されるので、その内容について疑問点等を整理しておくこと、また、各回、前週の講義内容から知識を問う小テストを実施するので、知識の定着を図るために必ず復習を行うこと。

(その他 (オフィスアワー等))

オフィスアワーの詳細については、KULASISで確認してください。

科目ナンバリング		U-PHA00 30000 LJ86									
授業科目名 <英訳>		感染防御学I (微生物・ウイルス学)【H30以降入学者用】 Infection and Host Defense I (Microbiology and Virology)				担当者所属・ 職名・氏名		ウイルス・再生医学研究所 教授 ウイルス・再生医学研究所 教授 化学研究所 教授		小柳 義夫 生田 宏一 栗原 達夫	
配当 学年	2,3回生	単位数	2	開講年度・ 開講期	2019・ 前期	曜時限	水1	授業 形態	講義	使用 言語	日本語
学科		薬学部,薬科学科,薬学科			科目に対する区分		選択				
【授業の概要・目的】											
<p>本講義では感染に関わる病原体と生体の防御反応について、前半は細菌学の、後半は免疫学とウイルス学、一部寄生虫学の講義を行う。細菌学として、(1)細菌の分類と構造、(2)細菌の生理と代謝、(3)細菌の遺伝学、(4)細菌の病原性、(5)抗菌薬を中心に講述する。細菌の分類、構造、生活環などに関する基本的事項、ヒトと細菌の関わりおよび病原細菌に関する基本的事項の修得を目的とする。さらに、免疫学として、(1)免疫反応を担う細胞群、(2)各免疫反応の詳細を中心に講述する。ウイルス学として、(1)ウイルスの性状・分類・構造、(2)ウイルスの病原性について講述する。</p>											
【到達目標】											
<ol style="list-style-type: none"> 1. 細菌の分類、性質、構造、増殖機構について説明できるようになる。 2. 細菌の同化作用、代謝調節、行動、適応について概説できるようになる。 3. 細菌の遺伝子伝達について説明できるようになる。 4. 感染の成立と共生および代表的な細菌毒素について説明できるようになる。 5. 滅菌、消毒、殺菌、静菌の概念および主な滅菌法と消毒法について説明できるようになる。 6. 代表的な病原細菌について説明できるようになる。 7. 抗菌薬の作用機構および薬剤耐性菌や薬剤耐性化機構について概説できるようになる。 8. 代表的な抗菌薬について説明できるようになる。 9. 免疫系の構成細胞とその役割を説明できるようになる。 10. ウイルス・細菌・寄生虫に対する自然免疫、液性免疫、細胞性免疫のそれぞれについて説明できるようになる。 11. 病原体に対する生体防御機構の分子細胞論が説明できる。 12. 個体へのウイルスや寄生虫感染の成立過程と発症プロセスとパターンを概説できるようになる。 13. 免疫反応に関わる重要な分子について、その分子生物学知見を説明できるようになる。 14. 抗体やワクチン療法について最新知見を説明できるようになる。 											
【授業計画と内容】											
<ol style="list-style-type: none"> 1. 細菌の分類・形態・構造 栗原 2. 細菌の生理・代謝・行動・適応 栗原 3. 細菌の遺伝学 栗原 4. 感染論、滅菌と消毒 栗原 5. 細菌と疾病 栗原 6. 抗菌薬の性質と作用機序 栗原 7. 抗菌薬各論 栗原 8. ウイルスの性状・分類・構造 小柳 9. 病原体感染論1 (ウイルス・寄生虫) 小柳 10. 免疫系の構成要素、自然免疫 生田 11. 抗体の構造とB細胞の多様性、T細胞による抗原の認識 生田 12. B細胞の分化、T細胞の分化 生田 13. 病原体感染論2 (ウイルス・寄生虫) 小柳 14. T細胞の免疫応答、B細胞の免疫応答機構 生田 15. 病原体に対する免疫応答 (ワクチンを含む) 小柳 											
----- 感染防御学I (微生物・ウイルス学)【H30以降入学者用】(2)へ続く -----											

感染防御学(微生物・ウイルス学)【H30以降入学者用】(2)

【履修要件】

特になし

【成績評価の方法・観点及び達成度】

平常点10%、中間定期試験(細菌学)45%と期末定期試験(免疫学、ウイルス学)45%の割合で評価する。それぞれの定期試験では、到達目標(1から7)と到達目標(8から14)の細菌学・免疫学・ウイルス学としてのそれぞれのキーワードの説明として80%以上をできるか問われる。到達目標に関わるキーワードの説明は各授業で解説する。

【本講義と関連する講義】

感染防御学2、生物化学3

【対応するコアカリキュラム一般目標(薬学科)】

C8(1)(2)(3)(4)

【教科書】

使用しない

【参考書等】

(参考書)

今井康之、増澤俊幸『微生物学(改訂第7版)』(南江堂)

Peter Parham 著(笹月健彦監訳)『エッセンシャル免疫学(改訂第3版)』(メディカル・サイエンス・インターナショナル社)

高田賢藏 編『医科ウイルス学(改訂第3版)』(南江堂)

笹川千尋、林 哲也『医科細菌学(改訂第4版)』(南江堂)

【授業外学習(予習・復習)等】

予習・復習を心掛けて下さい。寄生虫学と真菌学については十分な授業時間を確保することができません。

(その他(オフィスアワー等))

在室中はいつでも可能です。ウイルス研究所分子生物実験棟(35棟)223A室
事前連絡方法：電話(内線 19-4813), e-mail (ykoyanag@infront.kyoto-u.ac.jp)

オフィスアワーの詳細については、KULASISで確認してください。

科目ナンバリング		U-PHA00 30000 LJ86																																							
授業科目名 <英訳>		感染防御学II (免疫・ウイルス学)【H30以降入学者用】 Infection and Host Defense II (Immunology and Virology)				担当者所属・ 職名・氏名		ウイルス・再生医学研究所 教授 小柳 義夫 ウイルス・再生医学研究所 教授 生田 宏一 ウイルス・再生医学研究所 講師 安永 純一郎 非常勤講師 松岡 雅雄																																	
配当 学年	2,3回生	単位数	2	開講年度・ 開講期	2019・ 後期	曜時間	水1	授業 形態	講義	使用 言語	日本語																														
学科		薬学部,薬科学科,薬学科			科目に対する区分		選択																																		
【授業の概要・目的】																																									
<p>生体防御反応を担う免疫機構について、(1) 生体防御機構の破綻、(2) 自然免疫と獲得免疫の共進化、粘膜免疫、(3) アレルギー・自己免疫疾患、(4) がんや移植免疫、(5) 免疫関連医薬品などの医薬学領域における必要な知識の修得を目的とする。さらに、ヒトの多様な疾患の原因となるウイルスについて、(1) ウイルスの複製機構、(2) ウイルスの遺伝学、(3) ウイルス・寄生虫を含む感染症の疫学、(4) ワクチン、(5) 抗ウイルス薬、(6) 各ウイルス感染症について講述する。ウイルスとして、レトロウイルス、ヘルペスウイルス、肝炎ウイルス、インフルエンザウイルス、パピローマウイルス、寄生虫としてマラリアなどの病原性に関する最新情報を提供する。</p>																																									
【到達目標】																																									
<ol style="list-style-type: none"> 1. 代表的な病原体(レトロウイルス、ヘルペスウイルス、肝炎ウイルス、インフルエンザウイルス、パピローマウイルス、マラリア)についての病原性ならびに公衆衛生的観点も含めた対策を説明できるようになる。 2. 先天性並びに後天性免疫機構の破綻を説明できるようになる。 3. 細胞ならびに臓器移植に関する最近の知見を説明できる 4. がんに対する免疫反応の分子細胞論が説明できる。 5. アレルギー・自己免疫疾患について説明できるようになる。 6. 免疫関連医薬品の最近の知見について説明できるようになる。 7. ウイルス感染の複製過程と発症プロセスとパターンを概説できるようになる。 8. ワクチン、抗ウイルス薬の作用機序、ならびに、それらの開発と適応の問題点について説明できるようになる。 9. 遺伝子治療ベクターとしてのウイルスの利用について概説できるようになる。 																																									
【授業計画と内容】																																									
<table border="0"> <tr> <td>1. 生体防御機構の破綻(先天性免疫不全含む)</td> <td>小柳</td> </tr> <tr> <td>2. 自然免疫と獲得免疫の共進化、粘膜免疫</td> <td>生田</td> </tr> <tr> <td>3. アレルギー・自己免疫疾患</td> <td>生田</td> </tr> <tr> <td>4. 移植免疫、がん免疫</td> <td>生田</td> </tr> <tr> <td>5. 感染症の疫学(ウイルス・寄生虫)</td> <td>小柳</td> </tr> <tr> <td>6. ウイルス複製と病原性の機序</td> <td>小柳</td> </tr> <tr> <td>7. 免疫関連医薬品</td> <td>生田</td> </tr> <tr> <td>8. 人獣共通ウイルス感染症ならびにDNAウイルス</td> <td>小柳</td> </tr> <tr> <td>9. 腸管・呼吸器・発疹性・神経病原性ウイルス</td> <td>小柳</td> </tr> <tr> <td>10. 抗ウイルス薬の化学的性状と作用機序</td> <td>小柳</td> </tr> <tr> <td>11. ヒトT細胞白血病ウイルス</td> <td>松岡</td> </tr> <tr> <td>12. 肝炎ウイルス</td> <td>安永</td> </tr> <tr> <td>13. がんウイルス</td> <td>安永</td> </tr> <tr> <td>14. インフルエンザウイルス</td> <td>松岡</td> </tr> <tr> <td>15. 先端治療論(遺伝子治療を含む)</td> <td>小柳</td> </tr> </table>												1. 生体防御機構の破綻(先天性免疫不全含む)	小柳	2. 自然免疫と獲得免疫の共進化、粘膜免疫	生田	3. アレルギー・自己免疫疾患	生田	4. 移植免疫、がん免疫	生田	5. 感染症の疫学(ウイルス・寄生虫)	小柳	6. ウイルス複製と病原性の機序	小柳	7. 免疫関連医薬品	生田	8. 人獣共通ウイルス感染症ならびにDNAウイルス	小柳	9. 腸管・呼吸器・発疹性・神経病原性ウイルス	小柳	10. 抗ウイルス薬の化学的性状と作用機序	小柳	11. ヒトT細胞白血病ウイルス	松岡	12. 肝炎ウイルス	安永	13. がんウイルス	安永	14. インフルエンザウイルス	松岡	15. 先端治療論(遺伝子治療を含む)	小柳
1. 生体防御機構の破綻(先天性免疫不全含む)	小柳																																								
2. 自然免疫と獲得免疫の共進化、粘膜免疫	生田																																								
3. アレルギー・自己免疫疾患	生田																																								
4. 移植免疫、がん免疫	生田																																								
5. 感染症の疫学(ウイルス・寄生虫)	小柳																																								
6. ウイルス複製と病原性の機序	小柳																																								
7. 免疫関連医薬品	生田																																								
8. 人獣共通ウイルス感染症ならびにDNAウイルス	小柳																																								
9. 腸管・呼吸器・発疹性・神経病原性ウイルス	小柳																																								
10. 抗ウイルス薬の化学的性状と作用機序	小柳																																								
11. ヒトT細胞白血病ウイルス	松岡																																								
12. 肝炎ウイルス	安永																																								
13. がんウイルス	安永																																								
14. インフルエンザウイルス	松岡																																								
15. 先端治療論(遺伝子治療を含む)	小柳																																								
【履修要件】																																									
特になし																																									
【成績評価の方法・観点及び達成度】																																									
<p>平常点10%、定期試験(免疫学、ウイルス学)90%の割合で評価する。定期試験では、到達目標(1から9)の免疫学・ウイルス学としてのそれぞれのキーワードの説明として80%以上をできるか問われる。到達目標に関わるキーワードの説明は各授業で解説する。</p>																																									
----- 感染防御学II(免疫・ウイルス学)【H30以降入学者用】(2)へ続く -----																																									

感染防御学II (免疫・ウイルス学)【H30以降入学者用】(2)

[本講義と関連する講義]

感染防御学 1

[対応するコアカリキュラム一般目標 (薬学科)]

C8(1)(2)(3)(4) E2(7)

[教科書]

使用しない

[参考書等]

(参考書)

Peter Parham 著 (笹月健彦監訳) 『エッセンシャル免疫学 (改定第3版)』 (メディカル・サイエンス・インターナショナル社)

荒川宣親、神谷茂、柳雄介 『病原微生物学 基礎と臨床 (第1版)』 (東京化学同人)

高田賢藏 編 『医科ウイルス学 (改訂第3版)』 (南江堂)

[授業外学習 (予習・復習) 等]

毎回、授業の際に次回の授業の予習について指示する。定期的に試験問題の解説により復習を行う。

(その他 (オフィスアワー等))

在室中はいつでも可能です。ウイルス研究所分子生物実験棟(35棟) 223A室

事前連絡方法：電話(内線 19-4813), e-mail (ykoyanag@infront.kyoto-u.ac.jp)

オフィスアワーの詳細については、KULASISで確認してください。

科目ナンバリング		U-PHA00 30000 LJ86									
授業科目名 <英訳>		衛生薬学I (健康化学) 【H30以降入学者用】 Pharmaceutical Health Science I (Health Chemistry)				担当者所属・ 職名・氏名		薬学研究科 教授 中山 和久			
配当 学年	2,3回生	単位数	2	開講年度・ 開講期	2019・ 後期	曜時限	月2	授業 形態	講義	使用 言語	日本語
学科		薬学部,薬科学科,薬学科			科目に対する区分		選択				
[授業の概要・目的]											
人の健康の維持および増進と環境因子や薬物との関連を理解するために、栄養素と食品の化学、食品衛生について学ぶ。また、経口感染症や食中毒に関して、公衆衛生的観点から理解を深める。											
[到達目標]											
栄養素と食品の化学について説明できる。 食品衛生、経口感染症や食中毒に関して説明できる。 人の健康の維持および増進と環境因子や薬物との関連について理解する。											
[授業計画と内容]											
1. 三大栄養素 2. 脂溶性ビタミン 3. 水溶性ビタミン 4. ミネラル 5. 保健機能食品 6. 食品添加物 7. 食品成分の変質と食品の保存 8. 経口感染症と食中毒(1) 9. 経口感染症と食中毒(2) 10. プリオン病 11. 高病原性トリインフルエンザ 12. 遺伝子組換え作物 13. 自然毒食中毒 14. 食物アレルギー 15. 健康と疾病の予防											
[履修要件]											
事前に生物化学I(物質生化学)と生物化学II(代謝生化学)を受講していること。											
[成績評価の方法・観点及び達成度]											
小テスト30%、期末テスト70% 人の健康の維持および増進と環境因子や薬物との関連、栄養素と食品の化学、食品衛生、経口感染症や食中毒について、公衆衛生的観点から理解し、説明できるのかが評価の対象となる。											
[本講義と関連する講義]											
衛生薬学II、生物化学I、生物化学II											
[対応するコアカリキュラム一般目標(薬学科)]											
D1 (1) (2) (3)											
[教科書]											
使用しない											
----- 衛生薬学I(健康化学)【H30以降入学者用】(2)へ続く -----											

衛生薬学I (健康化学) 【H30以降入学者用】(2)

[参考書等]

(参考書)

今井浩孝・小椋康光編 『衛生薬学：基礎・予防・臨床（改訂第2版）』（南江堂）
鍛冶利幸・佐藤雅彦編著 『コンパス衛生薬学 - 健康と環境 - 改訂第2版』（南江堂）
那須正夫・和田啓爾編 『食品衛生学（「食の安全」の科学）改訂第2版』（南江堂）

[授業外学習（予習・復習）等]

3回行う小テストの前に、それまでの講義の復習をして臨みましょう。

(その他（オフィスアワー等）)

快適な人間環境を築いて維持していくために必須の知識

オフィスアワーの詳細については、KULASISで確認してください。

科目ナンバリング		U-PHA00 30000 LJ86									
授業科目名 <英訳>		衛生薬学II (環境衛生学) 【H30以降入学者用】 Pharmaceutical Health Science II (Public Health)				担当者所属・ 職名・氏名		薬学研究科 教授 中山 和久			
配当 学年	2,3回生	単位数	2	開講年度・ 開講期	2019・ 前期	曜時限	月1	授業 形態	講義	使用 言語	日本語
学科	薬学部,薬科学科,薬学科			科目に対する区分		選択					
[授業の概要・目的]											
環境と人間の相互作用の重要性を理解し、生活環境の質の評価および確保の方法, および保健衛生について学ぶ。また、化学物質と生体とのかかわり、特に異物の体内動態と代謝反応についての理解を深める。											
[到達目標]											
環境と人間の相互作用の重要性を理解する。 生活環境の質の評価および確保の方法, および保健衛生について説明できる。 化学物質と生体とのかかわり、特に異物の体内動態と代謝反応について理解を深める。											
[授業計画と内容]											
1. 無機化学物質による汚染 2. 農薬の種類と毒性 3. ダイオキシン類 4. 内分泌攪乱化学物質 5. 異物の体内動態 6. 異物代謝の第一相反応(1) 7. 異物代謝の第一相反応(2) 8. 異物代謝の第二相反応 9. 異物代謝を左右する因子 10. 化学物質による発がん(1) 11. 化学物質による発がん(2) 12. オゾン層の破壊 13. 地球の温暖化 14. 水の衛生 15. 空気の衛生											
[履修要件]											
事前に衛生薬学I (健康化学) を受講していること。											
[成績評価の方法・観点及び達成度]											
小テスト30%、期末テスト70% 環境と人間の相互作用の重要性、生活環境の質の評価および確保の方法, 保健衛生、化学物質と生体とのかかわり(特に異物の体内動態と代謝反応) について理解し、説明できるのかが評価の対象となる。											
[本講義と関連する講義]											
衛生薬学I、生物化学I、生物化学II											
[対応するコアカリキュラム一般目標(薬学科)]											
D2 (1) (2)											
[教科書]											
使用しない											
----- 衛生薬学II (環境衛生学) 【H30以降入学者用】 (2)へ続く -----											

衛生薬学II (環境衛生学) 【H30以降入学者用】 (2)

[参考書等]

(参考書)

[授業外学習 (予習・復習) 等]

3 回行う小テストの前に、それまでの講義の復習をして臨みましょう。

(その他 (オフィスアワー等))

環境と衛生に関するキーワードの理解。異物 (薬物) 代謝は必須の知識

オフィスアワーの詳細については、KULASISで確認してください。

科目ナンバリング		U-PHA00 10000 LJ86									
授業科目名 <英訳>		生理学I (基礎生理学) 【H30以降入学者用】 Physiology I (Basic Physiology)				担当者所属・ 職名・氏名		国際高等教育院 教授 薬学研究科 講師		土居 雅夫 山口 賀章	
配当 学年	1回生以上	単位数	2	開講年度・ 開講期	2019・ 後期	曜時限	水4	授業 形態	講義	使用 言語	日本語
学科		薬学部,薬科学科,薬学科			科目に対する区分		必修				
[授業の概要・目的]											
医療系薬学・生物系薬学の基礎となる人体の生理学を講義する。生理学をよく理解するためには、人体の解剖についての基礎的知識がまず必要である。人体の基本的な成り立ちを解説したうえで、個体・臓器・細胞の各レベルでの講義を行う。まず、身体全体の機能に関わる基本の細胞生理学を扱い、生理現象を科学的に理解するために必要な基本的な原理を解説する。そのうえで、身体を構成する各臓器についてその解剖学的特徴に基づいた生理機能を講義する。											
[到達目標]											
1. 人体の基本的な解剖学的構造を説明することができる。 2. 身体全体の機能に関わる基本的な細胞生理を物理化学的原理に基づいて説明することができる。 3. 人体を構成する器官、器官系の名称、形態、体内での位置および機能的特徴を説明することができる。											
[授業計画と内容]											
1 . 生理学とは 2 . 人体の成り立ち 3 . 体の化学的組成 4 . 細胞生理の形態学的基礎 5 . 細胞生理の物理化学的基礎 6 . 細胞生理の生化学的基礎 7 . 脳・神経系の解剖と生理 8 . 感覚器系の解剖と生理 9 . 筋骨格系の解剖と生理 10 . 内分泌器官の解剖と生理 11 . 心血管系の解剖と生理 12 . 消化器系の解剖と生理 13 . エネルギー代謝系器官の解剖と生理 14 . 泌尿器系の解剖と生理 15 . 生殖器官の解剖と生理											
[履修要件]											
特になし											
[成績評価の方法・観点及び達成度]											
定期試験(90%), 平常講義での小テスト(10%)											
[本講義と関連する講義]											
健康・生命科学入門、生理学2・3、薬理学1・2、臨床疾病論A・D・G											
----- 生理学I (基礎生理学) 【H30以降入学者用】(2)へ続く -----											

生理学I (基礎生理学) 【H30以降入学者用】(2)

【対応するコアカリキュラム一般目標 (薬学科)】

C4(1)(2), C6(1)(2)(3)(4)(5)(6)(7), C7(1)(2), E1(1), E2(1)(3)(5)

【教科書】

監訳 中村桂子・松原謙一 『Essential細胞生物学 原書第4版』 (南江堂)

【参考書等】

(参考書)

監訳 坂東武彦・小山省三 『バーン・レヴィ 基本生理学』 (西村書店)

監訳 植村慶一 『オックスフォード生理学』 (丸善)

監訳 内山安男・相磯貞和 『ROSS 組織学』 (南江堂)

【授業外学習 (予習・復習) 等】

配布プリントを用いた講義内容の予習と復習。毎回、講義の後に講義内容に関する小テストを行い、次回講義の最初にその解説を行う。

(その他 (オフィスアワー等))

2回生以降の医療系科目講義の基礎となる。

オフィスアワーの詳細については、KULASISで確認してください。

科目ナンバリング		U-PHA00 20000 LJ86									
授業科目名 <英訳>		生理学II (病態生理学) 【H30以降入学者用】 Physiology II (Pathophysiology)				担当者所属・ 職名・氏名		薬学研究科 准教授 平澤 明			
配当 学年	2,3回生	単位数	2	開講年度・ 開講期	2019・ 後期	曜時限	水2	授業 形態	講義	使用 言語	日本語
学科		薬学部,薬科学科,薬学科			科目に対する区分		選択				
[授業の概要・目的]											
<p>病気に対する薬物治療の理解のためには、生命活動、特に人体の生理とその異常（病態生理）のメカニズムを理解する必要がある。ゲノム科学や分子レベルの知識を統合したシステムバイオロジーの観点から生理学、病態生理学を捉える。本課程では医療薬学、創薬科学の基礎となる生理・病態生理を概説する。病気の病態生理に基づく治療学についても講述する。</p>											
[到達目標]											
<p>病気に対する薬物治療の理解のために必要となる、生命活動、特に人体の生理とその異常（病態生理）のメカニズムを説明することができる。ゲノム科学や分子レベルの知識を統合したシステムバイオロジーの観点から生理学、病態生理学を捉えることができる。医療薬学、創薬科学の基礎となる生理・病態生理を概説することができる。病気の病態生理に基づく治療学について論じることができる。</p>											
[授業計画と内容]											
<ol style="list-style-type: none"> 1．正常生理と疾病に伴う病態生理 2．心臓と血管系の生理・病態生理 3．血液・造血器官の生理・病態生理 4．消化器系器官の生理・病態生理 5．腎臓と尿路の生理・病態生理 6．男性生殖器官の生理・病態生理 7．女性生殖器官の生理・病態生理 8．呼吸器の生理・病態生理 9．内分泌器官の生理・病態生理 10．生体代謝の生理・病態生理 11．感覚・知覚神経系の生理・病態生理 12．運動神経系の生理・病態生理 13．視覚系の生理・病態生理 14．聴覚系の生理・病態生理 15．全身器官の統合的生理・病態生理 											
[履修要件]											
特になし											
[成績評価の方法・観点及び達成度]											
定期試験 80%、小テスト 20%											
[本講義と関連する講義]											
生理学 ・ 、薬理学 ・ ・ 、生物化学 ・ ・ ・ ・ ・											
[対応するコアカリキュラム一般目標（薬学科）]											
C4(1)(2), C6(1)(2)(3)(4)(5)(6)(7), C7(1)(2), E1(1), E2(1)(3)(5)											
----- 生理学II (病態生理学) 【H30以降入学者用】 (2)へ続く -----											

生理学II (病態生理学)【H30以降入学者用】(2)

[教科書]

『コスタンゾ明解生理学』(エルゼビア・ジャパン)

[参考書等]

(参考書)

訳 内山 安夫・相磯 貞和 『Ross 組織学』

[授業外学習(予習・復習)等]

指定教科書(コスタンゾ明解生理学)を用いた講義内容の予習と復習

(その他(オフィスアワー等))

知識の覚え込みより典型的な各種疾患の生理・病態生理を考察する。

オフィスアワーの詳細については、KULASISで確認してください。

科目ナンバリング		U-PHA00 30000 LJ86									
授業科目名 <英訳>		生理学Ⅲ(臨床生理学)【H30以降入学者用】 Physiology III (Clinical Physiology)				担当者所属・ 職名・氏名		国際高等教育院 教授 土居 雅夫			
配当 学年	2,3回生	単位数	2	開講年度・ 開講期	2019・ 前期	曜時限	火2	授業 形態	講義	使用 言語	日本語
学科		薬学部,薬科学科,薬学科			科目に対する区分		選択				
[授業の概要・目的]											
<p>病気の新規治療薬を創成するためには、人の健常時の生理と病変時の病態を深く理解しておく必要がある。本講義では、これまでに学修した生理学と病理学の基本概念の理解の向上を目指し、ゲノム科学・システム情報生物学による生体機能の統合的理解を目指す。実際の創薬・臨床医療との接点を示しながら、病気の発症・進行の過程を時間軸にそってシステムレベルで統合的に理解することを目指す。</p>											
[到達目標]											
<p>病気治療薬を創成する上で必要となる、人体の生理とその異常(病態生理)を統合的に理解することができる。ゲノム科学・システム情報生物学の観点に立って、生体機能を統合的に理解することができる。病気の発症・進行のメカニズムおよびそのゲノム科学的素因に基づいた創薬および臨床医療を論ずることができる。</p>											
[授業計画と内容]											
<ol style="list-style-type: none"> 1. 疾病に伴う症状のメカニズム 2. 疾病に伴う各種臨床検査値の変化 3. 患者個々に応じた薬の用法・用量の設定 4. 患者個々に応じた薬の選択および各々の医薬品の「使用上の注意」を考慮した適正な薬物治療のデザイン 5. テーラーメイド薬物治療に関する基本的知識とその具体的な治療計画 6. 心臓と血管系の生理・病態生理 7. 血液・造血器官の生理・病態生理 8. 消化器系器官の生理・病態生理 9. 腎臓と尿路の生理・病態生理 10. 生殖器官の生理・病態生理 11. 呼吸器の生理・病態生理 12. 内分泌器官の生理・病態生理 13. 生体代謝の生理・病態生理 14. 神経・筋組織の生理・病態生理 15. 全身器官の統合的生理・病態生理 											
[履修要件]											
特になし											
[成績評価の方法・観点及び達成度]											
定期試験(90%), 平常講義での小テスト(10%)											
[本講義と関連する講義]											
生理学1・2、薬理学1・2、生物科学1・2・3・4・5・6・7											
[対応するコアカリキュラム一般目標(薬学科)]											
C4(1)(2), C6(1)(2)(3)(4)(5)(6)(7), C7(1)(2), E1(1), E2(1)(3)(5)											
[教科書]											
監訳 中村桂子・松原謙一 『Essential細胞生物学 原書第4版』(南江堂)											
----- 生理学Ⅲ(臨床生理学)【H30以降入学者用】(2)へ続く -----											

生理学Ⅲ（臨床生理学）【H30以降入学者用】(2)

[参考書等]

（参考書）

監訳 植村慶一 『オックスフォード・生理学』（丸善）

監訳 坂東武彦・小山省三 『バーン・レヴィ 基本生理学』（西村書店）

岡田 忠・菅谷 潤壺 『コスタンゾ 明解生理学』（エルゼビア・ジャパン）

[授業外学習（予習・復習）等]

配布プリントを用いた講義内容の予習と復習

（その他（オフィスアワー等））

知識の覚え込みより典型的な各種疾患の生理・病態生理を考察する。

オフィスアワーの詳細については、KULASISで確認してください。

科目ナンバリング		U-PHA00 20000 LJ86									
授業科目名 <英訳>		薬理学I【H30以降入学者用】 Pharmacology I				担当者所属・ 職名・氏名		薬学研究科 教授 金子 周司			
配当 学年	2,3回生	単位数	2	開講年度・ 開講期	2019・ 前期	曜時限	火2	授業 形態	講義	使用 言語	日本語
学科		薬学部,薬科学科,薬学科			科目に対する区分		必修				
[授業の概要・目的]											
<p>からだの中で薬物が作用する生体分子は受容体、酵素、膜輸送タンパク質、転写因子のいずれかであり、これら機能タンパク質を内在性リガンド（生理活性物質）や細胞内情報伝達系とともに知ることが薬理学の基本となります。本講義では、それら生体分子が細胞レベルで構築する巧妙な情報ネットワークと、臓器および細胞機能を制御するメカニズム、さらには主な病態での破綻について理解することを目標とします。</p>											
[到達目標]											
<ol style="list-style-type: none"> 1. 薬が標的とする生体分子に結合、相互作用する理論を説明できる。 2. 創薬標的として開発された生体分子と、これから開発される余地を説明できる。 3. 生体内に存在する生理活性物質の種類、分類、機能を説明できる。 4. 生理活性物質が生体に作用する標的分子の分布や細胞内情報伝達系を説明できる。 5. 細胞内シグナル伝達に用いられる膜電位変化や物質代謝の基本原則を説明できる。 6. 病態における細胞機能の破綻と薬物治療のメカニズムを説明できる。 											
[授業計画と内容]											
<p>教科書の参照ページとともに授業計画を示します。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. ガイダンス：反転授業の説明と試行、薬物受容体理論（p.4-16） 2. 膜電位・活動電位、電位依存性Na⁺/K⁺チャネル（p.79-85） 3. シナプス伝達・筋収縮、Ca²⁺チャネル（p.74-79） 4. トランスポーター、経細胞輸送（p.86-94） 5. Gタンパク質共役受容体、細胞内情報伝達（p.49-56） 6. 受容体キナーゼ、核内受容体（p.57-69） 7. 前半のまとめとノート評価 8. 中間試験 9. 抑制性アミノ酸（p.96-109） 10. 興奮性アミノ酸（p.109-115） 11. アセチルコリン（p.116-124）、一酸化窒素（p.193-195） 12. カテコラミン（p.125-139） 13. セロトニン（p.140-150）、神経ペプチド（p.164-172） 14. ヒスタミン、ヌクレオチド（p.151-163） 15. 全体のまとめと演習 											
[履修要件]											
特になし											
[成績評価の方法・観点及び達成度]											
<p>予習に基づく小テスト10%、中間試験40%、定期試験50%の割合で評価します。小テストは授業時間の最初にPandAを用いて行います。中間試験は5問中4問選択、定期試験は5問必答の論述試験です。</p>											
薬理学I【H30以降入学者用】(2)へ続く											

薬理学I【H30以降入学者用】(2)

【本講義と関連する講義】

薬理学II, III

【対応するコアカリキュラム一般目標（薬学科）】

C6(6), C7(2)

【教科書】

田中 / 加藤 / 成宮 『NEW薬理学（改訂第7版）』（南江堂）ISBN:978-4-524-26175-8（薬理学シリーズ（I, II, III）で共通に用いる教科書です）

【参考書等】

（参考書）

D.E.Golan et al. 『Principles of Pharmacology 4th Edition』（Wolters Kluwer）ISBN:978-1-45119-100-4（Kindle version 図表をプリントにて使用）

L.L.Brunton (Ed.) 『Goodman & Gilman 's Pharmacological Basis of Therapeutics 12th Ed.』（McGraw-Hill）ISBN:978-0-07-176939-6（Kindle version 図表をプリントにて使用）

【授業外学習（予習・復習）等】

本科目は、反転授業です。第1回目を除く毎回、授業までに各自でYouTubeビデオ予習を行ってください。予習に必要なプリントは前回の授業で配布します。授業時間はパソコンやスマホを必ず用意して、まずPandAページの確認テストを行ってください。次に演習課題を出しますので、教科書やネットを調べ、情報をノートに書いて整理してください。

（その他（オフィスアワー等））

オフィスアワーの詳細については、KULASISで確認してください。

科目ナンバリング		U-PHA00 20000 LJ86									
授業科目名 <英訳>		薬理学II【H30以降入学者用】 Pharmacology II				担当者所属・ 職名・氏名		薬学研究科 教授 金子 周司			
配当 学年	2,3回生	単位数	2	開講年度・ 開講期	2019・ 後期	曜時限	月1	授業 形態	講義	使用 言語	日本語
学科		薬学部,薬科学科,薬学科			科目に対する区分		選択				
[授業の概要・目的]											
<p>本科目では、前半で末梢神経系（自律神経・感覚神経・運動神経）に作用する薬物について、名称、薬理作用とそのメカニズム、臨床応用と主な副作用を学びます。ここまでの範囲で中間試験を行います。後半では中枢神経系に作用する薬物について、名称、薬理作用とそのメカニズム、臨床応用と主な副作用を学びます。ここまでの範囲で期末（定期）試験を行います。</p>											
[到達目標]											
<ol style="list-style-type: none"> 1. 中枢神経系と末梢神経系の構造と機能を説明できる。 2. 自律神経に作用する薬物の名称と作用メカニズム、臨床応用を説明できる。 3. 感覚神経や運動神経に作用する薬物の名称と作用メカニズム、臨床応用を説明できる。 4. 中枢神経系に作用する薬物の名称と作用メカニズム、臨床応用を説明できる。 											
[授業計画と内容]											
<ol style="list-style-type: none"> 1. ガイダンス、局所麻酔薬（p.353-358） 2. 末梢神経の構造と機能（p.226-233）、コリン作用薬（p.234-242） 3. 抗コリン薬（p.243-251） 4. アドレナリン作用薬（p.252-261） 5. 抗アドレナリン作用薬（p.262-271） 6. 緑内障と筋弛緩薬を例にした前半のまとめ 7. 中間試験（5問必答） 8. 中枢神経系の構造と機能、統合失調症治療薬(p.277-286) 9. 抗うつ薬・気分安定薬（p.287-300） 10. パーキンソン病治療薬・抗認知症薬（p.301-317） 11. 抗不安薬・催眠薬（p.318-334）、抗てんかん薬（p.335-344） 12. 全身麻酔薬（p.345-358）・鎮痛薬（p.359-370） 13. 中枢興奮薬、薬物依存と有害事象（p.371-379） 14-15. 後半のまとめ 											
[履修要件]											
薬理学Iで生体の仕組みを理解していることを前提にして、疾患と治療薬についての講義を進めます。											
[成績評価の方法・観点及び達成度]											
中間試験50%、定期試験50%の割合で評価します。小テストは追加点とし、授業時間の最初にPandAを用いて行います。中間試験、定期試験は5問必答の論述試験です。											
[本講義と関連する講義]											
薬理学I, III											
----- 薬理学II【H30以降入学者用】(2)へ続く -----											

薬理学II【H30以降入学者用】(2)

【教科書】

田中 / 加藤 / 成宮 『NEW薬理学（改訂第7版）』（南江堂）ISBN:978-4-524-26175-8（薬理学シリーズ（I, II, III）で共通に用いる教科書です）

【参考書等】

（参考書）

D.E.Golan et al. 『Principles of Pharmacology 4th Edition』（Wolters Kluwer）ISBN:78-1-45119-100-4（Kindle version 図表をプリントにて使用）

L.L.Brunton (Ed.) 『Goodman & Gilman 's Pharmacological Basis of Therapeutics 12th Ed.』（McGraw-Hill）ISBN:978-0-07-176939-6（Kindle version 図表をプリントにて使用）

【授業外学習（予習・復習）等】

本科目は、反転授業です。第1回目を除く毎回、授業までに各自でYouTubeビデオ予習を行ってください。予習に必要なプリントは前回の授業で配布します。授業時間はパソコンやスマホを必ず用意して、まずPandAページの確認テストを行ってください。次に演習課題を出しますので、教科書やネットを調べ、情報をノートに書いて整理してください。

（その他（オフィスアワー等））

オフィスアワーの詳細については、KULASISで確認してください。

科目ナンバリング		U-PHA00 30000 LJ86									
授業科目名 <英訳>		薬理学III【H30以降入学者用】 Pharmacology III				担当者所属・ 職名・氏名		薬学研究科 薬学研究科		准教授 白川 久志 客員教授 久米 利明	
配当 学年	2,3回生	単位数	2	開講年度・ 開講期	2019・ 前期	曜時限	金1	授業 形態	講義	使用 言語	日本語
学科		薬学部,薬科学科,薬学科			科目に対する区分		選択				
[授業の概要・目的]											
循環器、血液・造血器、泌尿器、呼吸器および消化器での疾病の治療に用いられる薬物の薬理作用について、これら臓器の生理、疾患の発生機序と疫学、薬物治療のターゲットとなる生体分子と薬物の分子作用メカニズム、臨床応用での薬物選択における注意点や問題点などの知識を修得するとともに、新薬の開発動向と関連学問領域の最新知見を知る。											
[到達目標]											
1. それぞれの臓器の生理機能とその制御機構の破綻に起因する疾患のメカニズムを理解し、説明できるとともに、新薬の開発動向と関連学問領域の最新知見について概説できる。 2. 各疾患の薬物選択における注意点や問題点を理解し、説明できる。 3. 各疾患の薬物治療に用いられる治療薬の作用機序、薬理作用および主な副作用を理解し、説明できる。											
[授業計画と内容]											
1. 高血圧の病態生理、適切な治療薬及びその薬理作用 2. 低血圧の病態生理、適切な治療薬及びその薬理作用 3. 不整脈の病態生理、適切な治療薬及びその薬理作用 4. 心不全の病態生理、適切な治療薬及びその薬理作用 5. 狭心症・心筋梗塞の病態生理、適切な治療薬及びその薬理作用 6. 末梢循環障害の病態生理、適切な治療薬及びその薬理作用 7. 中間試験 8. 血液凝固系における疾患の病態生理、適切な治療薬及びその薬理作用 9. 線溶系における疾患の病態生理、適切な治療薬及びその薬理作用 10. 造血器における疾患の病態生理、適切な治療薬及びその薬理作用 11. 貧血の病態生理、適切な治療薬及びその薬理作用 12. 泌尿器系における疾患の病態生理、適切な治療薬及びその薬理作用 13. 呼吸器系における疾患の病態生理、適切な治療薬及びその薬理作用 14. アレルギー疾患の病態生理、適切な治療薬及びその薬理作用 15. 消化器系における疾患の病態生理、適切な治療薬及びその薬理作用											
[履修要件]											
本科目の学修には、薬理学 の履修範囲である薬理学の概念や細胞内情報伝達の基本原理の知識を前提としており、薬理学 をすでに履修していることが条件となる。											
[成績評価の方法・観点及び達成度]											
中間試験50%、定期試験 50%。出席小テストの内容により加算することがある。											
[本講義と関連する講義]											
生理学 1・2・3、薬理学 1・											
薬理学III【H30以降入学者用】(2)へ続く											

薬理学III【H30以降入学者用】(2)

[対応するコアカリキュラム一般目標(薬学科)]

E2(3), (4)

[教科書]

『NEW薬理学』(南江堂)
毎回、補足プリント配布

[参考書等]

(参考書)
『今日の治療薬』(南江堂)
『治療薬マニュアル』(医学書院)
『「ハーバード大学講義テキスト」臨床薬理学』(丸善出版)

[授業外学習(予習・復習)等]

薬理学Iの履修範囲である薬理学の概念(薬物受容体、薬物の用量-反応関係等)や細胞内情報伝達の基本原理を理解していることを前提に授業を進める。

(その他(オフィスアワー等))

オフィスアワーの詳細については、KULASISで確認してください。

科目ナンバリング		U-PHA00 20000 LJ86									
授業科目名 <英訳>		薬剤学I (製剤学) 【H30以降入学者用】 Pharmaceutics I (Galencal Pharmacy)				担当者所属・ 職名・氏名		薬学研究科 准教授 高橋 有己			
配当 学年	2,3回生	単位数	2	開講年度・ 開講期	2019・ 後期	曜時限	木2	授業 形態	講義	使用 言語	日本語
学科		薬学部,薬科学科,薬学科			科目に対する区分		必修				
[授業の概要・目的]											
生理活性物質を医薬品として利用するためには、有効性・安全性・安定性・使用性などを考慮して適した剤形に整形する、すなわち製剤化が必要となる。本講義では、各種製剤に関して、基礎から臨床に至る総合的な視点から、その治療上の意義、製剤設計法、製造法および評価法について学ぶ。											
[到達目標]											
<ol style="list-style-type: none"> 1. 製剤設計の意義および医薬品開発上の位置づけを説明できる。 2. 各種医薬品製剤の治療的意義・特徴、処方設計、製造法、試験法について説明できる。 3. 各種医薬品製剤の製造に関係する物理化学的理論を説明できる。 4. 各種医薬品製剤を製する際の問題点および解決策について説明できる。 											
[授業計画と内容]											
<ol style="list-style-type: none"> 1. 医薬品開発における製剤設計の意義 2. 注射剤の治療上の意義と分類 3. 注射剤の設計に関する基礎理論 (溶解性) 4. 注射剤の設計に関する基礎理論 (安定性) 5. 注射剤の製造と日本薬局方製剤試験法を含めた注射剤に関わる各種一般試験法 6. 分散系製剤の特徴と製造法 7. 点眼剤、噴霧剤、生薬製剤を含むその他の液状製剤の種類・適用と調製方法 8. 日本薬局方に収載される代表的な固形製剤の種類 9. 経口固形製剤の設計に関する基礎理論 (粉体工学) 10. 散剤、顆粒剤、錠剤の製剤設計と製造法、評価法 11. カプセル剤・坐剤の製剤設計と製造法、評価法 12. 日本薬局方製剤試験法を含めた固形製剤の評価方法、製剤のレオロジー特性 13. 軟膏剤、貼付剤などの外用製剤の製剤設計と製造法、評価法 14. ドラッグデリバリーシステム (DDS) の意義と代表的なDDS製剤 15. 生物学的同等性および後発医薬品開発 											
[履修要件]											
特になし											
[成績評価の方法・観点及び達成度]											
出席・小テスト20%、定期試験80%の割合で評価する。											
[本講義と関連する講義]											
薬剤学 II、医療薬剤学 1・2、薬局方・薬事関連法規											
[対応するコアカリキュラム一般目標 (薬学科)]											
C1(1)、C1(3)、E5(1)、E5(2)、E5(3)											
----- 薬剤学I (製剤学) 【H30以降入学者用】(2)へ続く -----											

薬剤学I（製剤学）【H30以降入学者用】(2)

【教科書】

プリント配布

【参考書等】

（参考書）

『薬剤学第5版』（廣川書店）

『図解で学ぶDDS第2版』（じほう）

【授業外学習（予習・復習）等】

講義プリントは事前に配布されるので、その内容を一読し、疑問点等を整理しておくこと。また、以前の講義内容から知識を問う小テストを実施することがあるので、知識の定着を図るために必ず復習を行うこと。

（その他（オフィスアワー等））

製剤を用いた薬物投与方法論、製剤設計法を概括し、創薬基礎理論と医療における実践の橋渡しをする。

オフィスアワーの詳細については、KULASISで確認してください。

科目ナンバリング		U-PHA00 30000 LJ86									
授業科目名 <英訳>		薬剤学Ⅱ(薬物動態学)【H30以降入学者用】 Pharmaceutics II (Pharmacokinetics)				担当者所属・ 職名・氏名		薬学研究科 教授 高倉 喜信			
配当 学年	2,3回生	単位数	2	開講年度・ 開講期	2019・ 後期	曜時限	火2	授業 形態	講義	使用 言語	日本語
学科		薬学部,薬科学科,薬学科			科目に対する区分		選択				
[授業の概要・目的]											
<p>本講義では、薬物の生体内動態すなわち吸収、分布、代謝、排泄を理解するために必要な生体の解剖学的・生理学的特性を解説した後、各過程における薬物動態のメカニズムについて講述するとともに体内動態の制御方法すなわちドラッグデリバリーシステムについて基本的概念および実例を概説する。さらに、薬物の生体内動態を定量的に記述するためのファーマコキネティクス理論と手法について講述する。</p>											
[到達目標]											
<ol style="list-style-type: none"> 1. 薬物の体内動態の基本事項およびその制御方法としてのドラッグデリバリーシステムについて説明できる。 2. 各種経路から投与された薬物の吸収過程と影響因子について説明できる。 3. 薬物が各組織に分布する際の支配因子と分布のプロセスについて説明できる。 4. 薬物の尿中排泄および胆汁排泄のプロセスとメカニズムについて説明できる。 5. 薬物の代謝様式とそれに関与する代表的な代謝酵素を説明できる。 											
[授業計画と内容]											
<ol style="list-style-type: none"> 1. 薬物体内動態の基本事項とドラッグデリバリーシステムの目的 2. 注射により投与された薬物の吸収過程と影響因子 3. 皮膚の解剖学的、生理学的特徴と薬物の経皮吸収の関係 4. 薬物の経皮吸収促進法についての具体例 5. 消化管の構造、機能と薬物吸収の関係 6. 薬物の消化管吸収促進法についての具体例 7. 消化管以外の粘膜部位(直腸、肺、鼻)における薬物吸収 8. 薬物が各組織に分布する際の支配因子 9. 血液-脳関門、血液-脳脊髄液関門の意義と薬物の脳への移行 10. 胎盤関門の意義と薬物の胎児への移行 11. 腎臓の構造、機能と薬物の尿中排泄機構 12. 薬物の胆汁排泄と腸肝循環 13. 薬物代謝様式とそれに関与する代表的な代謝酵素 14. 薬物相互作用についての具体例 15. 各種ファーマコキネティクス解析法の特徴 											
[履修要件]											
特になし											
[成績評価の方法・観点及び達成度]											
<p>出席および小テスト20%、定期試験80%。 小テストは2回実施し、講義内容のうち重要な基本的語句についての理解を求める。定期試験では、薬物動態の各過程に関する重要な事項の理解を問うとともに各動態過程相互の関係や総合的な理解ができているかについて論述させ、講義全体の理解についての達成度を評価する。</p>											
薬剤学Ⅱ(薬物動態学)【H30以降入学者用】(2)へ続く											

薬剤学II (薬物動態学)【H30以降入学者用】(2)

[本講義と関連する講義]

薬剤学1・2、医療薬剤学1・2、薬局方・薬事関連法規

[対応するコアカリキュラム一般目標(薬学科)]

E4(1)(2)、E5(3)

[教科書]

プリント

[参考書等]

(参考書)

『薬剤学第5版』(廣川書店)

[授業外学習(予習・復習)等]

講義プリントを事前に配布するので、内容に目を通し、疑問点等を整理しておくこと。また、講義内容の理解を確認するため小テストを実施するので、知識の定着を図るために必ず復習を行うこと。

(その他(オフィスアワー等))

薬物の効果と副作用を決定する体内動態の基本事項を学び、薬学専門実習3と併せて臨床薬物治療を理解するための基礎となる。オフィスアワーの詳細については、KULASISで確認してください。

オフィスアワーの詳細については、KULASISで確認してください。

科目ナンバリング		U-PHA00 1C318 LJ86									
授業科目名 <英訳>	臨床疾病論A Clinical Overview of Medicine A				担当者所属・ 職名・氏名	医学研究科	教授	澤本	伸克		
						医学研究科	教授	湊谷	謙司		
						医学研究科	教授	伊達	洋至		
						医学研究科	准教授	尾野	亘		
						医学研究科	准教授	松本	久子		
						薬学研究科	教授	高須	清誠		
配当 学年	2回生以上	単位数	1	開講年度・ 開講期	2019・ 前期後半	曜時限	金3	授業 形態	講義	使用 言語	日本語
学科	薬学部,薬科学科,薬学科			科目に対する区分		選択					
[授業の概要・目的]											
患者の疾病について、十分かつ正確な知識をもつことは医療専門職にとって不可欠である。本講義では各領域の専門医が新しい疾病概念も含め、各疾患について病態、診断、治療を解説する。											
[到達目標]											
循環器疾患と呼吸器疾患の病態を理解する。											
[授業計画と内容]											
第1回 6/7 心臓血管外科学 湊谷謙司教授 第2回 6/14 循環器内科学1 尾野亘准教授 第3回 6/21 循環器内科学2 尾野亘准教授 第4回 6/28 呼吸器外科学 伊達洋至教授 第5回 7/5 循環器内科学3 尾野亘准教授 第6回 7/12 呼吸器内科学1 松本久子准教授 第7回 7/19 呼吸器内科学2 松本久子准教授 第8回 7/26又は8/2 試験(予定)											
[履修要件]											
特になし											
[成績評価の方法・観点及び達成度]											
平常点30%と、毎回のレポート70%											
[本講義と関連する講義]											
生理学I・II・III、薬物治療学、臨床薬学総論、臨床疾病論B・C・D・E・F・G											
[対応するコアカリキュラム一般目標(薬学科)]											
C7(1)(2), E1(1)(2), E2(3)(4)											
[教科書]											
授業中に指示する											
[参考書等]											
(参考書) 授業中に紹介する											
[授業外学習(予習・復習)等]											
復習をすること											
(その他(オフィスアワー等))											
受講により各疾患の病態に関する重要なポイントの理解が可能となる。 レポート課題の詳細は、PandAで指定する。											
オフィスアワーの詳細については、KULASISで確認してください。											

科目ナンバリング		U-PHA00 1C319 LJ86									
授業科目名 <英訳>	臨床疾病論B Clinical Overview of Medicine B					担当者所属・ 職名・氏名	医学研究科	教授	藤井	康友	
							医学研究科	教授	妹尾	浩	
					医学研究科	教授	溝脇	尚志			
					医学研究科	特定准教授	金井	雅史			
					医学研究科	講師	角田	茂			
					附属病院	特定病院助教	福田	晃久			
					附属病院	助教	末廣	篤			
					附属病院	助教	八木	真太郎			
					薬学研究科	教授	高須	清誠			
配当 学年	2回生以上	単位数	1	開講年度・ 開講期	2019・ 後期前半	曜時限	月2	授業 形態	講義	使用 言語	日本語
学科	薬学部,薬科学科,薬学科				科目に対する区分	選択					
[授業の概要・目的]											
良い医療とは、的確な病歴聴取、診察、検査により、患者の疾患を正確に診断し、最良の治療法を選択することに集約しうる。そのためには患者の持つ疾病についての十分かつ正確な知識を有することは医療専門職にとって必要不可欠であり、病態生理を中心とした講義を展開する。											
[到達目標]											
消化器病学（内科および外科）、耳鼻咽喉科・頭頸部外科学、臨床腫瘍学（薬物および放射線療法）に関して、各領域の専門医が主要疾患の病態生理、診断、治療を枢軸とした解説を行う。これら領域の主要疾患に関する理解を深めることを目標とする。											
[授業計画と内容]											
講義の題目および順番は変更する可能性があります。											
<ul style="list-style-type: none"> ・耳鼻咽喉科頭頸部疾患概論【末廣】 ・がん薬物療法総論【金井】 ・肝胆膵疾患（内科）【福田】 ・がん放射線治療総論【溝脇】 ・肝胆膵疾患（外科）【八木】 ・消化管疾患（外科）【角田】 ・消化管疾患（内科）【妹尾】 											
[履修要件]											
特になし											
[成績評価の方法・観点及び達成度]											
平常点30%と、毎回のレポート70%											
[本講義と関連する講義]											
生理学I・II・III、薬物治療学、臨床薬学総論、臨床疾病論A・C・D・E・F・G											
[対応するコアカリキュラム一般目標（薬学科）]											
C7(1)(2), D2(1), E1(1)(2), E2(4)(6)(7)											
[教科書]											
使用しない											
----- 臨床疾病論B(2)へ続く -----											

臨床疾病論B(2)

[参考書等]

(参考書)
井村裕夫編『わかりやすい内科学』(文光堂)

[授業外学習(予習・復習)等]

広範囲にわたる講義内容なので、講義のみでは十分な知識の取得は難しい。講義毎にその分野の成書を精読することを勧める。

(その他(オフィスアワー等))

レポート課題の詳細は、PandAで指定する。

オフィスアワーの詳細については、KULASISで確認してください。

科目ナンバリング		U-PHA00 1C320 LJ86									
授業科目名 <英訳>	臨床疾病論C Clinical Overview of Medicine C					担当者所属・ 職名・氏名	医学研究科	教授	木下	彩栄	
							医学研究科	講師	八十田	明宏	
							医学研究科	講師	原田	範雄	
							附属病院	助教	藤田	義人	
							附属病院	特定病院助教	山尾	幸広	
							薬学研究科	教授	高須	清誠	
配当 学年	2回生以上	単位数	1	開講年度・ 開講期	2019・ 後期後半	曜時限	月2	授業 形態	講義	使用 言語	日本語
学科	薬学部,薬科学科,薬学科				科目に対する区分	選択					
[授業の概要・目的]											
<p>患者の持つ疾病についての十分かつ正確な知識を有することは医療専門職にとって不可欠である。 内科学的アプローチは患者への観察から始まり、病態生理の解明により診断・治療法を開発することに集約しうる。 本講義では、臨床神経学、脳神経外科学、糖尿病・内分泌内科学の専門家が、疾患の考え方、診断、治療を解説する。</p>											
[到達目標]											
内科疾病の病態生理、診断、治療について、十分な知識を得る											
[授業計画と内容]											
臨床神経学 (1) 11/18 神経系の機能と解剖 [木下] (2) 12/2 脳血管障害 [木下] (3) 12/9 神経変性疾患 [木下] 脳外科学 (1) 12/16 (脳腫瘍、頭部外傷、脳血管障害) [山尾] 糖尿病・内分泌代謝 (5) 1/6 糖尿病 [原田] (6) 1/14 (この日のみ火曜日) [八十田] (7) 1/20 [藤田]											
[履修要件]											
特になし											
[成績評価の方法・観点及び達成度]											
平常点30%と、毎回のレポート70%											
[本講義と関連する講義]											
生理学I・II・III、薬物治療学、臨床薬学総論、臨床疾病論A・B・D・E・F・G											
[対応するコアカリキュラム一般目標(薬学科)]											
C7(1)(2), E1(1)(2), E2(1)(5)											
----- 臨床疾病論C(2)へ続く -----											

臨床疾病論C(2)

[教科書]

適宜、下記の参考書を利用してください。
授業中に紹介される場合もあります。

[参考書等]

(参考書)

井村裕夫 編『わかりやすい内科学』(文光堂)

『病気が見える vol7 神経系』(メディックメディア)(神経系に興味のある方)

渡辺雅彦『脳神経ペディア』(羊土社)(神経系に興味のある方、神経解剖学を深く学びたい方)

[授業外学習(予習・復習)等]

シラバスの参考書や、講義中に教員が示した参考書を参考にして、講義内容を復習し、さらに知識や考え方を深めることが望ましい。

神経系の授業では、特に予習をしておくことが望ましい。授業までにアップロードされた資料に目をとっておくこと。

(その他(オフィスアワー等))

レポート課題の詳細は、PandAで指定する。

オフィスアワーの詳細については、KULASISで確認してください。

科目ナンバリング		U-PHA00 1C321 LJ86												
授業科目名 <英訳>	臨床疾病論D Clinical Overview of Medicine D					担当者所属・ 職名・氏名	医学研究科	教授	恒藤	暁				
							医学研究科	教授	足立	壯一				
							医学研究科	准教授	大村	浩一郎				
							医学研究科	講師	八角	高裕				
							附属病院	助教	小川	絵里				
							附属病院	特定病院助教	辰巳	健一郎				
							薬学研究科	教授	高須	清誠				
配当 学年	2回生以上	単位数	1	開講年度・ 開講期	2019・ 前期後半	曜時限	火3	授業 形態	講義	使用 言語	日本語			
学科	薬学部,薬科学科,薬学科					科目に対する区分	選択							
[授業の概要・目的]														
血液病学、免疫病学、小児外科学、麻酔科学・集中治療学の基本的な考え方を概説する。各疾患の病態生理、診断、治療を解説する。医療専門職が身につけるべき基本的な知識を教授する。														
[到達目標]														
各疾患の病態生理、診断、治療の基礎知識を習得することを目標とする。														
[授業計画と内容]														
第1回	血液病学													
第2回	血液病学													
第3回	血液病学													
第4回	免疫病学													
第5回	免疫病学													
第6回	小児外科学													
第7回	麻酔科学・集中治療学													
[履修要件]														
特になし														
[成績評価の方法・観点及び達成度]														
平常点30%と、毎回のレポート70%														
[本講義と関連する講義]														
生理学I・II・III、薬物治療学、臨床薬学総論、臨床疾病論A・B・C・E・F・G														
[対応するコアカリキュラム一般目標（薬学科）]														
C7(1)(2), C8(1)(2), E1(1)(2), E2(1)(2)(3)														
[教科書]														
使用しない														
[参考書等]														
(参考書)														
特になし														
[授業外学習（予習・復習）等]														
講義資料を参考にして、自主学習すること														
(その他（オフィスアワー等）)														
多領域にわたる疾患の講義であり、欠かさず受講すること レポート課題の詳細は、PandAで指定する。														
オフィスアワーの詳細については、KULASISで確認してください。														

科目ナンバリング		U-PHA00 1C322 LJ86											
授業科目名 <英訳>		臨床疾病論E Clinical Overview of Medicine E				担当者所属・ 職名・氏名		医学研究科 薬学研究科		教授 教授		青山 朋樹 高須 清誠	
配当 学年	2回生以上	単位数	1	開講年度・ 開講期	2019・ 後期前半	曜時限	金1	授業 形態	講義	使用 言語	日本語		
学科	薬学部,薬科学科,薬学科				科目に対する区分		選択						
【授業の概要・目的】													
臨床疾病論Eでは眼科、皮膚科、泌尿器科、腎臓内科、形成外科、整形外科の基礎知識として、病態生理、診断、治療法の解説を行う。各領域において医療専門職が持つべき必須の知識を教授する。													
【到達目標】													
眼科、皮膚科、泌尿器科、腎臓内科、形成外科、整形外科の基礎知識を習得する。													
【授業計画と内容】													
1. ガイダンス 2. 泌尿器科診療の基本と高度医療 3. 眼科診療の基礎知識 4. 皮膚科診療の基礎知識 5. 腎臓内科診療の基礎知識 6. 整形外科診療の基礎知識 7. 形成外科診療の基礎知識													
【履修要件】													
特になし													
【成績評価の方法・観点及び達成度】													
平常点30%と、毎回のレポート70%													
【本講義と関連する講義】													
生理学I・II・III、薬物治療学、臨床薬学総論、臨床疾病論A・B・C・D・F・G													
【対応するコアカリキュラム一般目標（薬学科）】													
C7(1)(2), E1(1)(2), E2(3)(6)													
【教科書】													
使用しない													
【参考書等】													
(参考書)													
【授業外学習（予習・復習）等】													
各回の授業の復習を中心とし、さらに興味をもったテーマについて自主学習を進めることを望みます。													
(その他（オフィスアワー等）)													
レポート課題の詳細は、PandAで指定する。													
オフィスアワーの詳細については、KULASISで確認してください。													

科目ナンバリング		U-PHA00 1C323 LJ86									
授業科目名 <英訳>	臨床疾病論F Clinical Overview of Medicine F					担当者所属・ 職名・氏名	医学研究科	教授	十一	元三	
	医学研究科	教授	足立	壯一							
						医学研究科	教授	藤井	康友		
						附属病院	教授	横出	正之		
						医学研究科	准教授	谷向	仁		
						附属病院	准教授	大鶴	繁		
						附属病院	助教	下戸	学		
						薬学研究科	教授	高須	清誠		
配当 学年	2回生以上	単位数	1	開講年度・ 開講期	2019・ 後期前半	曜時限	金2	授業 形態	講義	使用 言語	日本語
学科	薬学部,薬科学科,薬学科				科目に対する区分	選択					
[授業の概要・目的]											
本科目では臨床医学のなかの精神医学、診断学、救急医学、特殊感染病学、加齢医学への入門となる講義を行う。											
[到達目標]											
精神医学、診断治療学入門、救急医学、特殊感染病学、加齢医学の5領域について重要な基礎事項を講義する。											
[授業計画と内容]											
1回目 藤井先生：「診断治療学入門」											
2回目 横井先生：「加齢医学」、「脂質代謝異常」											
3回目 下戸先生：「外傷総論」											
4回目 大鶴先生：「腹痛急性腹症」											
5回目 足立先生：「特殊感染症学」											
6回目 十一先生：「精神医学総論」											
7回目 谷向先生：「精神腫瘍学」											
[履修要件]											
特になし											
[成績評価の方法・観点及び達成度]											
平常点30%と、毎回のレポート70%											
[本講義と関連する講義]											
生理学I・II・III、薬物治療学、臨床薬学総論、臨床疾病論A・B・C・D・E・G											
[対応するコアカリキュラム一般目標（薬学科）]											
C7(1)(2), C8(1)(2), E1(1)(2), E2(1)(7)											
[教科書]											
授業中に指示する											
[参考書等]											
(参考書)											
授業中に紹介する											
[授業外学習（予習・復習）等]											
特になし											
(その他（オフィスアワー等）)											
レポート課題の詳細は、PandAで指定する。											
オフィスアワーの詳細については、KULASISで確認してください。											

科目ナンバリング		U-PHA00 1C324 LJ86									
授業科目名 <英訳>	臨床疾病論G Clinical Overview of Medicine G					担当者所属・ 職名・氏名	医学研究科	教授	足立	壯一	
							医学研究科	講師	近藤	英治	
						医学研究科	講師	堀江	昭史		
						附属病院	講師	濱西	潤三		
						附属病院	助教	馬場	志郎		
						附属病院	助教	鈴木	栄治		
						薬学研究科	教授	高須	清誠		
配当 学年	2回生以上	単位数	1	開講年度・ 開講期	2019・ 前期後半	曜時間	金1	授業 形態	講義	使用 言語	日本語
学科	薬学部,薬科学科,薬学科				科目に対する区分	選択					
[授業の概要・目的]											
患者のもつ疾病についての十分かつ正確な知識を有することは医療専門職にとって、必要不可欠である。疾病論Gでは、産婦人科、乳腺外科、小児科の講義を行い、婦人科、周産期、小児疾患に対する、理解を深められるよう、専門家が講義を行う。											
[到達目標]											
産婦人科、乳腺外科、小児科の各疾患に関して、診断学から、病態、治療まで、各専門医による解説を行い、理解を深めることを目標とする。											
[授業計画と内容]											
1.オリエンテーション、小児科全般；足立 2.小児科学（血液腫瘍、代謝・内分泌）；足立 3.小児科学（循環器、消化器）；馬場 4.乳腺外科；鈴木 5.産婦人科（周産期）；近藤 6.産婦人科（婦人科腫瘍）；濱西 7.産婦人科（生殖医療）；堀江 講義の順序は変更の可能性あり											
[履修要件]											
特になし											
[成績評価の方法・観点及び達成度]											
平常点30%と、毎回のレポート70%											
[本講義と関連する講義]											
生理学I・II・III、薬物治療学、臨床薬学総論、臨床疾病論A・B・C・D・E・F											
[対応するコアカリキュラム一般目標（薬学科）]											
C7(1)(2), E1(1)(2), E2(3)(4)(5)											
[教科書]											
授業中に指示する											
----- 臨床疾病論G(2)へ続く -----											

臨床疾病論G(2)

【参考書等】

(参考書)
授業中に紹介する

【授業外学習(予習・復習)等】

配布資料を、十分、復習すること
レポート課題の詳細は、PandAで指定する。

(その他(オフィスアワー等))

オフィスアワーの詳細については、KULASISで確認してください。

科目ナンバリング		U-PHA00 10000 SJ86									
授業科目名 <英訳>	薬学研究SGD演習 SGD Classes for Pharmaceutical Research				担当者所属・ 職名・氏名	薬学研究科	教授	高須	清誠		
						薬学研究科	教授	山下	富義		
						薬学研究科	准教授	柿澤	昌		
						薬学研究科	講師	矢野	義明		
						薬学研究科	講師	津田	真弘		
						薬学研究科					薬学研究科教員
配当 学年	1回生以上	単位数	2	開講年度・ 開講期	2019・ 前期	曜時間	水4,5	授業 形態	演習	使用 言語	日本語
学科	薬学部,薬科学科,薬学科			科目に対する区分		選択					
【授業の概要・目的】											
<p>医薬品の創製から適正使用に渡る幅広い薬学領域において創造的な研究活動を実践するためには、十分な基礎学力に加えて、自ら目的を設定し挑戦する行動力、組織や社会と関わり情報を発信する高いコミュニケーション能力、プレゼンテーション能力、リーダーシップが求められる。本授業では、その資質を高め素養を磨く学部授業の始まりに際し、薬学に関連する基本的な問題を取り上げた演習やグループ討議を行うことによって、科学的に思考し主体的に行動する基本的な能力を身につける。</p>											
【到達目標】											
<ol style="list-style-type: none"> 1. 好奇心をもってトピックを深く探求する。 2. 情報を多面的に分析し、批判的に捉えて文脈の重要性を評価できる。 3. 他者の知的・感情的側面を認識し、円滑にコミュニケーションを図ることができる。 4. 明確で一貫した話の構成を考え、思慮深く言葉を選んでプレゼンテーションできる。 5. 他者の考えを発展させたりメンバーの貢献を建設的に積み重ね、チーム活動を円滑かつ効果的に進められる。 											
【授業計画と内容】											
<ol style="list-style-type: none"> 1. オリエンテーション 2. ロジカルシンキングの基本を学ぶ 3. ディベートの基本技術を学ぶ 4 - 5. コミュニケーション技術を学ぶ 6 - 9. 創薬研究（化学・物理系）について考える 10 - 13. 創薬研究（生物・医療系）について考える 14. 医療・生命倫理について考える 15. まとめ 											
【履修要件】											
特になし											
【成績評価の方法・観点及び達成度】											
<ul style="list-style-type: none"> ・グループワークへの参加評価（30%） ・発表の評価（30%） ・提出物（グループワークに関わるもの、ミニレポートなど）の評価（40%） <p>グループワークは、主体的な学び・課題への取り組み・コミュニケーション・グループ活動への貢献の観点から評価する。 発表は、ディベート、プレゼンテーション、ディスカッションのスキルを評価する。 提出物は、課題内容に対する理解度、文章の表現力や論理性により評価する。 なお、それぞれの評価はルーブリックに基づいて実施する。</p>											
----- 薬学研究SGD演習 (2)へ続く -----											

薬学研究SGD演習 (2)

[本講義と関連する講義]

基礎創薬研究、基礎臨床研究、医薬品開発プロジェクト演習1・2、特別実習

[対応するコアカリキュラム一般目標(薬学科)]

A(2)(3)(5)、G(1)(2)(3)

[教科書]

授業中に指示する

[参考書等]

(参考書)

授業中に紹介する

[授業外学習(予習・復習)等]

本演習では、授業時間外の学習が前提となる。事前に与えられる課題を個人もしくはグループ単位でこなし、授業でその内容についての報告や討議ができるように準備すること。また、適宜、授業内容に関する「ミニ」レポートが課され、これに基づいて成績評価がなされるので注意すること。

(その他(オフィスアワー等))

授業は演習やグループ討議を中心に展開されるので、積極的な参加が強く求められる。

オフィスアワーの詳細については、KULASISで確認してください。

科目ナンバリング		U-PHA00 20000 SJ86									
授業科目名 <英訳>		基礎創薬研究 Basic Drug Discovery Research				担当者所属・ 職名・氏名		薬学研究科 教授 高須 清誠			
配当 学年	2,3回生	単位数	1	開講年度・ 開講期	2019・ 後期	曜時限	月3	授業 形態	演習	使用 言語	日本語
学科		薬学部,薬科学科,薬学科			科目に対する区分		選択				
[授業の概要・目的]											
<p>創薬科学は、物理学・化学・生物学・数学を基礎とする総合科学であり、それらが統合、融合された学問として成立しています。2年次前期までにも、薬学専門科目のうち基礎的な科目をいくつか履修していると思います。すなわち、創薬科学を理解するためには、各科目の関連性を紐付けていくことが重要になります。また、その紐付けをすることで</p> <p>本科目では、様々な専門をもつ創薬研究者の研究や体験にまつわる講演を聞き、創薬研究について理解を深めるとともに、講演内容に含まれるキーワードについてどのような学問が関連しているのかについて思考・討論する。それにより、これまで受けた講義と薬学の関連性を理解する。</p>											
[到達目標]											
<ul style="list-style-type: none"> ・創薬研究の概略について説明できるようになる。 ・創薬科学の基礎と応用の関連性について理解する。 ・これまで受講した種々の講義の関連性について理解する。 ・小グループで自分の考えを発表し、他人の意見を理解できるようになる。 ・将来、どのように創薬研究に関連したいかについて思考する。 											
[授業計画と内容]											
<ol style="list-style-type: none"> 1. 創薬研究の流れ 2. 創薬研究者のキャリアパス 3. 物理化学・分析化学に基づく創薬研究 4. 有機化学に基づく創薬研究 5. 生物化学に基づく創薬研究 6. 臨床薬学に基づく創薬研究 7. 情報科学に基づく創薬研究 8. まとめ <p>各回について内容の変更をする場合があるが、その場合は初回の講義で説明する。</p>											
[履修要件]											
講義への積極的な参加：本講義では、学生が主体的に学び、小グループで討論する内容を含みます。出席するだけで単位が取得できるわけではないということを理解した学生のみ履修してください。											
[成績評価の方法・観点及び達成度]											
<p>平常点（出席状況、授業内の発言、グループワークでの積極性など） 60%</p> <p>レポート（提出及び内容） 40%</p>											
[本講義と関連する講義]											
薬学研究SGD演習、基礎臨床研究、医薬品プロジェクト演習1											
[対応するコアカリキュラム一般目標（薬学科）]											
A(5)、C、D、E、G											
----- 基礎創薬研究(2)へ続く -----											

基礎創薬研究(2)

[教科書]

未定

[参考書等]

(参考書)
授業中に紹介する

[授業外学習(予習・復習)等]

適宜、授業内容に関するレポートが課され、これに基づいて成績評価がなされるので注意すること。授業外学習として、グループワークを求めることもある。

(その他(オフィスアワー等))

オフィスアワーの詳細については、KULASISで確認してください。

科目ナンバリング		U-PHA00 20000 SJ86											
授業科目名 <英訳>		基礎臨床研究 Basic Clinical Research				担当者所属・ 職名・氏名		薬学研究科 薬学研究科 薬学研究科 薬学研究科		教授 教授 講師 助教		山下 富義 高須 清誠 津田 真弘 宗 可奈子	
配当 学年	2,3回生	単位数	1	開講年度・ 開講期	2019・ 後期	曜時限	月3	授業 形態	演習	使用 言語	日本語		
学科		薬学部,薬科学科,薬学科			科目に対する区分		選択						
【授業の概要・目的】													
臨床研究・疫学研究の基礎となる基本的事項を学ぶ。													
【到達目標】													
1. 臨床的な疑問を定式化し、モデル化できる。 2. アウトカム指標の種類と意義を説明できる。 3. 比較の質を落とす原因を知り、問題を軽減できる。 4. 臨床研究の倫理性に配慮できる。													
【授業計画と内容】													
1. 序論 - 臨床研究とは - 2. 臨床研究のデザイン(1)： 疑問の定式化 3. 臨床研究のデザイン(2)： 概念モデルの構築 4. 臨床研究のデザイン(3)： 測定指標 5. 臨床研究のデザイン(4)： 交絡とランダム化 6. 統計データの解析(1)： 仮説と検定 7. 統計データの解析(2)： 生存解析 8. 研究倫理と被験者保護													
【履修要件】													
特になし													
【成績評価の方法・観点及び達成度】													
平常点（授業への出席、演習プロダクト、理解度小テスト、60点）、課題レポート（40点）により評価する。課題レポートでは、課題内容に対する理解度、文章の表現力や論理性によって評価する。													
【本講義と関連する講義】													
薬学研究SGD演習、基礎創薬研究、医薬品プロジェクト演習2													
【対応するコアカリキュラム一般目標（薬学科）】													
A(1)(2)(5)、G(1)(2)(3)													
【教科書】													
授業でプリント資料が配布される。													
【参考書等】													
（参考書）													
福原俊一 『臨床研究の道標 第2版 上巻』（認定NPO法人 健康医療評価研究機構）ISBN:978-4-903803-26-5													
福原俊一 『臨床研究の道標 第2版 下巻』（認定NPO法人 健康医療評価研究機構）ISBN:978-4-903803-27-2													
----- 基礎臨床研究(2)へ続く -----													

基礎臨床研究(2)

川村 孝 『臨床研究の教科書』(医学書院) ISBN:978-4-260-02497-6

[授業外学習(予習・復習)等]

事前に指定される資料やビデオを見て、授業でその内容についての報告や討議ができるように準備すること。また、適宜、授業内容に関するレポートが課され、これに基づいて成績評価がなされるので注意すること。

(その他(オフィスアワー等))

講義だけでなく演習も多く組み入れられる。コンピューターを必要とすることも多いので、常に持参すること。

オフィスアワーの詳細については、KULASISで確認してください。

科目ナンバリング		U-PHA00 10000 PJ86									
授業科目名 <英訳>		多職種連携医療体験実習 Interprofessional Clinical Exposure				担当者所属・ 職名・氏名		薬学研究科 教授 薬学研究科 講師 薬学研究科 助教 国際高等教育院 教授 医学研究科 助教		山下 富義 津田 真弘 宗 可奈子 小西 靖彦 及川 沙耶佳	
配当 学年	1回生以上	単位数	1	開講年度・ 開講期	2019・ 前期	曜時間	その他	授業 形態	実習・演習	使用 言語	日本語
学科	薬学部,薬科学科,薬学科				科目に対する区分		選択				
[授業の概要・目的]											
<p>薬剤師には患者本位の視点に立ち、患者の安全に配慮しつつ医療の担い手として求められる活動を適切な態度で実践することが求められる。また、チーム医療における多職種連携の必要性を理解し、チームの一員としての薬剤師の役割を積極的に果たすことが求められる。本授業では、医療機関における早期体験実習を通じ、患者・医療者と接することで医療の実際を知り、医療人としての自覚を身につけ、チーム医療における薬剤師の役割を学ぶ。なお、本授業は医学部と合同で実施し、グループ討議を通じて、多職種の中で自らの意見を発しチーム医療に貢献する素地を養う。</p>											
[到達目標]											
<p>1. 患者の視点に立ち、病院における様々な部署の業務、医療及び病院の現状を知る。 2. チーム医療における薬剤師および他職種の役割と多職種連携の重要性を理解する。</p>											
[授業計画と内容]											
<p>1. 導入オリエンテーション(5月): 医療体験実習の概要、実習施設の登録方法 2. 直前ガイダンス(7月): 実習レポート作成方法 3. 事前勉強会(7月): グループ毎に実習施設の予習や実習目的の共有、実施報告書の作成 4~13. 実習(8~9月の1週間): 病院見学・体験(薬剤部、手術部、外来診察室、検査室、医療情報部等) 14~15. 実習後ワークショップ(9月): 他の学生との病院における様々な部署の業務、医療及び病院の現状に対する認識の共有、チーム医療における薬剤師の役割および多職種連携の重要性に関する討議、プロダクトの作成と発表</p>											
[履修要件]											
特になし											
[成績評価の方法・観点及び達成度]											
出席(40点)、グループ討議(プロダクト作成など)(40点)、実習レポート作成(20点)で評価する。グループ討議では議論やプロダクト作成への参加の程度によって評価する。実習レポートでは、薬剤師および他職種の業務に対する理解度、文章の表現力や論理性によって評価する。											
[本講義と関連する講義]											
「薬の世界」入門、地域医療薬学、医療実務事前学習、病院実務実習、薬局実務実習など											
[対応するコアカリキュラム一般目標(薬学科)]											
A(1)(2)(3)(4)、F(1)(4)											
----- 多職種連携医療体験実習 (2)へ続く -----											

多職種連携医療体験実習 (2)

[教科書]

プリントを配布します。

[参考書等]

(参考書)
授業中に紹介する

[授業外学習(予習・復習)等]

多職種連携医療体験実習では事前に配布される資料を読み、実習施設で医療者に業務内容等について質問ができるように準備すること。また、実習中は毎日実習内容をレポートにまとめる必要があり、これが成績評価の一部となるので注意すること。

(その他(オフィスアワー等))

能動的な態度で受講してください。受講希望者が40名を超える場合は抽選する可能性があります。

オフィスアワーの詳細については、KULASISで確認してください。

科目ナンバリング		U-PHA00 10000 SJ86									
授業科目名 <英訳>		早期専門研究体験 Early Research Exposure			担当者所属・ 職名・氏名		薬学研究科 教授 高須 清誠				
配当 学年	2,3回生	単位数	1	開講年度・ 開講期	2019・ 前期	曜時限	その他	授業 形態	演習	使用 言語	日本語
学科		薬学部,薬科学科,薬学科			科目に対する区分		選択				
[授業の概要・目的]											
分野配属前の2～3年次生のうち、薬学研究に対してモチベーションの高い学生を対象に、早期から研究分野の一員となり教員および院生の指導のもとで研究を実施します。研究に必要な考え方や技術に触れるとともに学年を超えた密度の濃い交流を経験することで、4年次からの特別実習（卒業研究）、大学院修士課程・博士（後期）課程での専門研究やその後の将来設計を考える機会が得られます。											
[到達目標]											
<p>早期に研究の一端に触れることで、学生は次のきっかけを得ることを目的とする。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 研究に対する具体的なイメージを抱いて学習に取り組めるようになる。 2. 薬学および関連領域について、より高い次元で考えることができるようになる。 3. 将来設計を考えることができる。 4. 同級生以外のコミュニティでのふるまいができるようになる。 5. 研究倫理、安全倫理について理解する。 											
[授業計画と内容]											
受入教員の計画と内容に従う。											
[履修要件]											
<ul style="list-style-type: none"> ・早期研究室体験を開始する直前のセメスターまでの必修科目をすべて修得していること ・専門研究を強く希望し、高い研究意欲を有していること。 ・大学院博士後期課程もしくは博士課程進学を前向きに検討していること。 ・受入担当教員との面談を経て、双方の条件（研究時間、指導方法など）を合意すること。 ・授業時間等を除き、研究活動に参加できる学生を対象とする。途中から来なくなる可能性がある場合は、早期研究体験を希望しないこと。 											
[成績評価の方法・観点及び達成度]											
平常点（出席状況、履修態度）		70%									
研究レポート		30%									
[本講義と関連する講義]											
基礎化学実験、薬学専門実習、特別実習											
----- 早期専門研究体験 (2)へ続く -----											

早期専門研究体験 (2)

[対応するコアカリキュラム一般目標 (薬学科)]

G

[教科書]

使用しない

[参考書等]

(参考書)
授業中に紹介する

[授業外学習 (予習・復習) 等]

受入教員の指示に従うこと。

(その他 (オフィスアワー等))

オフィスアワーの詳細については、KULASISで確認してください。

科目ナンバリング		U-PHA00 10000 SJ86									
授業科目名 <英訳>		早期専門研究体験 Early Research Exposure				担当者所属・ 職名・氏名		薬学研究科 教授 高須 清誠			
配当 学年	2,3回生	単位数	1	開講年度・ 開講期	2019・ 後期	曜時限	その他	授業 形態	演習	使用 言語	日本語
学科		薬学部,薬科学科,薬学科			科目に対する区分		選択				
[授業の概要・目的]											
分野配属前の2～3年次生のうち、薬学研究に対してモチベーションの高い学生を対象に、早期から研究分野の一員となり教員および院生の指導のもとで研究を実施します。研究に必要な考え方や技術に触れるとともに学年を超えた密度の濃い交流を経験することで、4年次からの特別実習（卒業研究）、大学院修士課程・博士（後期）課程での専門研究やその後の将来設計を考える機会が得られます。											
[到達目標]											
<p>早期に研究の一端に触れることで、学生は次のきっかけを得ることを目的とする。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 研究に対する具体的なイメージを抱いて学習に取り組めるようになる。 2. 薬学および関連領域について、より高い次元で考えることができるようになる。 3. 将来設計を考えることができる。 4. 同級生以外のコミュニティでのふるまいができるようになる。 5. 研究倫理、安全倫理について理解する。 											
[授業計画と内容]											
受入教員の計画と内容に従う。											
[履修要件]											
<ul style="list-style-type: none"> ・早期研究室体験を開始する直前のセメスターまでの必修科目をすべて修得していること。 ・専門研究を強く希望し、高い研究意欲を有していること。 ・大学院博士後期課程もしくは博士課程進学を前向きに検討していること。 ・受入担当教員との面談を経て、双方の条件（研究時間、指導方法など）を合意すること。 ・授業時間等を除き、研究活動に参加できる学生を対象とする。途中から来なくなる可能性がある場合は、早期研究体験を希望しないこと。 											
[成績評価の方法・観点及び達成度]											
平常点（出席状況、履修態度）		70%									
研究レポート		30%									
[本講義と関連する講義]											
基礎化学実験、薬学専門実習、特別実習											
[対応するコアカリキュラム一般目標（薬学科）]											
G											
----- 早期専門研究体験 (2)へ続く -----											

早期専門研究体験 (2)

[教科書]

使用しない

[参考書等]

(参考書)
授業中に紹介する

[授業外学習(予習・復習)等]

受入教員の指示に従うこと。

(その他(オフィスアワー等))

オフィスアワーの詳細については、KULASISで確認してください。

2018年度以降入学者用のモデル・コアカリキュラム/科目対応表

教育目標(一般目標)	科目名
A 基本事項	
<p>(1) 薬剤師の使命</p> <p>医療と薬学の歴史を認識するとともに、国民の健康管理、医療安全、薬害防止における役割を理解し、薬剤師としての使命感を身につける。</p>	<p>地域医療薬学 薬局方・薬事関連法規 薬学研究SGD演習 医薬品開発プロジェクト演習2 多職種連携医療体験実習 医療実務事前学習 薬局実務実習</p>
<p>(2) 薬剤師に求められる倫理観</p> <p>倫理的問題に配慮して主体的に行動するために、生命・医療に係る倫理観を身につけ、医療の担い手としての感性を養う。</p>	<p>「薬の世界」入門 薬学研究SGD演習 多職種連携医療体験実習 医療実務事前学習 薬局実務実習</p>
<p>(3) 信頼関係の構築</p> <p>患者・生活者、他の職種との対話を通じて相手の心理、立場、環境を理解し、信頼関係を構築するために役立つ能力を身につける。</p>	<p>薬学研究SGD演習 多職種連携医療体験実習 医療実務事前学習 薬局実務実習</p>
<p>(4) 多職種連携協働とチーム医療</p> <p>医療・福祉・行政・教育機関及び関連職種の連携の必要性を理解し、チームの一員としての在り方を身につける。</p>	<p>多職種連携医療体験実習 医療実務事前学習 薬局実務実習</p>
<p>(5) 自己研鑽と次世代を担う人材の育成</p> <p>生涯にわたって自ら学ぶことの必要性・重要性を理解し、修得した知識・技能・態度を確実に次世代へ継承する意欲と行動力を身につける。</p>	<p>情報基礎 情報基礎演習 薬学研究SGD演習 医薬品開発プロジェクト演習1</p>
B 薬学と社会	
<p>人と社会に関わる薬剤師として自覚を持って行動するために、保健・医療・福祉に係る法規・制度・経済、及び地域における薬局と薬剤師の役割を理解し、義務及び法令を遵守する態度を身につける。</p>	
<p>(1) 人と社会に関わる薬剤師</p> <p>人の行動や考え方、社会の仕組みを理解し、人・社会と薬剤師の関わりを認識する。</p>	<p>医療社会学 医薬品開発プロジェクト演習1 薬局実務実習</p>
<p>(2) 薬剤師と医薬品等に係る法規</p> <p>調剤、医薬品等(医薬品、医薬部外品、化粧品、医療機器、再生医療等製品)の供給、その他薬事衛生に係る任務を薬剤師として適正に遂行するために必要な法規とその意義を理解する。</p>	<p>医療社会学 薬局方・薬事関連法規 医薬品開発プロジェクト演習1 薬局実務実習</p>
<p>(3) 社会保障制度と医療経済</p> <p>社会保障制度のもとで提供される医療と福祉について、現状と課題を認識するとともに、薬剤師が担う役割とその意義を理解する。</p>	<p>地域医療薬学 医療社会学 薬局方・薬事関連法規 医薬品開発プロジェクト演習1 薬局実務実習</p>
<p>(4) 地域における薬局と薬剤師</p> <p>地域の保健、医療、福祉について、現状と課題を認識するとともに、その質を向上させるための薬局及び薬剤師の役割とその意義を理解する。</p>	<p>地域医療薬学 医療社会学 薬局実務実習</p>
C 薬学基礎	
<p>C1 物質の物理的性質</p> <p>物質の物理的性質を理解するために、原子・分子の構造、熱力学、反応速度論などに関する基本的事項を身につける。</p>	
<p>(1) 物質の構造</p> <p>物質を構成する原子・分子の構造、および化学結合に関する基本的事項を修得する。</p>	<p>基礎物理化学(熱力学) 基礎有機化学 I 有機化学 I 有機化学 II 有機化学 III 物理化学 I (量子化学) 物理化学 II (電気化学・ナノ化学) 物理化学 III (構造化学) 物理化学 IV (生物物理化学) 分析化学 I (化学分析学) 分析化学 II (放射化学) 分析化学 III (機器分析化学) 基礎科学演習 創薬物理化学演習 薬剤学 I (製剤学) 基礎バイオインフォマティクス 臨床薬学総論 薬学専門実習 I 薬学専門実習 III</p>

2018年度以降入学者用のモデル・コアカリキュラム/科目対応表

教育目標(一般目標)	科目名
<p>(2)物質のエネルギーと平衡</p> <p>物質の状態を理解するために、熱力学に関する基本的事項を修得する。</p>	基礎物理化学(熱力学) 基礎有機化学Ⅱ 有機化学Ⅱ 物理化学Ⅱ(電気化学・ナノ化学) 物理化学Ⅳ(生物物理化学) 分析化学Ⅰ(化学分析学) 基礎科学演習 創薬物理化学演習 基礎バイオインフォマティクス 臨床薬学総論 薬学専門実習Ⅰ
<p>(3)物質の変化</p> <p>物質の変換過程を理解するために、反応速度論に関する基本的事項を修得する。</p>	分析化学Ⅱ(放射化学) 基礎科学演習 創薬物理化学演習 薬剤学Ⅰ(製剤学) 臨床薬学総論 薬学専門実習Ⅰ 薬学専門実習Ⅲ
<p>C2 化学物質の分析</p> <p>化学物質(医薬品を含む)を適切に分析できるようになるために、物質の定性、定量に関する基本的事項を修得する。</p>	
<p>(1)分析の基礎</p> <p>化学物質の分析に用いる器具の使用法と得られる測定値の取り扱いに関する基本的事項を修得する。</p>	基礎化学実験 分析化学Ⅰ(化学分析学) 分析化学Ⅲ(機器分析化学) 基礎科学演習 創薬物理化学演習 臨床薬学総論 薬学専門実習Ⅰ
<p>(2)溶液中の化学平衡</p> <p>溶液中の化学平衡に関する基本的事項を修得する。</p>	基礎物理化学(熱力学) 物理化学Ⅱ(電気化学・ナノ化学) 分析化学Ⅰ(化学分析学) 基礎科学演習 創薬物理化学演習 臨床薬学総論 薬学専門実習Ⅰ
<p>(3)化学物質の定性分析・定量分析</p> <p>化学物質の定性分析および定量分析に関する基本的事項を修得する。</p>	基礎化学実験 分析化学Ⅰ(化学分析学) 基礎科学演習 薬局方・薬事関連法規 臨床薬学総論 薬学専門実習Ⅰ
<p>(4)機器を用いる分析法</p> <p>機器を用いる分析法の原理とその応用に関する基本的事項を修得する。</p>	基礎化学実験 天然物薬学Ⅱ(ケミカルバイオロジー) 物理化学Ⅰ(量子化学) 物理化学Ⅲ(構造化学) 物理化学Ⅳ(生物物理化学) 分析化学Ⅲ(機器分析化学) 基礎科学演習 創薬物理化学演習 臨床薬学総論 薬学専門実習Ⅰ 薬学専門実習Ⅱ
<p>(5)分離分析法</p> <p>分離分析法に関する基本的事項を修得する。</p>	基礎化学実験 天然物薬学Ⅱ(ケミカルバイオロジー) 物理化学Ⅳ(生物物理化学) 分析化学Ⅰ(化学分析学) 分析化学Ⅲ(機器分析化学) 創薬物理化学演習 臨床薬学総論 薬学専門実習Ⅰ 薬学専門実習Ⅱ
<p>(6)臨床現場で用いる分析技術</p> <p>臨床現場で用いる代表的な分析技術に関する基本的事項を修得する。</p>	分析化学Ⅲ(機器分析化学) 分析化学Ⅳ(臨床分析学) 創薬物理化学演習 臨床薬学総論 薬学専門実習Ⅲ

2018年度以降入学者用のモデル・コアカリキュラム/科目対応表

教育目標(一般目標)	科目名
C3 化学物質の性質と反応 化学物質を理解できるようになるために、代表的な有機化合物の構造、性質、反応、分離法、構造決定法、および無機化合物の構造と性質に関する基本的事項を修得する。	
(1) 化学物質の基本的性質 基本的な有機化合物の命名法、電子配置、反応、立体構造などに関する基本的事項を修得する。	基礎化学実験 基礎有機化学Ⅰ 基礎有機化学Ⅱ 有機化学Ⅰ 有機化学Ⅱ 有機化学Ⅲ 有機化学Ⅳ 天然物薬学Ⅰ(天然物化学) 物理化学Ⅰ(量子化学) 分析化学Ⅲ(機器分析化学) 創薬有機化学演習 臨床薬学総論 創薬物理化学演習 薬学専門実習Ⅱ
(2) 有機化合物の基本骨格の構造と反応 有機化合物の基本骨格となる脂肪族および芳香族化合物の構造、性質、反応性などに関する基本的事項を修得する。	基礎有機化学Ⅰ 基礎有機化学Ⅱ 有機化学Ⅰ 有機化学Ⅱ 有機化学Ⅲ 有機化学Ⅳ 創薬有機化学演習 物理化学Ⅰ(量子化学) 臨床薬学総論 薬学専門実習Ⅱ
(3) 官能基の性質と反応 官能基を有する有機化合物の性質、反応性に関する基本的事項を修得する。	基礎有機化学Ⅰ 基礎有機化学Ⅱ 有機化学Ⅰ 有機化学Ⅱ 有機化学Ⅲ 有機化学Ⅳ 物理化学Ⅰ(量子化学) 臨床薬学総論 創薬有機化学演習 薬学専門実習Ⅱ
(4) 化学物質の構造決定 代表的な機器分析としての核磁気共鳴(NMR)、赤外吸収(IR)、質量分析による構造決定法の基本的事項を修得する。	天然物薬学Ⅱ(ケミカルバイオロジー) 創薬有機化学演習 分析化学Ⅲ(機器分析化学) 創薬物理化学演習 臨床薬学総論 薬学専門実習Ⅱ
(5) 無機化合物・錯体の構造と性質 代表的な無機化合物・錯体(医薬品を含む)の構造、性質に関する基本的事項を修得する。	基礎化学実験 創薬有機化学演習 分析化学Ⅰ(化学分析学) 臨床薬学総論
C4 生体分子・医薬品の化学による理解 医薬品の生体内での作用を化学的に理解できるようになるために、医薬品標的および医薬品の構造と性質、生体反応の化学に関する基本的事項を修得する。	
(1) 医薬品の標的となる生体分子の構造と化学的な性質 医薬品の標的となる生体分子の基本構造と、その化学的な性質に関する基本的事項を修得する。	医薬品化学 天然物薬学Ⅰ(天然物化学) 天然物薬学Ⅱ(ケミカルバイオロジー) 物理化学Ⅲ(構造化学) 物理化学Ⅳ(生物物理化学) 生物化学Ⅲ(分子生物学) 生理学Ⅰ(基礎生理学) 生理学Ⅱ(病態生理学) 生理学Ⅲ(臨床生理学) 基礎バイオインフォマティクス 臨床薬学総論 薬学専門実習Ⅱ 薬学専門実習Ⅳ

2018年度以降入学者用のモデル・コアカリキュラム/科目対応表

教育目標(一般目標)	科目名
<p>(2) 生体反応の化学による理解</p> <p>医薬品の作用の基礎となる生体反応の化学的理解に関する基本的事項を修得する。</p>	天然物薬学Ⅰ(天然物化学) 天然物薬学Ⅱ(ケミカルバイオロジー) 有機化学Ⅰ 有機化学Ⅱ 有機化学Ⅲ 医薬品化学 物理化学Ⅲ(構造化学) 物理化学Ⅳ(生物物理化学) 生理学Ⅰ(基礎生理学) 生理学Ⅱ(病態生理学) 生理学Ⅲ(臨床生理学) 基礎バイオインフォマティクス 臨床薬学総論
<p>(3) 医薬品の化学構造と性質、作用</p> <p>医薬品に含まれる代表的な構造およびその性質を医薬品の作用と関連づける基本的事項を修得する。</p>	有機化学Ⅱ 医薬品化学 天然物薬学Ⅰ(天然物化学) 天然物薬学Ⅱ(ケミカルバイオロジー) 物理化学Ⅲ(構造化学) 物理化学Ⅳ(生物物理化学) 分析化学Ⅲ(機器分析化学) 創薬物理化学演習 基礎バイオインフォマティクス 臨床薬学総論 薬学専門実習Ⅱ
<p>C5 自然が生み出す薬物</p> <p>自然界に存在する物質を医薬品として利用できるようになるために、代表的な生薬の基原、特色、臨床応用および天然生物活性物質の単離、構造、物性、作用などに関する基本的事項を修得する。</p>	
<p>(1) 薬になる動植物</p> <p>基原、性状、含有成分、品質評価などに関する基本的事項を修得する。</p>	薬用植物学 天然物薬学Ⅱ(ケミカルバイオロジー) 天然物薬学Ⅲ(生薬学・漢方) 臨床薬学総論 薬学専門実習Ⅱ
<p>(2) 薬の宝庫としての天然物</p> <p>医薬品資源としての天然生物活性物質を構造によって分類・整理するとともに、天然生物活性物質の利用に関する基本的事項を修得する。</p>	薬用植物学 天然物薬学Ⅰ(天然物化学) 天然物薬学Ⅱ(ケミカルバイオロジー) 天然物薬学Ⅲ(生薬学・漢方) 臨床薬学総論 薬学専門実習Ⅱ
<p>C6 生命現象の基礎</p> <p>生命現象を細胞レベル、分子レベルで理解できるようになるために、生命体の最小単位である細胞の成り立ちや生命現象を担う分子に関する基本的事項を修得する。</p>	
<p>(1) 細胞の構造と機能</p> <p>細胞膜、細胞小器官、細胞骨格などの構造と機能に関する基本的事項を修得する。</p>	健康・生命科学入門 天然物薬学Ⅰ(天然物化学) 天然物薬学Ⅱ(ケミカルバイオロジー) 生物化学Ⅱ(代謝生化学) 生物化学Ⅲ(分子生物学) 生物化学Ⅴ(細胞生物学) 生物化学Ⅵ(生理化学) 生理学Ⅰ(基礎生理学) 生理学Ⅱ(病態生理学) 生理学Ⅲ(臨床生理学) 臨床薬学総論 薬学専門実習Ⅰ 薬学専門実習Ⅲ 薬学専門実習Ⅳ

2018年度以降入学者用のモデル・コアカリキュラム/科目対応表

教育目標(一般目標)	科目名
<p>(2)生命現象を担う分子</p> <p>生命現象を担う分子の構造、性質、役割に関する基本的事項を修得する。</p>	<p>健康・生命科学入門 天然物薬学Ⅰ(天然物化学) 天然物薬学Ⅱ(ケミカルバイオロジー) 物理化学Ⅱ(電気化学・ナノ化学) 物理化学Ⅲ(構造化学) 物理化学Ⅳ(生物物理化学) 創薬物理化学演習 生物化学Ⅰ(物質生化学) 生物化学Ⅱ(代謝生化学) 生物化学Ⅲ(分子生物学) 生物化学Ⅴ(細胞生物学) 生物化学Ⅵ(生理化学) 生理学Ⅰ(基礎生理学) 生理学Ⅱ(病態生理学) 生理学Ⅲ(臨床生理学) 臨床薬学総論 薬学専門実習Ⅰ 薬学専門実習Ⅱ 薬学専門実習Ⅳ</p>
<p>(3)生命活動を担うタンパク質</p> <p>生命活動を担うタンパク質の構造、性質、機能、代謝に関する基本的事項を修得する。</p>	<p>健康・生命科学入門 有機化学Ⅲ 天然物薬学Ⅰ(天然物化学) 天然物薬学Ⅱ(ケミカルバイオロジー) 物理化学Ⅲ(構造化学) 物理化学Ⅳ(生物物理化学) 生物化学Ⅰ(物質生化学) 生物化学Ⅱ(代謝生化学) 生物化学Ⅲ(分子生物学) 生物化学Ⅴ(細胞生物学) 生物化学Ⅵ(生理化学) 生理学Ⅰ(基礎生理学) 生理学Ⅱ(病態生理学) 生理学Ⅲ(臨床生理学) 臨床薬学総論 薬学専門実習Ⅰ 薬学専門実習Ⅳ</p>
<p>(4)生命情報を担う遺伝子</p> <p>生命情報を担う遺伝子の複製、発現と、それらの制御に関する基本的事項を修得する。</p>	<p>健康・生命科学入門 天然物薬学Ⅰ(天然物化学) 天然物薬学Ⅱ(ケミカルバイオロジー) 物理化学Ⅲ(構造化学) 生物化学Ⅲ(分子生物学) 生物化学Ⅳ(応用生物分子科学) 生物化学Ⅴ(細胞生物学) 生理学Ⅰ(基礎生理学) 生理学Ⅱ(病態生理学) 生理学Ⅲ(臨床生理学) 基礎バイオインフォマティクス 臨床薬学総論 薬学専門実習Ⅱ 薬学専門実習Ⅲ 薬学専門実習Ⅳ</p>
<p>(5)生体エネルギーと生命活動を支える代謝系</p> <p>生体エネルギーの産生、貯蔵、利用、およびこれらを担う糖質、脂質、タンパク質、核酸の代謝に関する基本的事項を修得する。</p>	<p>健康・生命科学入門 生物化学Ⅰ(物質生化学) 生物化学Ⅱ(代謝生化学) 生物化学Ⅴ(細胞生物学) 生理学Ⅰ(基礎生理学) 生理学Ⅱ(病態生理学) 生理学Ⅲ(臨床生理学) 臨床薬学総論</p>

2018年度以降入学者用のモデル・コアカリキュラム/科目対応表

教育目標(一般目標)	科目名
<p>(6)細胞間コミュニケーションと細胞内情報伝達</p> <p>細胞間コミュニケーション及び細胞内情報伝達の方法と役割に関する基本的事項を修得する。</p>	<p>健康・生命科学入門 物理化学Ⅳ(生物物理化学) 生物化学Ⅴ(細胞生物学) 生物化学Ⅵ(生理化学) 生理学Ⅰ(基礎生理学) 生理学Ⅱ(病態生理学) 生理学Ⅲ(臨床生理学) 薬理学Ⅰ 臨床薬学総論 薬学専門実習Ⅳ</p>
<p>(7)細胞の分裂と死</p> <p>細胞周期と分裂、細胞死に関する基本的事項を修得する。</p>	<p>健康・生命科学入門 生物化学Ⅲ(分子生物学) 生物化学Ⅴ(細胞生物学) 生物化学Ⅵ(生理化学) 生理学Ⅰ(基礎生理学) 生理学Ⅱ(病態生理学) 生理学Ⅲ(臨床生理学) 臨床薬学総論 薬学専門実習Ⅳ</p>
<p>C7 人体の成り立ちと生体機能の調節</p> <p>人体の成り立ちを個体、器官、細胞の各レベルで理解できるようになるために、人体の構造、機能、調節に関する基本的事項を修得する。</p>	
<p>(1)人体の成り立ち</p> <p>遺伝、発生、および各器官の構造と機能に関する基本的事項を修得する。</p>	<p>健康・生命科学入門 生物化学Ⅲ(分子生物学) 生物化学Ⅴ(細胞生物学) 生物化学Ⅵ(生理化学) 生理学Ⅰ(基礎生理学) 生理学Ⅱ(病態生理学) 生理学Ⅲ(臨床生理学) 薬理学Ⅰ 薬理学Ⅱ 臨床疾病論A 臨床疾病論B 臨床疾病論C 臨床疾病論D 臨床疾病論E 臨床疾病論F 臨床疾病論G 臨床薬学総論 薬学専門実習Ⅲ</p>
<p>(2)生体機能の調節</p> <p>生体の維持に関わる情報ネットワークを担う代表的な情報伝達物質の種類、作用発現機構に関する基本的事項を修得する。</p>	<p>健康・生命科学入門 臨床薬学総論 生物化学Ⅵ(生理化学) 生理学Ⅰ(基礎生理学) 生理学Ⅱ(病態生理学) 生理学Ⅲ(臨床生理学) 薬理学Ⅰ 臨床疾病論A 臨床疾病論B 臨床疾病論C 臨床疾病論D 臨床疾病論E 臨床疾病論F 臨床疾病論G 薬学専門実習Ⅲ</p>

2018年度以降入学者用のモデル・コアカリキュラム/科目対応表

教育目標(一般目標)	科目名
C8 生体防御と微生物	
生体の恒常性が崩れたときに生ずる変化を理解できるようになるために、免疫反応による生体防御機構とその破綻、および代表的な病原微生物に関する基本的事項を修得する。	
(1) 身体をまもる	感染防御学Ⅰ(微生物・ウイルス学) 感染防御学Ⅱ(免疫学) 臨床薬学総論 臨床疾病論D 臨床疾病論F
ヒトの主な生体防御反応としての免疫応答に関する基本的事項を修得する。	
(2) 免疫系の制御とその破綻・免疫系の応用	感染防御学Ⅰ(微生物・ウイルス学) 感染防御学Ⅱ(免疫学) 臨床薬学総論 臨床疾病論D 臨床疾病論F
免疫応答の制御とその破綻、および免疫反応の臨床応用に関する基本的事項を修得する。	
(3) 微生物の基本	天然物薬学Ⅰ(天然物化学) 天然物薬学Ⅱ(ケミカルバイオロジー) 生物化学Ⅲ(分子生物学) 感染防御学Ⅰ(微生物・ウイルス学) 感染防御学Ⅱ(免疫学) 臨床薬学総論 薬学専門実習Ⅱ 薬学専門実習Ⅳ
微生物の分類、構造、生活環などに関する基本的事項を修得する。	
(4) 病原体としての微生物	生物化学Ⅲ(分子生物学) 感染防御学Ⅰ(微生物・ウイルス学) 感染防御学Ⅱ(免疫学) 臨床薬学総論
ヒトと微生物の関わりおよび病原微生物に関する基本的事項を修得する。	
D 衛生薬学	
D1 健康	
人々の健康増進、公衆衛生の向上に貢献できるようになるために、現代社会における疾病とその予防、栄養と健康に関する基本的知識、技能、態度を修得する。	
(1) 社会・集団と健康	衛生薬学Ⅰ(健康化学) 臨床薬学総論
人々(集団)の健康と疾病の現状およびその影響要因を把握するために、保健統計と疫学に関する基本的事項を修得する。	
(2) 疾病の予防	衛生薬学Ⅰ(健康化学) 地域医療薬学 臨床薬学総論
健康を理解し疾病の予防に貢献できるようになるために、感染症、生活習慣病、職業病などについての現状とその予防に関する基本的事項を修得する。	
(3) 栄養と健康	衛生薬学Ⅰ(健康化学) 臨床薬学総論
食生活が健康に与える影響を科学的に理解するために、栄養と食品機能、食品衛生に関する基本的事項を修得する。	
D2 環境	
人々の健康にとってより良い環境の維持と公衆衛生の向上に貢献できるようになるために、化学物質などのヒトへの影響、適正な使用、および地球生態系や生活環境と健康との関わりにおける基本的知識、技能、態度を修得する。	
(1) 化学物質・放射線の生体への影響	分析化学Ⅱ(放射化学) 衛生薬学Ⅱ(環境衛生学) 地域医療薬学 臨床薬学総論 臨床疾病論B 薬学研究SGD演習 薬学専門実習Ⅲ
化学物質などの生体への有害作用を回避し、適正に使用できるようになるために、化学物質の毒性などに関する基本的事項を修得する。	
(2) 生活環境と健康	衛生薬学Ⅱ(環境衛生学) 薬学研究SGD演習 臨床薬学総論
地球生態系や生活環境を保全、維持できるようになるために、環境汚染物質などの成因、測定法、生体への影響、汚染防止、汚染除去などに関する基本的事項を修得する。	

2018年度以降入学者用のモデル・コアカリキュラム/科目対応表

教育目標(一般目標)	科目名
E 医療薬学	
E1 薬の作用と体の変化	
疾病と薬物の作用に関する知識を修得し、医薬品の作用する過程を理解する。	
(1) 薬の作用	薬理学 I 薬物治療学 物理化学IV(生物物理化学) 生理学 II (病態生理学) 生理学 III (臨床生理学) 薬理学 I 臨床疾病論A 臨床疾病論B 臨床疾病論C 臨床疾病論D 臨床疾病論E 臨床疾病論F 臨床疾病論G 臨床薬学総論 薬学専門実習 III
医薬品を薬効に基づいて適正に使用できるようになるために、薬物の生体内における作用に関する基本的事項を修得する。	
(2) 身体の病的変化を知る	分析化学IV(臨床分析学) 生理学 III (臨床生理学) 薬物治療学 臨床疾病論A 臨床疾病論B 臨床疾病論C 臨床疾病論D 臨床疾病論E 臨床疾病論F 臨床疾病論G 臨床薬学総論
身体の病的変化から疾患を推測できるようになるために、代表的な症候、病態・臨床検査に関する基本的事項を修得する。	
(3) 薬物治療の位置づけ	薬物治療学 医療社会学 臨床薬学総論
医療チームの一員として薬物治療に参画できるようになるために、代表的な疾患における治療と薬物療法に関する基本的事項を修得する。	
(4) 医薬品の安全性	薬理学 II 医療社会学 臨床薬学総論
医療における医薬品のリスクを回避できるようになるために、有害事象(副作用、相互作用)、薬害、薬物乱用に関する基本的事項を修得する。	
E2 薬理・病態・薬物治療	
患者情報に応じた薬の選択、用法・用量の設定および医薬品情報・安全性や治療ガイドラインを考慮した適正な薬物治療に参画できるようになるために、疾病に伴う症状などの患者情報を解析し、最適な治療を実施するための薬理、病態・薬物治療に関する基本的事項を修得する。	
(1) 神経系の疾患と薬	生理学 II (病態生理学) 生理学 III (臨床生理学) 薬理学 I 薬理学 II 臨床疾病論C 臨床疾病論D 臨床疾病論F 臨床薬学総論 薬学専門実習 III
神経系・筋に作用する医薬品の薬理および疾患の病態・薬物治療に関する基本的知識を修得し、治療に必要な情報収集・解析および医薬品の適正使用に関する基本的事項を修得する。	
(2) 免疫・炎症・アレルギーおよび骨・関節の疾患と薬	薬理学 II 臨床疾病論D 薬物治療学 臨床薬学総論
免疫・炎症・アレルギーおよび骨・関節に作用する医薬品の薬理および疾患の病態・薬物治療に関する基本的知識を修得し、治療に必要な情報収集・解析および医薬品の適正使用に関する基本的事項を修得する。	
(3) 循環器系・血液系・造血器系・泌尿器系・生殖器系の疾患と薬	生理学 II (病態生理学) 生理学 III (臨床生理学) 薬理学 III 臨床疾病論A 臨床疾病論D 臨床疾病論E 臨床疾病論G 薬物治療学 臨床薬学総論
循環器系・血液・造血器系・泌尿器系・生殖器系に作用する医薬品の薬理および疾患の病態・薬物治療に関する基本的知識を修得し、治療に必要な情報収集・解析および医薬品の適正使用に関する基本的事項を修得する。	
(4) 呼吸器系・消化器系の疾患と薬	生理学 III (臨床生理学) 薬理学 III 臨床疾病論A 臨床疾病論B 臨床疾病論G 薬物治療学 臨床薬学総論
呼吸器系・消化器系に作用する医薬品の薬理および疾患の病態・薬物治療に関する基本的知識を修得し、治療に必要な情報収集・解析および医薬品の適正使用に関する基本的事項を修得する。	

2018年度以降入学者用のモデル・コアカリキュラム/科目対応表

教育目標(一般目標)	科目名
(5)代謝系・内分泌系の疾患と薬 代謝系・内分泌系に作用する医薬品の薬理および疾患の病態・薬物治療に関する基本的知識を修得し、治療に必要な情報収集・解析および医薬品の適正使用に関する基本的事項を修得する。	生理学Ⅱ(病態生理学) 生理学Ⅲ(臨床生理学) 臨床疾病論C 臨床疾病論G 薬物治療学 臨床薬学総論
(6)感覚器・皮膚の疾患と薬 感覚器・皮膚の疾患と薬の薬理作用・機序および副作用に関する基本的知識を修得し、治療に必要な情報収集・解析および医薬品の適正使用に関する基本的事項を修得する。	生理学Ⅲ(臨床生理学) 臨床疾病論B 臨床疾病論E 臨床薬学総論
(7)病原微生物(感染症)・悪性新生物(がん)と薬 病原微生物(細菌、ウイルス、真菌、原虫)、および悪性新生物に作用する医薬品の薬理および疾患の病態・薬物治療に関する基本的知識を修得し、治療に必要な情報収集・解析および医薬品の適正使用に関する基本的事項を修得する。	天然物薬学Ⅰ(天然物化学) 天然物薬学Ⅱ(ケミカルバイオロジー) 感染防御学Ⅱ(免疫学) 臨床疾病論B 臨床疾病論F 薬物治療学 臨床薬学総論
(8)バイオ・細胞医薬品とゲノム情報 医薬品としてのタンパク質、遺伝子、細胞を適正に利用するために、それらを用いる治療に関する基本的知識を修得し、倫理的態度を身につける。併せて、ゲノム情報の利用に関する基本的事項を修得する。	生理学Ⅲ(臨床生理学) 薬物治療学 臨床薬学総論
(9)要指導医薬品・一般用医薬品とセルフメディケーション 適切な薬物治療および地域の保健・医療に貢献できるようになるために、要指導医薬品・一般用医薬品およびセルフメディケーションに関する基本的知識を修得する。併せて、薬物治療実施に必要な情報を自ら収集するための基本的事項を修得する。	医療社会学 地域医療薬学 臨床薬学総論
(10)医療の中の漢方薬 漢方の考え方、疾患概念、代表的な漢方薬の適応、副作用や注意事項などに関する基本的事項を修得する。	薬用植物学 天然物薬学Ⅱ(ケミカルバイオロジー) 天然物薬学Ⅲ(生薬学・漢方) 臨床薬学総論
(11)薬物治療の最適化 最適な薬物治療の実現に貢献できるようになるために、治療に必要な情報収集・解析および医薬品の適正使用に関する基本的事項を修得する。	薬物治療学 地域医療薬学 臨床薬学総論
E3 薬物治療に役立つ情報 薬物治療に必要な情報を医療チームおよび患者に提供したり、処方設計を提案したり、臨床上の問題解決ができるようになるために、医薬品情報ならびに患者情報の収集・評価・加工、臨床研究デザイン・解析などに関する基本的知識を修得し、それらを活用するための基本的事項を身につける。	
(1)医薬品情報 医薬品情報の収集・評価・加工・提供・管理・評価、EBMの実践、生物統計ならびに臨床研究デザイン・解析に関する基本的事項を修得する。	薬物治療学 医療社会学 臨床薬学総論 薬学専門実習Ⅲ
(2)患者情報 患者からの情報の収集、評価に必要な基本的事項を修得する。	薬物治療学 臨床薬学総論
(3)個別化医療 薬物治療の個別化に関する基本的事項を修得する。	ファーマコメトリクス論 医療社会学 臨床薬学総論
E4 薬の生体内運命 薬物の生体内運命を理解し、個々の患者の投与設計ができるようになるために、薬物の体内動態およびその解析に関する基本的知識を修得し、それらを応用する基本的技能を身につける。	
(1)薬物の体内動態 吸収、分布、代謝、排泄の各過程および薬物動態学的相互作用に関する基本的事項を修得する。	薬剤学Ⅱ(薬物動態学) ファーマコメトリクス論 臨床薬学総論 薬学専門実習Ⅲ
(2)薬物動態の解析 薬物動態の理論的解析ならびに投与設計に関する基本的事項を修得する。	薬剤学Ⅱ(薬物動態学) ファーマコメトリクス論 臨床薬学総論 薬学専門実習Ⅲ

2018年度以降入学者用のモデル・コアカリキュラム/科目対応表

教育目標(一般目標)	科目名
E5 製剤化のサイエンス	
製剤化の意義と製剤の性質を理解するために、薬物と製剤材料の物性、製剤設計、および薬物送達システムに関する基本的事項を修得する。	
(1) 製剤の性質	物理化学Ⅱ(電気化学・ナノ化学) 創薬物理化学演習 薬剤学Ⅰ(製剤学) バイオ医薬製剤論 臨床薬学総論 薬学専門実習Ⅲ
薬物と製剤材料の物性に関する基本的事項を修得する。	
(2) 製剤設計	薬剤学Ⅰ(製剤学) バイオ医薬製剤論 臨床薬学総論 薬学専門実習Ⅲ
製剤の種類、製造、品質などに関する基本的事項を修得する。	
(3) DDS(Drug Delivery System: 薬物送達システム)	薬剤学Ⅰ(製剤学) 薬剤学Ⅱ(薬物動態学) バイオ医薬製剤論 臨床薬学総論
薬物の投与形態や薬物体内動態の制御法などを工夫したDDSに関する基本的事項を修得する。	
F 薬学臨床	
患者・生活者本位の視点に立ち、薬剤師として病院や薬局などの臨床現場で活躍するために、薬物療法の実践と、チーム医療・地域保健医療への参画に必要な基本的事項を修得する。	
(1) 薬学臨床の基礎	多職種連携医療体験実習 医療実務事前学習 病院実務実習 薬局実務実習
医療の担い手として求められる活動を適切な態度で実践するために、薬剤師の活躍する臨床現場に必要な心構えと薬学的管理の基本的な流れを把握する。	
(2) 処方せんに基づく調剤	分析化学Ⅳ(臨床分析学) 薬物治療学 医療社会学 医療実務事前学習 薬局実務実習 病院実務実習
処方せんに基づいた調剤業務を安全で適正に遂行するために、医薬品の供給と管理を含む基本的調剤業務を修得する。	
(3) 薬物療法の実践	薬物治療学 医療実務事前学習 薬局実務実習 病院実務実習
患者に安全・最適な薬物療法を提供するために、適切に患者情報を収集した上で、状態を正しく評価し、適切な医薬品情報を基に、個々の患者に適した薬物療法を提案・実施・評価できる能力を修得する。	
(4) チーム医療への参画〔A(4)参照〕	地域医療薬学 医療社会学 多職種連携医療体験実習 医療実務事前学習 薬局実務実習 病院実務実習
医療機関や地域で、多職種が連携・協力する患者中心のチーム医療に積極的に参画するために、チーム医療における多職種の役割と意義を理解するとともに、情報を共有し、より良い医療の検討、提案と実施ができる。	
(5) 地域の保健・医療・福祉への参画〔B(4)参照〕	地域医療薬学 医療社会学 薬局実務実習
地域での保健・医療・福祉に積極的に貢献できるようになるために、在宅医療、地域保健、福祉、プライマリケア、セルフメディケーションの仕組みと意義を理解するとともに、これらの活動に参加することで、地域住民の健康の回復、維持、向上に関わることができる。	